
孤高の塵人

dy冷凍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤高の塵人

【Nコード】

N0876U

【作者名】

dy冷凍

【あらすじ】

友人に無理矢理生徒会に付き合わされて帰りが遅くなり、深夜のバスに乗った鎌夜修斗はそのまま異世界へ。そして狼に腕を喰いちぎられなんとかなったちゃう物語。

不定期更新。ハッハー。

第一章

遅い。とにかく遅い。

そろそろ日付が変わってしまった時刻。時間を守らないバスに苛立ちながらも俺はため息をついた。そのため息は白い靄になって空に消えていく。

今思い返せばあの時友人が生徒会の仕事手伝えとか言っただのが悪いんだ。てか俺、生徒会に入ってないし！ 何故に無理矢理教室から連れ出されたし！

そして嫌々生徒会室に入ると書類と睨めっこしてる見知った生徒会の方々。生徒会長の友人は教師と話があるらしく、どっかに行ってしまった。十人の内早くも四人がノックダウン。やる気ねえなおい！ そのカップルイチャつくない！

相変わらず自由すぎる生徒会のメンバーにツッコミを入れながらも机に乱雑に置いてある書類に目を通し、いらぬ文章はカットしている部分だけ写していく作業を黙々と続ける。

そんなこんなで夕方。作業が終わったので帰ろうとしたら友人が生徒会で打ち上げやるよー、なんて言うもんで帰ろうとしたら友人に十字固めを決められた。来い、と一言だけ言われた。これが……あれか、ツンデレってやつか？ 凄い気持ち悪い。

生徒会の打ち上げは馴染みの居酒屋で開催。お前生徒会じゃなくね？ って冗談混じりに言ってきた生徒会員達は頭を引っぱたいてやった。もちろんん女子には生クリームもびっくりするくらいソフトに

叩いたよ？

そして友人は調子乗って酒を頼んだ。学生服着てる奴に売ってくれるはずはなく、馬鹿にしていたらバツクから缶ビールを取り出して一気飲み。酎ハイ一杯で酔う友人がビールを飲んだのでぶっ倒れる。打ち上げが終わった後は何故か俺がおんぶして帰るハメに。

背中に微かだが柔らかい物を感じ、コイツ女なんだなーと再実感。しかし何回もトイレに行く姿は女らしさの欠片も見当たらない。そしてコイツの家は徒歩で二時間。乗り物に乗ったら車内が酸っぱい臭いで溢れるから歩きだよ。重いつて言ったら殴られた。理不尽だ。

家まで送ったら何故かケロツとした様子で俺の背中から飛びおりてアツカンベーをしてきた。相手にしないと拗ねるが放置。だって時間午後十時だしもう寝たかった。修斗のバカーって後ろから聞こえるが気にしない。ついでに携帯の電源も切っておく。これで俺は自由だー。

それで近くのバス停でバスを待つも来ないと。はい回想終わり。うだー。

もうすでに時刻は十一時半。引き返して泊めてもらおうか悩んだが、友人がツンケンしそうなので却下。だって俺人見知りだし。面倒くさいし。

そんな事を考えていたらやっとバスが来た。ブーツと俺の怒りを表すようなるるさい音が鳴って扉が開いた。

乗客は誰もいない。まあ人通りが少ないし気にしない気にしない。一人席に座ると思わず欠伸が漏れた。自分が降りる所は終点だし寝

てしまおう。

微かな振動とバスの快適な室温に負けて、俺は意識を手放した。

第二章

「起きて下さい」

肩をポンと叩かれて俺は青い座席に座りながら目を覚ました。首痛い。寝違えたか？

気づけば寝ていたようだ。ハードボイルドの言葉が似合いそうなクールな叔父さん、多分スーツを着ているから運転手だろう。彼に起こされて俺は半分寝たままバスを降りた。

「……眠い」

物凄い眠い。眉間を指で揉みながら歩こうとすると、パキッと何か小気味いい音が響く。

どうやら枝を踏んだようだ。何だ枝か、と気にせず歩き続ける。

そして住宅街では味わえない深い緑の匂い。山登りの遠足の時にこの匂いは味わったな

あれ？

変な違和感。俺はバスを降りて家の近くのバス停に降りたはず……。見慣れた建物は一軒もなく、一面見たこともない木ばかり。足元も踏みなれたコンクリートではなく、整備されていない土。

ここ、何処だ？

待て落ち着け。夢？にしてはリアルすぎる。夢の中だとこんな自由に動けないし、緑の香りも感じられない。これはエツチな夢を見たときによくわかる。夢じゃないなら異世界？それは無い。政府の実験？日本にそんな余裕があるはずない。

わからない。さっぱりわからない。とりあえずバスに戻ろう。だけど後ろにはバスどころか、そこに何かあった形式すらないただの生い茂った林しか見えない。

何で跡形もなく無くなっているんだと愚痴をこぼしながらバスを少し探してみるも、やはり何も見つからない。それにバスが通ってきた道跡すら見つからなかった。しかもここは相当山奥らしく、太い木がずらっと立ち並んでいるからバスがここまで来れるとも思えない。

一通り考えたがここで待機していても助けはこないと思ったので、ザクザクと草木が邪魔な道を歩いていく。整備された道もなければ獣道のようなものもないので、草木が凄い邪魔で中々思うように進めない。何処なんだー！と言っても視界一面木と草ばかり。って何叫んでんだ俺は。

そして暑い。日差しは上の木々が日陰になってるから当たらないがそれでも暑い。ワイシャツに黒ズボンだからあと少しすれば蒸れてきそうだ。着替えるにしてもそもそも着替えがない。そういえば荷物確認してなかったな。

教科書ノート、筆箱、空の水筒、空の弁当箱、携帯、財布。

携帯は電波無し。財布には小銭が少々。八方塞がりってやつですか？

とりあえず……川を探そう。水が飲めないと人間すぐ死んじゃうし。次は食料。都合良く果物でも生えていないだろうか。毒入ってたらアウトか。よし俺落ち着いてる。どっかのテレビで大声とか出したら駄目とか言ってたしな。俺天才！

無駄に伸びている邪魔な草や枝を掻き分けながら進む。お、開けた所に出た。

学校のプールくらいの広さはある澄んだ空色の湖、それを囲うように黄緑色の草が綺麗に生え揃っている、何かパワースポットっぽい所に出た。神秘的だなあ。どっかのファンタジー映画の中に入っみたいだ

湖を覗き込むと鏡でも見てるみたいに自分の顔が見える。相変わらずパツとしない顔だ。友人にはいつも寝ぼけてる阿保みたいな顔、なんて言われたっけ。……止めよう。凄く悲しくなってきた。

喉の渇きはここで潤せる（うるお）だろう。こんだけ澄んでる水なんだから寄生虫とかはいないだろうし。これだけ神秘的な湖に寄生虫いたらもう絶望しか湧かない。

シャツでろ過することも考えたが、我慢できずに両手で水をすくって一口。美味い。ミネラルウォーターもこんなに美味かったら毎日買っただけ。というかこの水で商売出来るんじゃないか。

「貴様何をやっている！」

いきなりドスの効いた声が後ろから聞こえたので恐る恐る振り返ると、馬鹿でかい狼が立っていた。え、あの狼が喋ったの？体長は軽トラツクくらいで、毛は宝石みたいに薄く輝く銀色。狼なんて生で見たのは初めてなので怖くて動けない。しかも喋るっぽいし。

「ひあ？」

俺のいきなり出た奇声を無視して狼は前足で何も無い空中を薙いだ。何やってるんだと思うのも束の間、自分の体がゴミみたいに吹っ飛んだ。苦しい。込み上げる嘔吐感。視界もノイズがかかったように見えにくい。一体何が……。

考える間もなく何か重いものがのしかかってきて、身動きが取れない。生臭い吐息が顔にかかって気持ち悪い。

耳元でおぞましい音がした。今まで聞いたことがない何か。右腕が熱い。ポトリと顔の横に何かが落ちた。

指。

指が俺の真横に見える。指。誰の？

俺の、だろうな。痛みは感じない。ただ熱い。熱い。そういえば人間規格外の痛みを受けるとショック死しないように痛覚が無くなるなんて話。うわぁ。何これ。何これ。

どうやら狼は俺で遊んでいるらしい。蟻をバラして遊ぶ子供。そんな感じだ。左腕もグチャ、って音と共に熱くなった。痛覚がなくてよかったと思う。というか痛みがあつたらこんなこと思えないだろうな。両腕喰いちぎられるなんて想像出来る痛みじゃないし。

俺このまま死ぬのかな。死ぬなら肌にしわを刻んで家族に看取られながら死にたかった。友人は……許してくれるだろうか。きつと許さないって言って突撃されるだろうな。あーあ。

俺は友人のこと好き……だったのかなあ。あいつとは幼稚園からの付き合いだし、死ぬんだったら告つとけばよかったなあ。

銀の狼が俺を見下ろしてくる。キラキラとした金色の捕食者の目で。

自分の頬に暖かい物が伝ったのを情けなく思いながら、スイッチを切ったテレビのようにプツンと、意識が途切れた。

第三章（前書き）

毎日更新って案外辛いYO

第三章

目が覚めたら透き通るような清々しい青い空が見えた。あれ？俺生きてる？恐る恐る腕をみると……ある。ふう。よかった。三口のヴィーナスみたいに美しくならなくて。

でも物凄く身体がだるい。それに両腕も筋肉痛のような痛みがある。

「目が覚めたかの？ 少年」

隣を見るとさっき腕を喰いちぎった狼が伏せてこちらを見ていた。わざわざ喰いちぎった証である赤化粧を口元に付けながら。

狼が喋ってる。もうそんなことはどうでもいい。これは夢なのか？神様の気まぐれなのか？何なんだここは。

「やあ。俺の腕は美味しかったかい狼君。それで何か用かい？」

俺は仰向けの体を起こして盛大に皮肉っていた。狼は気分が悪そうに喉を鳴らしているがもうどうでもいい。もう腕を喰いちぎられてるんだ。当たって砕け散れというやつだ。

「こら、争いは止めんか」

すると狼の後ろから背の低い子供っぽい人が出てきた。狼喋つてねえのかよ！凄いい恥ずかしい！

……声の高さからして女の子だろうか。白いワンピースを着た可愛らしい少女とも少年とも見える。しかも髪が真っ白だった。しかし違和感は不思議と感じなかった。同級生がいきなり髪真っ白に染めたらうげえ、ぐらいは思うけど。

「お主、奇妙な能力を持つておるな」

「……そりゃどうも。とりあえずここは何処なんだ？」

奇妙な喋り方をする子供に話しかける。もうここ異世界でしょ。軽トラック並みの狼見つかったらニュースでやるだろうし、俺腕喰いちぎられたし。何か狼の端っこにあるんだよねー。人間の腕が。あれ絶対俺のじゃん。今ある腕は義手かなんかか？だとしたら日本は凄い進歩してるな。どうせ義手じゃないオチだろうがねー。

「ここは神の森。人間にはここがバレぬように魔法をかけたのじやが、もう見つかってしまつとはな……」

「ああ。大丈夫。俺タイムスリップしてきたようなもんだから、まだ見つかってないと思うよ」

とりあえず人間はいるらしい。それに魔法。ファンタスティックですこと。神の森とか、もうね。現実逃避したいなー。

「タイムスリップとな。……神隠しかの？」

「ん？」

「いや、こつちの話じゃ。そうか。お主は異世界人という奴か」

理解が早くて助かる。こつちは理解する暇もないけどな！少なくとも地球上じゃないことはわかったよ！未だに夢覚めないかなーって思ってるよ！

「ふむ。お主何処から来たのじゃ？ 我が知っている所かも知れん」

「ああ。地球っていう星の日本から来ました。もしかして貴方が神様って奴ですか？」

「うむ。一概にもそう言えんが、神の中では上位神に属しておるぞ」

えっへんと偉そうに無い胸を張る少女。というか神様って複数いるのね。初耳DESU

「えっと……神様ー。僕を元の世界に帰して下さいー」

「残念ながら我にそこまでの力はない。別世界に生物を傷つけずに送れるのは最上神くらいかのー」

「じゃあ何で俺はえーと……最上神とやらに飛ばされたんですかー？ 神々の遊びとか言ったらぶん殴ります」

「度胸がある奴じゃの。最上神が何故お主を飛ばしたかは、残念ながら我にはわからないのじゃ」

急にしょんぼりする彼女。しょんぼりしたいのは俺の方だけどねー。狼は俺の腕ガジガジして遊んでるんじゃないよ。グロテスクで見られないよ。

「最近の最上神達はおかしなことを繰り返しておる。それで一部の神にその飛ばした奴らの世話をするように最上神に頼まれているのだよ。鎌夜修斗よ」

俺以外にも飛ばされている奴はいると。彼女に無理矢理理由を詰め寄りたくても狼がこっちを見て唸っているので怖くて出来ません。てか名前乗ったっけ？

「俺名前言ったっけ？」

「我がお主の担当だからわかるのじゃよ」

ふっふっふと含み笑いをする少女。イラッときたので頭を小突いてやる。狼が大きい体を起こしてこっちを睨みつけてきたが、少女がそれを手で抑えた。渋々また伏せになる狼。俺は鳥肌が未だに収まらないけど。

「多少の無礼は構わぬ。そう怒るなウルフィンよ。お主もいきなり飛ばされて苛立っているだろう？ 腹も減っただろう。何か食べながら話し合おうではないか」

座っている俺に小さい手を差し伸べてくる少女。戸惑っている俺の手を少女は強引に引っ張り上げると、太陽のような暖かい笑顔で草原の向こうへ駆け出していった。あははー待ってよーってやりたかったが狼が睨んできたので普通に追いかけた。狼怖えーよ。

「お主が元の世界に戻るためにはこの世界を平和にしなければいけないようじゃな」

単純明快。よし、やってやるぜ！

「ってなんでやねん」

「うむ。そう言つと思つたわい」

俺はそんな聖人じゃないし、というかそんなくらい神様がやれよつて話だし。ちなみにここは木の小屋。神様が住んでは思えない素朴な建物だったが、出てくるつまみは美味しかったので不満はない。ビスケットみたいなお菓子にオレンジジュース。地味に美味い。

「私の為にやってはくれんかの？」

「面白い冗談だね」

祈るように手を組んで上目遣いをお願いしてきたが、バツサリと切り捨てた。むう、と頬をリスのように膨らませる彼女。小窓から睨んでくる狼。狼がシニールすぎて笑いかけたが死にたくないのので止めておく。

「でも帰りたくないのか？　もしやお主あっちでは”にーと”というやつだったのか？」

「違うわ。未練がないと言えは嘘になるけどさー。世界平和にしろとか何年かかるんだって話だ」

「言い方がわるかったのう。世界を平和にしろ、ではなく世界を平和にするきっかけを作れ、の方が正しかったかのう」

「と言つても世界の状況がわからないし」

「簡単に言つたとあと十年すればこの世界が阿鼻叫喚あびきょうかんに包まれるそうじゃ」

無理だ。何だよ阿鼻叫喚って。

「まあとりあえずその能力があれば死にはしないから大丈夫じゃ」

「あ、俺能力なんか持つてるんだ。神様に与えられた能力ってやつ？」

「うむ。そのまま異世界に放り込んでみすぐ死んでしまうからなお主の能力は再生らしい。ウルフィンにズタズタに引き裂かれていた時はどうするか迷ったが、都合よい能力が付いててよかったわい。」

「あー。だから腕が生えてたのね。でも君が最初から狼止めとけば俺食べられずに済んだと思うんだけど？」

「そ、それはだな……ほれ、お主にぐるてすく？　の耐性をだな……」

忘れていたらしい。殴つてやろうと思つたが、狼が目を光らせているので震える拳を無理矢理下げた。それに俺の能力は再生らしい。アミーバか何かになつたのか俺は。もう無理矢理納得した。

「それとお主、湖の水を飲んだじやる？　あれはウルフィンが生まれた時から守っていた魔力の湖でな？　あれを一口飲んだらこの森全ての魔力を、二口飲んだら世界の魔力を手にすると言われていた湖なのじゃ。お主、どのくらい飲んだ？」
「えつと……一口だと思つよ」

ギロリと窓から睨んでくる狼の視線に思わず息が止まってしまう。怖い。怖い怖い。死ぬ。

「これウルフィン。一応我のミスなのだ。殺気を抑えないと修斗が死んでしまつぞ」

そう彼女が言つと狼は拗ねたような表情をして俺から視線を外した。視線で死ぬなんて絶対に有り得ないと思うが、少なくとも俺は窒息死するかと思つた。さっき俺はこんな怖い奴を皮肉つていたのよ。ぞつとするわ。

「まあそんな些細なことはどうでもいいんじゃない。別に修斗の魔力が

増えてもただ魔法が使えてほぼ不死身になるだけじゃし。再生には多量の魔力を使うからむしろ丁度よかったかもしれん。ウルフィンには悪いがの」

「それって結構やばくないか？ そんな適当で大丈夫なのかお前！？」

「何。一応上位神だからのう、心配は無用じゃ。それよりもこれからどうするかお主に決めて貰わねばのう。魔法学園で魔法を学び力を手に入れるか、商人となって産業革命を起こすか、旅人になり気ままに生きるか。我は三番目がお薦めじゃ。拒否権はない。我にも仕事があるのでな。さっさとせい」

あ、拒否権はないですか。そうですか。

まあ俺も元の世界には帰りたいし、もうやるしかないか。竜宮城みたいな展開にはならないらしいし、まあいいだろう。頼も抓りすぎて赤くなってきた。これは紛れもない現実。現実逃避してもしようがない……。いつか最上神とか言う奴は殴ってやるが。

「でも魔法学園とやらに行った方がいい感じがするんだけど……」

「手続きがめんどくさいのじゃ」

「随分と私的な理由だな！」

「それじゃ旅人、鎌夜修斗よ。行くのじゃ！ 聞きたいことがあればこれを見るのじゃ」

「おいちよつとま」

変な本を手渡されると少女はこちらに手を振ってじゃあの、というと消えてしまった。

そして急に眠たくなる。クッキーに睡眠薬でも入っていたのか。これからどうなるのか不安で仕方がないが、睡魔には勝てずに意識を手放してしまった。

第三章（後書き）

でも適t（ry……気楽に書いてるから楽っちゃ楽です。

第四章

起きたら一面砂漠だった。草一つ生えていない砂漠。空気は乾いていて息をするのが辛いと思える。足場も力を入れて歩かないと進めない。俺ミイラになるのかな、と思ったら少し遠くに建物が建ち並んでいるのが見えたので少し安心。何だか馬鹿デカイ塔みたいのも見える。

親切設計でよかつたと一息つきながら神様少女に貰った本をバツクにしまって街らしき所に向かう。足が思うように進まずに悪戦苦闘したが気合で乗り切った。しかし神様も肉体強化とかしてくれてもいいのになあ。運動神経は良い方だけれども。

「身分を証明出来る物を出して貰えますか？」

予想はしてたさ。受付のような所でみんなカードみたいな出してるから、この世界の身分証明書がないと街とか入れないんじゃないかなーとか、ギルドカードがないと入れないとか。案の定この結果だよ。

「……あーごめんなさい。砂漠で休憩してきた時に置いてきてしまったみたいです」

「砂漠で休憩ですか！？……貴方は魔術師だったのですか。大変申し訳ありませんが何か身分を証明出来る物がなければここをお通しする訳には……」

「いえ、こちらが悪いのですから気になさらずに。少し探してきま

すね」

何故か目を見開いている軽装の若い門番らしき人に別れを告げると、あの神様少女がくれた奇妙な本をバックから取り出して表紙を見るとこんな題名が書かれていた。

く神様の異世界人でもわかる異世界のことつ ミく

読みたくねえ……。切実に読みたくねえ……。貰った時本は黒かったと思うんだけど何故かピンクになってるし、何なんだよこれ。

とりあえず開いて目次を見してみる。なになに。鎌倉修斗の身分についてとかいうページを見してみる。ふむ、どうやら自分の財布の中に旅人と証明出来るカードが入っているらしい。見てみると確かに見覚えのないカードが入っていた。

黒いツヤツヤしたカード。名前と年齢が書かれているだけだが多分これだ。あと自分の身分は一般市民とあまり変わらないらしい。あと魔術師はかなり希少らしく金持ちの家の出身が多いんだとか。幼い頃からお金と時間をかけて色々頑張らないと駄目なんだとか。そして自分は魔法を使えるらしい。コツなんかも別のページにあったから今度見てみよう。

今日はもう疲れた。横になりたい。寝たい。出来れば今すぐ元の世界に帰りたい。

まだ問題は色々と山積みだが一個一個潰していかないと頭がパン

クしてしまう。別に時間制限があるわけでもないしゆっくりやっ
ていこう。早く帰れることに越したことはないが。

門番の人に黒いカードを見せるとサラツと流しそうめんの如く通
してくれた。疲れてた俺としてはありがたいがあんなに焦らなくて
もいいとは思った。後ろに人も並んでなかったし。

何処か泊まれる場所。食料。お金。出来れば色んなこと知ってる
人と仲良くなりしたい。本を読めって話だが正直面倒くさい。色々大
変だがまあ急がば回れ。焦りは禁物。まず泊まれる場所を探すと
しますか。

「あー」

木製のシミが目立つ屋根を見上げながら自然と漏れた一言。一応
宿は取ることに成功した。見た目は大きくて素朴な宿屋で、入ろう
か迷っている時に受付の見た目中学生くらいの人に見つかってしま
い半ば無理矢理泊まらされた。しかし値段も安く（相場はわからな
いが）朝夜二食シャワーつきの宿に泊まれたから少し満足。

通貨に関しての問題は悩みの一つだったが杞憂だった。金貨とかあると思いきや普通に一万円札を出したら五千円お釣りをくれまして。正確に言うところには自分が金貨や銀貨を出しているように見えているんだとか。詳しく書いてあるが視覚魔法がー、認識魔法がー、とか意味不明なことばかり書いてるので省く。

更に神様は俺にお金をくれた。最初にお金がなくて餓死は笑えないとかの理由で今手元には二十万ほどある。リッチな気分になって無駄遣いしないよう気を付けなければ。

言葉もちやんと日本語に聞こえるし文字も日本語に見える。翻訳魔法がー、とか書いてあるのでこれも無視。流石神様手際によるしいことだ。

まあ外に出て買い物とかもしたかったがスリとかにあつても困るので、今日はこの奇妙な本を全力で読むことにする。俺も外国に行ったとき財布をスラれたのでその経験が役にたった。なんたってここは異世界だし、石橋を叩きまくって渡るくらいが丁度いい。叩きすぎて壊してしまっても駄目なのもわかってるつもりだ。

「シユウトさん。夕飯の準備が出来たので食堂に来て下さい。場所がわからなければ今付いてきてくれればご案内します。用事がある場合は後で受付のサラがご案内しますので」

「わかりました。今行くので少し待っていて下さい」

本を読むのに疲れてきた頃だったので丁度よかった。扉を開けてお姉さんに付いていく。

そのお姉さんをバレないように斜め横から舐めるように見回す。締まったヒップ。クビレのあるウエスト。大きいとは言えないが小さくもないバスト。まあそんなことは置いといて。

異世界だから民族衣装で髪型も奇抜なのかなと思いきや、日本の田舎の人みみたいな服装の人が多かった。都会にいる人の服と比べると地味な色やデザインばかりだが、自分も服はあまりこだわりがないからあまり気にならなかった。

ちなみに彼女は純白のＴシャツにジーパンみたいな服装だった。髪型も奇抜な人はあまり見かけなかったが髪の色が様々で、日本と違って黒髪だけはまだ見たことがない。

それにあの本で見て印象に残った亜人という人種。そして亜人から更に犬猫兎みたいに別れているのだが、統括すれば人間と同じくらいこの世界にいるらしい。この街では人間しか見かけなかったので少し残念だ。猫耳生やしてるおっさんがいたら絶対印象に残るだろうし。

お姉さんに案内された食堂は思ったより広かった。サッカーとか出来そうなくらい広いにも関わらず、席は半分以上は埋まっていた。それに美味しそうな匂いと酒の匂いが立ち籠めている。木製の茶色い椅子と丸いテーブルがまばらに置いてあって、椅子が足りないのか酒樽を椅子にしてる人もいる。

そして奥では黒いバンダナをした料理人が生き生きとした表情で腕を奮っていた。そして料理を運ぶ黒いバンダナをした男女。食堂というよりウエイトレスがいっぱいいる酒場みたいな所だった。

「やつほーお兄さん。お客さんは食べ放題だからいっぱい食べていてねー」

後ろから話しかけてきたのは今日俺を無理矢理宿に呼び込んだサラさんだった。髪型は黄色のツインテールで、彼女の気さくな性格を表しているようだ。顔はあどけなくて幼く見えるが、いつもニコニコしているのでこっちも自然と明るくなる。

「ああサラさん。料理は何かオススメはありますか？」

「あ、もしかして食事に誘ってる？ ふふふ……。そっちの奢りなら同席してもいいよ？」

「仕事はいいんですか？」

「サラちゃんのお仕事は夕方までなのだ！ だから問題なし！」

豪快にサムズアップしてくるサラさん。別に食事には誘ってねーよと言いたいところだったが、まあ話し相手がいるに越したことはない。料理人の近くの席は激戦区で座れそうにないので入口の近くの席へ座る。まあ目の前で料理してくれるから人気なんだろう。

「よーし。サラちゃんいっぱい食べちゃうぞー！」

テーブルにあるメニューを見ながら無邪気に笑うサラさん。初めてレストランに来た子供みたいだな、と軽く馬鹿にしながらも俺もつい笑みが零れた。異世界に来て初めて楽しいと思えた今日この頃だった。

第四章（後書き）

基本土日はバイトで疲れてるので更新は無いです。気分がよかったですら更新しますが。説明章でしたね。ちよくちよく説明するのは難しいもんですね。

第五章

「余は満足じゃー」

「よかったですね。んじゃ俺はこれで。お代置いておきますね」

満足そうに腹をさすっているサラさんを置いて俺は食堂を立ち去った。今度は料理人の近くの席に座ってみたいものだ。特にサラさんオススメのギャウスの刺身という物が今まで食べた中でもトップ3に入るくらい美味かった。コリコリとした歯応えがたまらず、噛めば噛むほど溢れ出る旨味。ただ醤油がなかったのが少し残念だったが、それでも凄い美味かった。

部屋に戻ってまた神様少女の本を読み、日付が変わったと同時に本をしまってその日は寝慣れないベッドで寝た。明日は寝慣れてる敷布団で目が覚めないかと淡い期待を持ちながら。

鳥のさえずりで起きるとかお洒落な展開もなく、まあ普通に起きました。寝ぼけた顔を洗って部屋を見回してため息。もう現実と認めて頑張るしかない。

「よしっ。切り替えよう！」

声に出すことでそれを自分に強く言い聞かせる。まずは浮かぶ問題を一つ一つとノートに書いていこう。もしかしたら紙は貴重かも

しれないので無駄遣いはせずにしっかり書いていこう。凄い面倒くさい。

お金の問題。通貨の違いは何とかなったから問題ない。まだわからないことがあれば書いていこう。

食事と夜過ごす所の確保。これは一ヶ月くらいならこの宿で持ちそう。一泊五千円だから単純計算で四十日泊まれる。それまでに何か仕事を見つければ問題ないはずだ。一日二食は少し辛いが餓死はしないはず

黒髪による差別とかは今のところはない。いや、本当に見ないんだよね黒髪の人。忌み子とか言われなくてよかったー。

魔法のこと。昨日の夜魔法に関するページを見てまとめたところ、属性は火、氷、風、土、雷、水の六種類が基本で稀に光、闇の属性を持つ物が生まれるらしい。前の六種類は金と時間を費やせば誰でも手に入るが後の二種類は才能があるか無いかで決まる。

優劣は火 氷 風……と順番通り続いていて、光と闇は光？闇とお互いが弱点同士。光と闇の戦い……凄い格好いいです。

それと魔法は下級、中級、上級、最上級に分けられる。最上級は家一件を消し飛ばすくらいらしい。恐ろしや。魔法についてはこんなもの。本当は自分の魔力を感じてそれを操って魔方阵に流し込んで……なんて過程もあるが諸事情によりスキップする。

そして働く場所。就活しなきゃいけないと思いきや、自分の仕事は決まっているらしい。

俺はあの神様少女に旅人という職に就かされたそう。旅人は簡単に言くと商人と冒険者と情報屋を混ぜた感じ。各地を旅して特産物や獣の素材、そして色々な場所の情報売り込んで資金を稼ぐ。そんな職種らしい。

しかし旅人になるのに試験を受けなければいけない、ということはない。誰でも申請すれば旅人にはなれる。しかし知識もなく戦えもしなければ獣の餌になるか、商人に搾り取られるかのどちらかしか道は無い。安定しない仕事なので旅人はあまり人気がないらしい。

てか仕事じゃなくね？

……まあ資金に困ったらどっかで雇ってもらえばいいし、思っていたよりは何とかなりそう。

とりあえず一ヶ月はここに滞在して情報を集めよう。昨日はまだ夢心地で現実逃避していたが、寝て起きてからは段々と現実味が湧いてきて不安に押しつぶされそうになる。だけど頑張らなきゃいけない。知り合いもいないこの世界で頑張らないといけないんだ。

湧き出る不安を無理矢理押さえつけて朝食を食べに食堂へ向かうと、料理人の近くの席は既に埋まっていた。朝の八時でもこの有様とは思わなかった。なので次回は早起きしようと胸に誓った。

「やつほー。おはようお兄さん！ 今日洗濯日よりだね！」

「おはようございますサラさん」

朝からハイテンションなサラさんに挨拶して席に座る。何故か当

然のように前に座るサラさん。嬉しそうにメニューを開いている。

「えっと……」

「え〜！ 何か不満なの〜？」

今日は静かに一人でブレイクファーストを楽しもうとしてたんだがね……。サラさんはそれを言う暇も与えてくれずにウエイトレスを呼びつけ、勝手に注文を頼んで何処かへ行ってしまった。

俺も頼もうとメニューを開いてる間にウエイトレスは他の客の注文を取りに行ってしまった。少し落ち込みながらサラさんが持ってきた氷の入った水をちびちびと飲む。サラさんはニコニコしているというかずつと笑顔な気がする。何でいつもニコニコしてるのか聞いてみる。

「サラさんっていつもニコニコしてますね」

「そうかな。私にだって悩みの一つや二つあるんだよ〜？」

「へえ。例えばどんなことですか？」

「胸が大きくなるのか〜、みんなに子供に見られるとかいっぱいあるんだよ！」

確かに胸はまな板だけど十三歳くらいの人はみんなそんなものだろう。子供に見られるねえ……。だって子供じゃん。

「今何か失礼なこと思わなかった？」

「い、いや別にそんなことないですよー」

どこか怖い笑顔でじつと目をみつめてくるサラさん。怖かったの
で目を背けると足を踏まれた。しかしあまり痛くなかったので無視
して水を飲んでしているとグリグリされた。地味に痛い。

「お待たせしました。サンドイッチとペラー茶になります」

料理がきたのでウエイトレスからそれを受け取る。どうやらサラ
さんは自分のも注文してくれたみたいだった。彩りが良いサンドイ
ッチが四個と赤みのかかったお茶。少し酸味のありそうな匂いをし
たお茶だった。寝起きに飲むと目が覚めそうでいいなこれ。

「はい。これシュウトの分ねー」

「ありがとうサラさん」

「そういえば何でさん付けなのー？ 呼び捨てでいいよ？ ついで
に他人事も辞めて欲しいなー」

「んじゃサラ。注文してくれといてありがとう」

「どづいたしまして！」

その後サンドイッチをパパッと食べてサラに色々質問する。サラ
は見た目に反して物知りだったので助かった。

どうやらこの街は比較的治安は良いらしい。夜に裏路地とかを歩
かない限りは何も問題はないとのこと。

そして街の特産品や腕利きの職人の場所とか、本当に色々なことを教えてくれた。何でサラがそんなこと知ってるのかは謎だが。

お金稼ぎには何処に行けばいいかサラに聞くとギルドに行けとのこと。そしてこの街の地図を貸してくれた。今日はギルドに行つてその後は街の様子を見にいくとするか。俺はお代を伝票の上に置いて食堂を後にした。

お金はあまり持つていかずに街へ出た。だつて店の前を通るたびに面白そうな物がいっぱい置いてあるんだもの。少しくらいは……なんて考えを持ちそうだったからお金は最低限しか持つていかないことにした。

地図を見ながらギルドへと一直線。暗い所で撒くと星のように輝く粉とか、魔力を込めると電気が貯められる魔力変換機とか面白そうな物に後る髪を引かれながらも、何とかギルドに到着した。安定した収入が確保できるまでの辛抱だ。

ギルドは一軒家より少し大きい程度のサイズだった。見開き型の変わつたドアがなければ普通の民家と間違えてしまうくらい特徴がない。何かもつと巨大なのを想像してたせいか少しショボく見える。しかし見たところ人の出入りは激しいし派手な武器や盾を持っている人もかなり見受けられる。やはりギルドはこのようだ。

木製のドアを押して中に入ると人が多くいるせい、少し賑やかで暑かつた。受付らしき所に向かうと柔らかい微笑を浮かべたお姉さんがどうぞと椅子に手を向ける。

椅子に腰掛けて何か仕事がないか聞いてみる。

「ではギルドカードを提示して頂けますか？」

……っげえ。またこの展開かよ。凄い面倒くさそうなんだけど。

第五章（後書き）

またまた説明会でつ。下積みも大事だよー

第六章

「すみません。ギルドカードが無いんですけど、どうすればいいですか？」

「でしたら身分を証明出来る物を提示して頂ければお作り出来ますよ」

旅人のカードをお姉さんに預けると彼女は困った顔をした後、一言言って奥の方へ行ってしまった。凄い不安なんだが。

かなり遅いので神様少女の本でも読もうかなとバックに手をかけようとした時に、やっと奥から人が来た。

これまた柔らかい微笑を浮かべた若いお兄さん。髪は真っ白で服も上下真っ白。しかもこの暑い中長袖長ズボン。この人にあだ名を付けるなら絶対にシロだ。まっしろしろすけ、でもいいな。

「お待たせしてすみません。私はここのギルド長を務めさせて頂いているシロエアと申します」

こんな柔らかかな笑みを浮かべている人にハンカチ落としましたよ？なんて言われた女性は一目惚れするんじゃないかと思うくらいこの人は格好よかった。さぞモテるんだろうなあ。男の俺からしてもこんなんだし。さっきの受付のお姉さんも心ここにあらず、って感じだし。

「いえいえ、大丈夫ですよ。でも何か問題でもありましたか？」

「旅人の方は今ではあまり見ませんからね。彼女はここで十年働いてる古参ではありますが、旅人の方をご案内したことがないようなので私をご案内させてもらうことになりました」

「そうですね。それじゃあよろしくお願いします」

シロエアさん……シロさんでいいか。シロさんが下がっていいよ、と言つと後ろのお姉さんは顔を赤らめながら奥に去っていった。

「それで本日はどのようなご要件でこちらに？」

「ギルドで何かしらの仕事を受けたいんですけど、そのためにはギルドカードを作らなければいけないそうなのでカードを渡したんですけど……」

「そうですね。失礼ですが貴方は旅人になられたばかりではありませんかね？」

黒いカードをこちらに差し出しながらそう訪ねてくるシロさん。

うーむ。これは正直に言った方がいいのかな。聞くは一時の恥。聞かぬは一生の恥なんて言葉が浮かび上がる。

「そうですね。まだ旅人になって日が浅いもので……無知ですみません」

「いえいえ。旅人は今となってはほとんど見かけませんからね。しようがないですよ」

面倒くさいなんて表情はまるで感じられないシロさん。凄いねこの人。何かのプロって感じがするよ。

「説明は何処までしましょうか？旅人の全てを分かっているとは言えませんが、大体のことはわかるのでご遠慮せずどうぞ」

「とりあえずギルドカードを作って仕事がしたいのですが……」

「他のことは大丈夫ですか？」

「ええ。一応旅人についての資料はありますので。読むのをサボってこの有様ですが……」

「そうですか。色々なことを説明するのも私の仕事なので自分を責めないで下さいね」

クレーマーもこんな丁寧に対応されたら静まるんだろうなあ。……女性には効果抜群だろう。男の俺から見てもこの人凄い輝いて見えるし。そんな俺の地味な嫉妬など露知らず、シロさんは黒いカードを手にしながら何か説明しはじめた。

「まずこの黒いカードのことは旅人の証と言います。旅人の証はギルドカード、商人の証二つのカードを合体させた物、と考えになられて結構です。ですから貴方はギルドカードを作らずに旅人の証を見せればそのまま依頼をお受けすることが出来ます」

「あ、そうなんですか……お恥ずかしい限りです」

商人の証とギルドカードを合体させた物が……。かなり便利な物なんだなあ。商人の証がどれほど価値があるのかはわからないけど。

でもそんな便利な物が申請するだけで貰えるのに旅人は人気がないんだ？少なくとも俺は商売が出来て強い人がいたら憧れを持つと思うが。

「何か疑問をお持ちになられている顔ですね。どうぞ遠慮なさらずに言っして下さい」

「あ、えっと……。商人の証の価値はあまりわからないんですが、何でそんな便利な物が貰えるのに人気がないのかなあって」

「それは多分信用の問題ですね。ギルドカードにはランクというものが、依頼を達成する事に上がっていき、それによってギルドから信頼を得ることが出来ます。しかし旅人の証にはランクが記入されないで、ギルド個人の信頼が必要になります。ギルドカードを持つていれば他のギルドでもそのランクが適用されますが、旅人の証ではそれが出来ないで力を試す試験を受けなければいけないので少々面倒ではあります。」

商人の証はあまり詳しくないので大きな声では言えませんが、旅人の証で取引をすると舐められてしまうのではないでしょうが」

舐められるねえ。こいつ取引経験が浅いヒヨッコだから二割増しでいいだろうとか、そんな感じだろう。

「それにこの大陸は既に地図が出来上がって各地の名産品や観光場所もわかっているんで、情報も旅人に聞かなくても大丈夫なので……

あまり人気はないですね」

「なるほど」

「他にも何か聞きたいことはありませんか？」

「いえ、大丈夫です。今日はわざわざありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそ指導が行き渡っておらず本日はご迷惑をおかけしました。今後もよろしくお願い致します」

シロさんにお礼を言って俺はギルドを後にした。この黒いカード、旅人の証は使い勝手はいいが少し面倒くさい部分もあるな。それに旅人が少ない理由もわかった。むう。中々うまくいかないもんだ。

今日は仕事を受けるのが目的だったが、一回ギルドを出てしまつてまた戻るのも気が引けた。まだ日は傾いてはいないが今日は宿に戻つてまた本でも読むとしよう。あ、ついでに店も見て回ろう。この街は屋台や魔法に関する店がいっぱいあるので、見ているだけでも退屈しなさそうだ。

暗闇で光る粉……千円。握り拳程度の袋の中に空気に触れると発光する粉が入っていて、凄く幻想的な光を放つそうだ。中身を全部ぶちまければ一応目眩ましにも使えるらしい。よし買った！

魔力を込めるとシャボン玉がいっぱい出る機械……五百円。人体に有害な成分は入っていないのでお子様でも安心！少量の魔力で貴方をシャボン玉が包みこむことも出来ます。細かい穴が空いているので窒息することはありません、だって。買いました。一回シャボン玉の中に入れてみたかったんだ。

(お金持ってこなくて本当によかったよ……)

会計を済ました後に思った。これは我慢出来そうもない。俺から見たら全部宝石の山にしか見えないよあれは。見た目は小さい袋だ

が一軒家分の収納スペースがある袋も買ったが、少し割高だったから買えなかった。それと幼児の中に混じって嬉しそうに玩具を買う人って今思うと気持ち悪いな。店員も若干表情引きつってたし。

それでもご機嫌だった俺は小さく鼻歌を歌いながら宿屋へ帰ろうとした。露店の間から見える裏路地にいた小さい男の子が、いきなり横から出てきた手に引き込まれたのを見なければ俺は真っ直ぐ宿屋に帰れたのに。昼間から誘拐なんて治安良くねえーよ。サラは後で小突いてやる。

見捨ててもいいかもしれない。だって男だし。助けても利益ないしー。でも俺はそこまで冷血じゃないし、不死身らしいし、ご機嫌いいから男の子を助けにいきますか。こんなことが目の前で起きて助けにいかないのは男じゃないぜ。昔の俺だったら行かないだろうけど。

とりあえず裏路地に入っであの子を追いかけますか。喧嘩は慣れてはいないがしたことはあるし、相手が一人なら多分勝てるだろう。と気持ちを高ぶらせてみる。

第六章（後書き）

時間間に合わなかったけどまあいいよね

誤字修正。確信はない。誰か誤字見つけたら知らせてくれないかな
（チラッ）

第七章

薄暗くて少しカビ臭い裏路地を走る。前には子供を抱えた誘拐犯。ボロボロの布切れを組み合わせたような服装からして裏路地を拠点としているホムレスか何かだろう。子供を抱えているにも関わらず走る速度は俺とあまり変わらないようで、中々追いつけなくて若干焦っている。

しかもこの裏路地は意外と広いようだ。そして相手にとって裏路地は庭みたいなもの。追いかけてる中何度振り切られそうになったことか。

こんなことならさっさと魔法の練習しとけばよかつたと軽く後悔ぶつつけ本番で魔法が出るかはわからないし、あの子供も巻き込んでしまったら元も子もない。そこらに落ちている瓶を投げてはみるが相手は動く標的なので簡単に当たってもくれず。非常に困った。

十分くらい経っただろうか。体力に自信はあるもののかかなり疲れしてきた。地面が湿ってるから転ばないように気をつけることも忘れそう。ハンデを背負っている誘拐犯もそれは同じようだが中々諦めてくれない。ただだけシヨタコンなんだよ、あの野郎！

瓶は普通に投げても当たってくれない。というか疲れてるので誘拐犯に届く自信がない。なら瓶を地面に滑らせて転ばせるのはどうだ？子供が怪我しそうだがこの際仕方ない。地面を滑らせるように瓶を誘拐犯の足元目掛けて投げる。

だが誘拐犯はジャンプして瓶を避けた。避けた瞬間に息切れしながら勝ち誇ったような汚らしい笑みを浮かべる誘拐犯。だが息切れ

していて軽くはないお荷物を持ち、湿っている地面に着地したらどうなると思う？

案の定誘拐犯は足を滑らせて派手にコケた。これでコケなかったら諦めてたかもしれない。いや、本気でキツイ。脇腹痛い。

受身も取れずにコケた誘拐犯はどこか怪我でもしたようだ。酸欠の体に鞭をうちながら誘拐犯に近づいて、汚い腕から子供を引きはがす。捨て台詞の一つでも吐いてやろうと思ったが、そんな余裕はなかったのでちゃっちゃと逃げることにした。慌てている子供をお姫様抱っこして光の見える方へ走る。

「くそっ！ 待ちやがれ！」

誘拐犯は遅れながらも俺を追いかけてきたが、足でもくじいたのかさつきより遅い。悔しいのか顔を真っ赤にしている。そんな怒るなよ。笑いを堪えるのに耐えられなくなるじゃないか。クツクツク、と随分自分は調子に乗ってるようだ。クツクツクなんて心の中でも言ったの初めてだよ多分。

露店が密集した明るい場所に出て後ろを見ると、不気味な路地裏が見えるだけだった。ホッと一息ついて子供を地面に降ろして地面に座る。体からドツと汗が吹き出てワイシャツを濡らす。蒸れて気持ち悪い。周りの視線がグサツと俺の心に刺さるが疲れているので立ち上がる気にもなれない。

しばらく息を整え、立ち上がると子供が目の前から消えていた。ちよっと目を離れた隙に家に帰ったのか。お礼くらい言って欲しか

つたが、こつちも自己満足のためにやったんだろつから文句は言えない。

まずは宿に帰ってシャワーを浴びよう。ズボンも蒸れて気持ち悪いし、俺は地図を見ながら急ぎ足で宿まで向かった。

少し迷ったが何とか宿に到着。この地図使い古されてるみたいで行きつけの店や名所に印とかついてるのはありがたいんだが、俺には何かの暗号文にしか見えないので少し読みにくい。まあ借りてるんだし文句を言うのはお門違いなんですけどー。

受付に鍵を借りてシャワー室へ向かう。シャワーといってもレバーを捻ると排水管みたいな所から冷水が落ちてくるだけだが、この街の気温は高いので丁度いい。ただ量を細かく調整できないし水を使いすぎると追加料金を払わされるが。

それでも汗を流せればいいので贅沢は言わない。というかそろそろ服買わないとヤバいかなあ。一応洗ってはいるが乾かすのに時間がかかるからその間バスタオルだし。廊下歩いてるとひそひそ声が聞こえてきそうだし。

服を外に干してバスタオルを服変わりにして部屋に戻り、本を夕飯まで読む。この街は天気がよくて空気も乾燥しているせいか服はすぐ乾くので夕飯までには服を着れる。乾いた服を着て夕飯の時間に食堂行ったら何故かニコニコしてるサラがテーブルで待ち構えていた。奢らせる気満々じゃねえか。

俺が席を通り過ぎると後ろから頭突きされた。理不尽だ。ウエイトレスも苦笑いしている。

「今日は疲れたからお肉いっぱい食べる！」

自分で払って食べや、とも言えずに結局同席してしまった。俺って案外女に弱かったのかな。友人にもあんまり逆らえなかったし。あーあ。

この街では水は貴重らしい。気温は高いし空気も乾燥しているから雨もあまり降らない。だからここに生息している生物も水を確保するために様々な特徴を持っている。地面を深く掘って湿った土を食べて水分を補給したり、水を作る器官を備えていたり、とにかくいっぱいだ。

俺が止まってる宿はシャワー付きで食堂限定だが、水が飲み放題。水が貴重なこの街で何故こんなに水を多く客に提供出来るのかというところ……。

「私が水の魔法使いだからなんだなっ！」

サラは朝からテーブルを叩いてそう豪弁していた。どうやら彼女が魔法で水を作り出しているらしい。しかもサラはこの宿のオーナーだとも言い張っている。ウエイトレス三人に確認したがどうやら本当のようだ。サラは疑われたのが嫌だったのか頬を膨らませてい

たが。

あれから一週間が経った。それまでずっと情報収集という名の街巡り。ギルドに行ってお金を稼いでもよかったがまだ余裕あるからな。しかし一週間頑張ったおかげで情報も結構集まって魔法も使えるようになった。今度生物が何らかの理由で凶暴化したモノ、魔物にでも試してみる。普通魔法はそんなホイホイ使えるはずはないのだが、俺は生憎異世界人だから関係ない。

そして今日からギルドで依頼を受けることにした。まだお金に余裕はあるが日本気質なのか、余裕がないと落ち着かないので少し早めにギルドに行くことになった。

「サラの家ってお金持ちだったのか……」

「家は貧乏ではないけど裕福でもないよ。才能ってやつだねっ！」

どうやら血の滲むような（自称）努力をしたらしい。この見た目からそんな風には見えないが。

「ふーん」

「何その普通の反応は！ みんなはもつと驚いてるのに！」

俺の目の前に小さい水球を浮かべながらサラは怒っている。だって俺も魔法使えるし。魔法のことは後で詳しく説明するとする。今はお腹が減ってそんな気分じゃない。まあ自分の手から水が出てきた時は嬉しさより嫌悪感の方が大きかった。本格的に化け物みたい

だなぁと思った。まあ腕喰いちぎられて再生するって方がよっぽど化け物らしいけど。

「おい。そんな遠い目をされてもサラちゃん困っちゃうぞー？」
「んー、悪い。朝飯にするか」

もう奢ることに抵抗がなくなってきた。そろそろ末期だろうか。朝飯食ったらギルドに行つて仕事探しますか。

朝飯をさつさと食べてギルドへ。露店を見て回っていると見覚えのある子供を見つけた。一週間前に路地裏で誘拐されたあの子だ。俺を見るなり暗い路地裏にすっ飛んでいった。俺ってそんな怖い顔してたかな。ハハハ……。

相変わらず民家とあまり変わらないギルドの扉を開いて、受付へ行って旅人の証を渡す。お姉さんに怪訝な顔をされるがすぐにこちらに返された。

「ランクを凶るために試練を受けてもらいますがよろしいでしょうか？」

「あー、最低ランクからなら受けなくても大丈夫ですかね？」

「……大丈夫ですね。ではランクDと認識させて頂きます。早速依頼を受注しますか？」

受付から紙の束を受け取って流し読みする。なににな……。薬草を三本納品ねえ。一面砂漠の何処から取ってこいと。お、買い物と

かもある。他にも荷物運びや屋根の補強とかまで。

やっぱり最低ランクで受けれる仕事は誰でも出来るような仕事が多いんだな。魔物を倒す依頼はあまり見かけない。まあいきなり挑んで逃げ帰ってくるのもなんだし、まずは簡単そんな依頼を受けるか。

「んじゃこの食料の配達依頼を受けます」

「……わかりました。この依頼を受注します。」

お姉さん。その変な人を見る目はなんだ。かなり失礼じゃないか？いや、チキンなんでクレームとか送らないけどさ。

「ではこの矢印が向く場所へ向かって下さい。目的地に着くとグルグル回ります」

そう言われて黒い矢印を手渡された。手のひらくらいの大きさの矢印。何かのポケだと思ってどうノリツッコミしてやるのか試行錯誤していたら、矢印がふと水中を泳いでる魚みたいに矢印が浮遊して、ギルドの出口を指し示していた。え、何この矢印。早く来いとばかりに体を捻ってるんだけど。何かの魔法かな？

手を振るお姉さんに慌てて手を振り返しながらギルドを出て矢印を追いかけるが、矢印の進む速さが地味に早い。早歩きでやっと追いつけるくらい。何で人混みを避けながら競歩させる必要があるんだ。これだけでもう疲れそうだ。矢印もう少し自重してくれ。

やっと依頼者の家に着いた。扉の前でぐるぐると忙しそうに回っている矢印を押さえつけてバックに放り込み、扉をノックする。

「はい。どちら様ー？」

「ギルドの者ですけど。食料配達の依頼を受けにきましたー」

「あら、早いじゃないか。じゃあそこにある食料を夜までにココへ届けてくれるかい？」

食堂のおばちゃんみたいな人が出てきた。来るのが早かったのか驚いていたが、すぐに地図を持ってきて運ぶ場所を指さした。ここからはあまり遠くないからまあ楽勝だろう。

しかし食料が結構多かった。しかも重い物が上に積み上げているのか下の木箱がミシミシと悲鳴を上げながらへこんでしまっている。随分と適当なんだなあ……。あ、壊れた。

でも軽いものが多そうなので夜までには間に合いそうだ。箱を多く積み重ねて持ち上げる。おばちゃんが何か驚いていたが気にしない。この暑い中重労働を長く続けていたら熱中症を起こしそうだ。さっさと片付けてしまおう。

壊れた箱？ 結局自分が直したよ。随分とボロボロな箱になったけどな！

第七章（後書き）

昨日更新忘れしました。四千文字の文章が消えてやる気なくしてました

第八章

食料配達を終えて固いパンをかじりながら宿への帰り道を歩く。

食料配達の報酬は一万円とおばちゃん特製の固いパン。老人が歯を鍛えるために食べるらしい。俺の歯はさつきから悲鳴を上げっぱなしだけど。

雑用の仕事はパツと見て大量にあつたから魔物と命賭けて戦わなくても暮らしていけそうだ。だけど世界を平和にしないと俺は元の世界に帰れないからずっとこんなことをしているわけにもいかない。ここに暮らすって手もあるが、十年後に世界が阿鼻叫喚に包まれるらしいからそれも無理。俺が頑張らなきゃ無理だろう。

世界を平和にするって言うてもどうすればいいのかわからなかったが、一週間本を読み進めていったら何となくわかった。

この世界には巨大な大陸が一つしかない。その周りを海が囲っている感じ。そしてその大陸の真ん中を裂くように馬鹿みたいに高くて長い石壁がある。その向こうには亜人、反対側には人間が住んでいる。こんな極端な別れ方をしていれば関係が険悪ってことぐらいわかる。

更に亜人と人間は戦争を繰り返している。それも百年。よくそこまで続けられたものだ。そのせいで文化は発達せずに停滞している。魔法というものがなければ文化はもっと酷いことになっていただろう。

何で戦争が百年続いているのかはお互い戦争で消耗したら停戦を結ぶから。それで回復したら前回の戦争に参加した老兵達が互いに戦

争を持ちかけてまた開戦。今は停戦を結んでいるから平和だが十年後に戦争がまた起こるのだろう。

この血で血を洗うような歴史を止めるのが俺の目的だろう。神様はぬるま湯に浸かっていた現代っ子に無茶なことを押し付けてくれるものだ。というか無理じゃないかな？

だが可能性はある。俺は不死身。それに魔力が森一つ分あるらしいから魔法を普通よりはいっぱい使える。しかも俺の体はどうやら強化されていたらしい。今日重い箱を一気に持ち運べたのが証拠だ。最初は前と変わらない体だったが段々力が上がってきている気がする。

まあ最初から岩を握り潰せたり出来る力があつたらヤバいでしょ。握手したら相手の手が粉碎骨折とかしたら笑えないし、全力で走ったら地面が陥没して残像が残ったりしたら怖いし。

いきなりそんな力を手に入れたら制御が効かなくて困るから、神様が段々と身体能力が上がるようにしてくれたのだろう。何処まで上がるのかはまだわからないが。

まあ要するに俺はチートってこと。ハッハッハ。自分が怖いぜー。

取り敢えず戦争を止めるには力が必要だろう。やっぱり血の歴史を止めるには血を流す人を消すしかないだろうしな。血を流すなって言っ止めれるなら百年も続いてないだろうし。

もちろん人殺しなんかしたくないし話してはみるけど、それでも力は必要だろう。だから一ヶ月くらい資金稼ぎしたら武器とか道具買って魔物を倒して、色んな地に足を運んで顔でも広めておこうか

な。戦争の有権者なんかと仲良くできれば尚更良い。

お腹の虫が鳴いてるから俺は足早に宿へ帰った。固いパンは捨てた。食えないもんアレ。

亜人なんか死ねばいい。それがこの宿に泊まっている人の意見らしい。

食堂にサラが居なかったので待つてる間に聞き込みしたらこんな結果に。平和なんて無かった。不正もなかった。みんな死ね死ね言うから食堂の空気が黒く見えるよ。

しかもサラには亜人の話はするなと最近仲良くなったウエイトレスに釘を刺された。触れちゃいけない話題らしい。

民間人の亜人に対する憎しみが思った以上に強くて少し引いた。戦争の老兵だけが憎しみを抱いてるだけかと思っていたが、やはり百年も戦争するもんだから民間人にも憎しみは伝染しているらしい。冗談で俺亜人なんていつたらリンチされそうだもん。

亜人の方もそれは変わらないだろう。これは絶望しか湧かねえ。

ゴキブリ
Gが家に一万匹いるのがわかった時くらいに。

完全に味方がいない。民間人でさえこれだから軍には期待出来ない。亜人と仲良しになりましたよ、なんて持ちかけたらその場で切り捨てられそう。民間人の中には亜人を憎んでいない奴もいるかもしれないが、あまり希望は持てないな。

「おつす！ お待たせ！」

サラがご機嫌そうに肩をバンバンと叩いてきた。どんだけハイテンションなんだよ。痛いわ。

「……おつす。今日は遅かったな」

「今日はお水作るのに手間取っちゃってね。ちょっと疲れちゃった」

確かに少し疲れているようだ。いつもの輝かしい笑顔じゃなくて苦笑いといった感じだし、いつもは俺かウエイトレスからメニューをひったくるんだが今日はそれも無い。

「無理しないで寝た方がいいんじゃないか？ 別にここに毎日来てくてもいいんだぞ？」

その言葉がどこか気に入らなかったのか持つてきたコップを水が跳ねるくらい強く俺の前に置いてそっぽを向いてしまった。何だこ

いつ。人がせつかく心配してやってるのに。

「今日はシュウトの奢りだからね！」

「いつも俺が奢ってる気がするんだが……」

「何か言いました？ 私には聞こえなかったなー？」

おもむろにメニューを俺からひったくってブツブツと何か言っているサラ。こんな餓鬼みたいな奴が本当にここの店長をやっているのだろうか。店の売上の計算とかを他の人に丸投げしている光景がぼんやりと浮かんでくる。

注文をした後黄色のツインテールを揺らしながらサラはまたニコニコし始めた。料理を待つときはいつもこんな感じ。お子様ランチを待つ子供みたいだな。いや、馬鹿にしてるわけじゃないんだけどさ。お前小学生か？って思う時が多々あるからなあ。

そういえばこの異世界には米が無い。凄いな今更だけどね。炭水化物は多分パンだけ。麺とかもあるといいんだが。その代わりおかずがかなり豊富だ。魚、野菜、何かのお肉、とにかく豊富でこの世界の食べ物で人生全部使っても食べれるかわからないくらい。

とりあえずここにいるのも予定では三週間くらい。それまでにこの食堂のメニューを制覇したい。あと親切にしてくれたサラに何かプレゼントでもしてやるか。

「また遠い目してるよー？ 戻ってこーい」

「あ、悪いな」

「最近私という時いつもそんな感じだね」
「悪かったよ。ほら、料理来たぞ」

運ばれてきたのはコーンポタージュっぽいスープにパン。サラはこつちを半目で睨みながらパンをがじがじとかじっている。俺も一口……固っ！これ昼に捨てたパンじゃないか！？

「これってどうやって食べるんだよ……」
「甘いねシュウト。これだからシュウトは駄目な奴なんだ。バーカ」

と言っている割にサラのパンはまだ一欠片も削れてない。俺がスープに浸して食べている姿を見てうーうー言いながら固いパンをかじっている。人参加じってる兔みたいだ。

スープに少し浸すと固さは少しマシになって丁度いい柔らかさになる。うん。美味しい。

「……そろそろスープに浸したらどうだ？」
「私負けないもん！ こんなパンに勝てないようじゃ宿主なんて失格だもん！」

パンに負ける宿主。一週間はこれでサラをいじるとしよう。涎だらけのパンは見てて気分が悪いから無理矢理スープの中に落としてやった。ざまあ。

「こ、これはシュウトが勝手に落としたから私負けてないよね？」
「わかったわかった。はいそうですねー」

サラは猿みたいにキーツと声を上げてウエイトレスに渡されたナ
プキンをちぎれるくらい噛んでいた。愉快愉快。

第八章（後書き）

再読み込みボタンF5の恐怖。昨日と今日で五回しました。

第九章（前書き）

後書きはスーパーダイナミック言い訳タイムです。

第九章

お手伝いのシユウト。ギルドで俺はそう呼ばれているらしい。まあギルドの冒険者達はお手伝いのシユウト（笑）と侮蔑を込めて呼んでいるらしいが。理由は俺が一週間でDランクの民間人が依頼した仕事を全てやり遂げてしまったから。

いやね、どうやら俺の体は日数が経つ度に成長するんじゃないやなくて鍛えることで成長していくらしい。今じゃ成人男性の二倍は身体能力ある気がする。そのせいで日が進むごとに作業が効率化していつて、遂に楽な雑用依頼を消化してしまっただけ。最終日には四十件の依頼をまとめて受けて受付のお姉さんがマヌケ面してたっけ。

冒険者は俺のことを弱虫とか貧弱とか呼んでいるらしい。でも普通Dランクの雑用依頼は新人がたまにやる程度で、ギルドは溜まっていた依頼が無くなって大喜びしてるんだとか。シロさんからも一目されて今度お食事でもと誘われたが、周りの女性冒険者の視線が怖いので今度お話すだけにしておいた。

そして肝心の資金の方はかなり稼げた。何と約百万円。しかも色々興味のある物を買いまくったにも関わらずだ。更に依頼主からも色々貰ったので持ち物がゴチャゴチャしている。あの家一件分の収納が出来る袋が凄く役に立ってよかった。値はそれなりに張ったがあれは冒険する人にとっては必需品だろう。入れた物の重さが無くなるのもすばらしい。

今度は魔物の狩猟依頼を受けよう。武具はサラから聞いたオススメの店に今向かってるから、後は何をするかな……。道具はいっぱいあるから大丈夫だしまた本でも読んで魔物の予習でもしておくか。

そう考えながら歩き続けるとレンガみたいな物で出来た家の目の前に到着した。この街では少し珍しい石で出来た家。扉を開けると湿気の籠った熱気が俺の顔にまわりついてきた。

サウナにでも入ったような暑さ。正直今すぐにでもここから出たかったが、我慢して奥に進んでカウンターみたいな所に着いたが誰もいない。奥からも物音一つしないし照明も薄暗い。もしかして閉店してるなんてオチはないだろうな。

それにこの店は少し気味が悪い。ライオンみたいな装飾品が付いている大剣に、胸の所から悪魔みたいな顔が出ている鎧。気味が悪い物ばかり置いてある。この主人とはとても仲良くは出来なさそうだ。

「すみません。武器と防具を買いたいんですけどもー」

「おう。客か」

ダメ元でそう言ってみたら奥から渋いおっさんが物音も無くタオルで汗を拭きながら出てきた。熊みたいに大きい体格に仏みみたいな細目が印象的なおっさん。やせ細った怪しい人でも出てくると思っていたので少しだけ安堵する。

「武器は何がいいんだ？ 防具は軽く動きやすい方がお前はいいな。その見た目にしては鍛え上げてあるが、重装備はお前には早い」

細身で悪かったな。前の世界ではこれが標準だよ。てかこのおっさん接客する気なさすぎでしょ。客をお前呼ばわりですよ？

「武器は剣がいいです。あとはお任せします。素人が決めるより貴方が決めた方がよさそうなので」

「そうか。予算はいくらだ？」

「九十万くらいですかね」

少し驚いたのか線みたいな目をおっさんは少し開いた。まあ十代後半の少年が大金持ってたら驚くだろう。おっさんは奥に入ってガサゴソし始めた。

「わかった。じゃあ剣に防具で九十万となると……これだな」

おっさんがそう言いながら二つの木箱を持ってこちらにやって来た。開けてみると灰色のローブと長ズボン。それに自分の足くらいの長さの黒いロングソードが怪しく黒光りしていた。ちなみに俺の身長は175センチだ。遠くから見ると格好いいと言われて少し涙目になった記憶が蘇る。

「剣はいいんですけど、このローブと長ズボンは何ですか？」

防具じゃなくない？触つてみるとサラサラしていて触り心地は最高だが、獣に噛み付かれでもしたらすぐに破けてしまいそうだ。こ

んなのより飾ってある十万円の鉄の鎧の方が強いだろう。

「それは……声を大きくしては言えないが亜人の地方で偶然貰ったものでな。見た目に反して耐久性は鉄より高く軽くて動きやすい。更に魔法に大して耐性があるから魔物の放つブレスなどを食らっても燃えたりしない。他にも色んな効果が付属しているとんでもない代物だ」

「ただ亜人から仕入れた物だから売れないんですよね？」

「その通りだ。これだけ便利な防具は五百万はくだらないだろうが売れなきゃ意味がない。これがこの店で出せる最高の防具だ」

そりゃ凄いい防具だ。でもちよつと怪しい。何で俺が亜人を憎んでいないことを知ってるのだろうか。

「お前サラにここを紹介されただろう。そもそもここに飾ってある剣や防具が亜人の物だからな。この店に来る奴らは亜人をそこまで憎んでいない奴ばっかなんだよ」

ケラケラとからかうように笑うおっさん。というか俺の心サラッと読みやがったよコイツ。サラの知り合いだけに。……声に出さなくてよかったと思う。危ねえ。

「じゃあこのこの剣も亜人の代物なの？」

「これを作ったのは人間だがそいつは精霊族と結婚していた奴でな。曰く二人は最後村八分の末に殺されたらしくて、その傍らにあった

のがその剣のようだ」
「この剣返しますね」

何その呪いの剣。絶対触らない。絶対触らないからなっ！

「まあ最後まで聞けよ坊や。そのせいかこの剣には精霊が宿っている。精霊が宿ってる剣なんか人間が持つてるとしても片手で数えるほどだ。これは一千万はくだらない代物だが安い買い物だとは思わないか？」

「呪いみたいなので死ぬのはごめんだから遠慮しておくよ。てかさんな危ないもん捨てるよおっさん」

坊やなんて呼ばれたの初体験だよバーロー。さっきのロープもそんなんじゃないだろうな。これは凄い防御力がある鎧ですよ。ただし身に付けた者は死ぬ、みたいな。何その本末転倒な鎧。

「買ってよ。僕は役に立つよ」

「ほら、この剣もそう言ってるし買ってやれよ」

このおっさん何言ってるの。剣が喋るはずないじゃないか。H A
H A H A。

「聞こえてるんでしょ？ 僕強いんだよ？ 役に立つよ？」

ああ。このおっさんこんな可愛らしい子供みたいな声真似も出来るんだ。全く世の中わからないね。見た目熊なのにこんな声真似が上手いなんて。

しかも剣がカタカタと動いている。ははぁん。どつかに糸でも付けて動かしてるんだろ。全くこのおっさんお茶目だなあ。

「そろそろ認めるよ。現実逃避しても無駄だぞ坊や」

「うるせえ。剣が喋るとか馬鹿か。どうやって声を出してるんだよ
口も喉もないのに」

「これは自分の思ったことを相手に直接伝える魔法だから口は使わないよ」

「てめえは少し黙れ剣！」

剣を指先がコツコツと何ども叩く。痛い痛いとか聞こえてくるが知るものか。この剣喋るんだ！よし買ったなんて展開俺は認めたくない！何その無茶ぶり！

「さあ。買ったんだからもう帰った帰った。俺は忙しいんだ」

おっさんに店から無理矢理追い出され、人々が行き交う道端で呆然と立ち尽くす。手には灰色の服に喋る剣。何この理不尽な光景。

剣をそっと地面に置いて宿屋へダッシュ。我ながら凄いアイデアが浮かんだ。早速実行する。

「僕はある程度人の心が読めるから置いていこうとしても無駄だよ」

まあ大金叩いて買ってしまったんだから今すぐに捨てはしない。実は喋るだけで切れ味最悪とかなら隙を見せた瞬間に投げ捨ててやるが。

そのまま変な剣と喋りながら俺は宿に帰った。剣は心が読めるらしいので声には出していない。少なくとも剣と喋ってる可哀想な人にはならなそうだ。

宿屋に入って受付でニコニコしているサラに鍵を貰い自分の部屋へ行く。途中何か視線を感じたが気のせいだろう。

早速学生服を脱いで灰色のローブと長ズボンを着用。鏡に向かいあってクルツと回ってみる。知り合いのコスプレイヤーの気持ちがい少しわかった気がした。何処かむず痒いがちよっと気分が上がる。まあ友人の前ではこんなこと恥ずかしくて出来やしないが。

暑苦しいと思ったが案外着心地は良い。サラサラした生地だから清涼感があって学生服よりもこっちの方が良さそうだ。他にも何着か服は買ってあるが基本はこれ着よう。

「シユウトさん。少しいいですかー？」

最初に俺が舐めるように観察していたお姉さんがノックもせずいきなり入ってきた。彼女の目には鏡の前でクルクルしている自分。

「……ノックぐらいして下さいよ」

「フフッ。似合ってますよ」

顔から火が出そうだった。頑張ればマッチくらいの火を起こせそうだ。

「それで何か用ですか？」

「ええ。ちよつと受付でトラブルがあつてね。シュウトさんなら協力してくれるかなーと。お人好しですし」

「そこはかたなく馬鹿にしてる？」

「とんでもない。褒めてるつもりですよ？ サラに晩飯奢ってる女たらしって素晴らしいですよね」

「馬鹿にしてるじゃねえか!？」

まあ断る理由もないので受付へ足早に向かう。後ろから笑いを堪えるような声が聞こえるが何なんだろうか。トラブルってなんだろうな。酔ったおっさんが絡んできるとかそんなのかな？

「サラさん。お仕事が終わったなら一緒にお茶でもどうですか？ 出来れば今すぐにもでも婚約したいのですが」

「……えーと」

結果から言うと受付でサラがプロポーズを受けていた。いつからこの受付はプロポーズの受付になったのだろうか。

受付のテーブルに身を乗り出している若い男。髪型は青い短髪。長身。そして中々のイケメン。うぜえ。そしてあの案内娘はこの状況がわかってた上で俺を呼び出したと。後で何か奢って貰おうか。

周りの十数人の野次馬はかなり盛り上がっている。この中に割って入るのも気が引けるし知らんぷりして宿出ようかな。少なくとも危なくなったら野次馬が止めるだろうし。

顔をフードで隠してなるべく気配を消しながら入口に向かう。あんなのに構ってられるか。サラを巡って決闘なんて展開になったら目も当てられない。俺は誓いの言葉を言おうとした新郎新婦に割って入りたくはないぞ。

しかし入口まであと少しのところ以案内娘が後ろから俺のフードをひっぺかしやがった。後ろに振り返って何をする、と言う前にサラと目が合う。しばしの沈黙。

俺が頑張って微笑を浮かべるとサラも返してくれた。出来るだけ

自然に入口に手をかけると後ろから甲高い声が聞こえてくる。

「コラー！ シュウトー！ 待ちなさい！」

サラの大きな声で野次馬の大半が俺の方に視線を投げかけてきた。お、トライアングル完成しちゃうのか？なんて声が聞こえてくる。ふざけんな。そんな昼ドラ展開を俺は求めていない！

そして親の敵を見るような目で俺を睨んでくる青髪短髪君。マジで勘弁して欲しい。いやね、もうお家帰りたい！

「大変なことになっちゃったねシュウトさん」

「あのなあ……」

案内娘が向日葵のような笑顔をこちらに向けてくる。表情と行動が一致してないよこの人！鬼だ！

「お前は誰だ。邪魔をしないで貰いたいんだが」

ほら、青髪君怒ってるよ。もう嫌だ。とりあえずだんまりを決め込んでおく。余計なことと言って面倒なことになったら本気で死にたくなる。服装も高価そうな装飾品が付いているから相手にしたくないなあ。

「ほらシユウトさん。ビシッと行ってやって下さい」

「案内娘よ。何で俺！？ 野次馬の中にいる屈強な体つきのおっさんに任せるよ！ あれは何を言っても止まらない奴だよ絶対！ 力づくで宿から追い出せよ！」

「実はあの人が結構強いらしいんですね。ギルドではAランクらしいですし」

「俺Dランク！ AとDだったらAの方が強いじゃん！ 何その嘸ませ犬！ 俺は引き立て役ですか！？」

「ああもう。愛のパワーでサラツと倒してくださいよ。サラだけに」「自分で言ってるけど面白くないからねそれ！？ 寒いからね！？」

言い合いだけでもう疲れた俺は！俺が肩で息してるのに案内娘は息も乱してないよ！何この歴然とした差は！理不尽だ！

「お前は俺をからかっているのか……？」

青髪君がどうやら完全にキレたようです。殺気みたいなので出ますよー？周りの野次馬汗流しながら黙り込んだよー？俺は黙らないのかって？腕喰いちぎった狼の殺気の方が百倍怖かったので大丈夫だよ。何か凄い頭の良い子供を相手にしてるみたいだ。

「中々の殺気ですね。私には届かないみたいですが」

「案内娘なのに暗殺者みたいな台詞言ってるよこの人！？」

「でもお手伝いのシユウトさんでも怖気付かない殺気ってどうなん

でしょうね」

「お手伝い殺気！」

周りが静まり返ってる中変なポーズを決めてこんなこと言うもんだから俺がシラケたみたいな空気になった。地味にシヨック。ていうか俺テンションおかしくなってるよな？

「お手伝いのシュウト？ ああ。最近Dランクの簡単な依頼をあさっていた奴か。黒目に？髪と言っていたし、お前だったか。道理で腑抜けた面をしていると思ったよ」

青髪が鼻で笑いながら俺を見下したような目で見てくる。凄い偉そうだな。まあ魔法使いは基本お金持ち出身で更に希少な魔法を使えるから偉そうにしてもいいらしいけど。

「そうですよ。あのお手伝いのシュウトです。あ、ちなみにサラの彼氏ですので婚約申し込むなら彼に決闘でも申し込んで勝ってからにして下さいね」

「お前は話をややこしくするな。流石にAランクと決闘とか洒落にならん。別に無理矢理誘ってるわけでもなかったし好きにしてくれ」

舌打ちするなよ案内娘。今になってやっと冷静さが戻ってきた。案内娘のおかげで調子を狂わされたがノリでAランクと決闘とか笑えない。無理無理。いきなりボスに戦い挑んで勝てるわけねえよ。コツコツ雑魚敵から倒さないとボスは倒せない仕組みになってるん

だよ。

それにもし間違えて四枝が欠損して再生でもしたら凄い騒ぎになりそうだし。新種の亜人と勘違いとかありそうだからしばらくは目立つ所で派手なことは出来ない。

だから俺は宿屋を出る。何。戦略的撤退つてもんだ。青髪に背を向けて出口へ一直線。

「逃げるのか。流石はお手伝いのシュウトだな。腰抜けが」
「何とでも言え。勝てない試合なんかしても意味ないよ」

ひらひらと後ろに手を振りながら宿屋を出ていく。冷静っぽく返していたがかなり頭にはきている。が、今はそんなことしてる場合じゃない。出来るだけ早く強くなって亜人の国へ行く。さっさと世界平和にして元の世界に帰るんだ俺は。

第九章（後書き）

寝不足で三日間安静処置。どうしてこうなった。

まあ案の定詰んできたんで更新ペースは落ちますがまあ何とかなる。

第十章

宿屋を出てしばらくぶらぶらした後、武器も防具も手に入れたのでギルドへ向かうことにした。後でサラに怒られそうだがまあいい。

もうすっかり見慣れてしまった露店を見回りながら裏路地をチラリと見る。この前助けたショートカットの男の子が丸っこい目で見つとこちらを見ている。ここ最近自分はストーキングされていた。男の子に。

しかし目が合うと裏路地に引っ込んでしまう。本当に何がしたいのかわからない。

それに裏路地に引っ込んでいくということは彼も裏路地の住人っぽい。じゃあ何故誘拐されたのかはあまり深くは考えない。考えるだけ無駄だ。俺はあの子を救う気なんて無いんだから。

何も出来ないお荷物を抱えて旅が出来るほど俺は旅慣れていないし余裕もない。だから見捨てる。頑張ればこの街で平和に暮らせるよう配慮は出来るが面倒なのでしない。

(シユウトって結構冷酷なんだね)

(うるせーよ剣。俺はさっさと世界平和にして元の世界に帰りたいんだ。困ってる人は出来る限り助けるが、自分が困っちゃったら元も子もないだろ)

そんな愚痴をぼやきながらギルドの扉を開く。冒険者達が珍獣で

も見るような視線を投げかけてくるが全部スルーして受付へ。

ここで少し問題発生。受付は三つある。二つは他の冒険者が使っている。じゃあ残り一つを使えって話だが、受付してる子がね……。

釣り目が若干強いが可愛らしい短髪の女の子。しかし性格は最悪。俺にだけかもしれないがな！

そもそも俺が雑用系の依頼を受けてるのを最初にバラしたのはあの子で更に弱虫とか言い出したのもあの子。裏は他の受付から取れている。何この悪質ないじめ。恨みを買った覚えはないんだが。

五日前くらい前から避けてはいたのだが遂に出くわしてしまった。まだ直接話したことはないが絶対性格悪いつてあれ。

他の受付に並ぶか悩んでいたらいつの間にか釣り目の少女は俺の目の前に立っていた。瞬間移動でもしたのかコイツは。

「そんな所に立っていたら邪魔です。本日はどのようなご要件でしょうか。雑用依頼は残念ですがありませんよ？」

周りの冒険者が笑いを耐えてるのか口を抑えている。俺は今どんな顔してるだろうか？まさかこんな堂々と挑発してくると思わなかったから、鳩に鉄砲を向けられたような表情をしてるだろう。いや、どんな顔だ。まあ、何か知らんがどうやらあっちはやる気満々のようだ。

「今日は狩猟依頼を受けるので大丈夫ですよ」

彼女はその言葉に不機嫌そうに眉を動かすと受付に戻った。俺もそれに付いて行って椅子に腰を下ろす。隣の受付娘がこっちを見てそわそわしている。そわそわするなら助けてくれ。

「それではこちらからお選び下さい。私のお薦めはミニゴーレムです。初心者にピッタリの魔物ですよ」

魔物に大して知識がなかったら親切な受付だな、くらいは思っただろう。ただしミニゴーレムは魔物というよりただの岩だ。真ん中にあるビー玉みたいなのが核でそれに軽い衝撃を与えると即死するし、しかも唯一動けない魔物としてよく知られている。普通は岩が欲しい岩加工の職人しか用のない魔物だ。どうせ皮肉のつもりだろう。

近くにいた冒険者数人はその皮肉が面白かったのかニヤニヤしているし、受付の少女も煽っているような汚らしい笑みを浮かべている。青髪にも煽られて若干イラついていたので目の前にいる少女をぶん殴つてやろうと思ったが、何とか思いとどまった。このままじゃ俺が悪役になってしまう。あくまで彼女はミニゴーレムをお薦めしたただで別に俺を馬鹿にしたわけではない。

それに味方もいないこの状況では暴力に走つたら間違はなく俺が悪者になる。今は耐えろと沸騰しかけてる頭に言い聞かせる。カルシウムが足りないのか俺は。よし落ち着け俺。

「ヘルスコープオンを十匹討伐の依頼を受けますね」
「……貴方では少し荷が重いのではないのでしょうか？」
「そうだとしたら砂漠で野垂れ死ぬだけですよ。お手伝い君がいなくなつたつて貴方には関係ないでしょう？」

これまた不機嫌そうに依頼書を渡してくる彼女。手渡しではなく机に滑らせるように渡してきた。ちよつとシロさんへの信頼度が下がった。教育してませんよねこれ？俺が何かしたならまだしもこれは流石に酷いぞ。

（流石に失礼だねこの女の子。ズツタズタにしてあげよつか）
（怖いこと言うな剣。俺だってズツタズタのベキャベキャにしたいんだ、我慢しろ）

カタカタと震える剣をコツンと叩く。少し間が空いて気まずかつたので、依頼書を取って俺はさっさとギルドを出た。

ヘルスコープオンは街を出て百メートルも歩けばすぐ出てくるらしい。十匹単位で巣穴を持って行動していて、その赤黒い甲殻と獲物を巣穴に引きずり込む習性から地獄のサソリと名付けられたらしい。後ろにある尻尾には神経を麻痺させる毒がたっぷり詰まっている。

砂漠の乾燥した砂でどう巣穴を作っているかというところ、唾液で砂を固めているらしい。十匹いれば巣穴が出来るから大体十匹の群れになつているんだとか。

まあ困まれたりしたら厄介だが赤ちゃん程度の大きさだし、焦ったりしなれば苦戦はしないだろう。本にも初心者向けのモンスターって書いてあったし、剣に関しては素人だが魔法もあるし不死身だし。まあ魔法を実践で使うのは初めてなんですけれども。

ただ不死身でも毒は効くのだろうか。もし効くんだったら最悪だ。巢に連れてかれたら食べられては再生してまた食べられて、とかになりかねない。そしてら本当の地獄だ。もしもの時のために解毒薬は買っているので大丈夫だとは思っけど。

(剣の素人でも僕がいるなら大丈夫だよ！ 相手に当ててさえしてくればね)

(そりゃ頼もしいですこと)

俺を流しそうめんの如くスルツと通してくれた門番に挨拶して砂漠へと旅立つ。相変わらず歩きにくい地面だが最初の時よりは全然疲れない。身体能力上げとけよなんて言ってた頃が地味に懐かしい。というかあの時よく魔物出なかつたな。一キ口は街まで歩いたと思うんだが。

大きい砂岡を登っては降りを繰り返しているとやっとサソリの巢穴を見つけた。不自然に砂が盛り上がっている所を剣でつつくとわらわらと蟻のように出てきた。

ざつと五十匹くらい。

(わらわらと沸いてくるんですけれども。これが温泉だったらどんなに嬉しいことか)

(温泉って何さ?)

(剣からすると砥石みたいなもん)

(それは凄く嬉しいなあ。実際はヘルスコープオンだけだね)

俺の視界がびっしり赤色に染まってしまった。悪夢だ。キチキチと甲殻が擦れ合う音を立てながらゆっくりと赤いサソリが近づいてくる。

とりあえず先頭に突き出ていたサソリに剣を振り下ろしてみるとキシヤヤと悲鳴を上げながらサソリの胴体が綺麗に別れた。中からは緑色の体液が吹き出てきてピンク色の臓器らしきものも伺える。これは気持ち悪い。思ったよりグロテスクで少し吐き気が込み上げてきた。

それにしても肉を斬ったという感触が全く感じられなかった。空気で斬るような感覚。流石に大口を叩くだけはあるようだ。ただ切れ味が良いすぎるってのも嫌だな。手入れてたら指を落とすかもしれないとか全然笑えねえよ。

ここで肝心の魔法を使ってみることにした。燃やしてしまった方がグロテスクな断面図を見ないで済むと思い、俺は一匹のサソリに手を向けた。

「燃える」

すると俺の手から野球ボールくらいの火球がサソリ目掛けて飛んで行き、着弾。おぞましい断末魔を残してサソリは燃え上がって黒い塊になった。こっちの方が気持ち悪かった。やらなきゃ良かったと軽く後悔。

本当は魔方阵を作つてそこに魔力を流し込まなきゃ魔法は使えないが、俺はイメージするだけで魔法が使える。魔方阵を通して魔法を放つとその分タイムラグが発生して、魔法を放つのは自分が思ったよりは遅れる。

だけど俺はイメージしたらそのまま魔法が発動するからタイムラグ無しで魔法を発動できる。それだけでも凄いメリットなんだが結構重大なデメリットがある。

まずその魔術を完璧にイメージしないと魔法は発動しない。さっき打った初級のファイヤーボールは本で説明を見たしイメージも簡単だから出せるが、上級魔法の全方位爆破する魔法なんてイメージがかなり難しい。出来たとしても自分も巻き込まれてしまうだろう。

だから簡単な魔法しか出せない。魔方阵を通せばイメージが固まるようになるのだが、練習したり実物をみたりすれば無しでも出来るだろう。今はとにかく魔法のバリエーションが少ない。だからあまり頼ることは出来ない。今出せるのは全種類の初級魔法だけ。それに光と闇はイメージが固まらなくてたまに失敗するし。

(そんなことを考えてる間に囲まれたけど、どうするのシユウト)
(それをもつと先に言ってくれよ！)

気づけば今まで前にいたサソリが俺を中心に円を書くように囲んでいた。これは本気で死ぬ可能性が出てきた。いやいやふざけてる場合じゃない。この状況をどう打開するか。

一点突破。囲まれてじりじりと滲み寄られるよりは自分で一点目指して突撃した方がマシだろう。しかし見た目がグロテスクな相手に突撃するのはかなり勇気があるな。気持ち悪い。怖い。それにこんな猪突猛進みたいな作戦で大丈夫なのか？もつと他にいい手があるかもしれない。どうする。どうする？

(情けないよシュウト。僕も多分一点突破がいいと思うよ)
(うるせー。こんな気持ち悪い虫なんかと戦う機会なんて元の世界にはないんだよ。ちっちゃいのも気持ち悪いのに赤ちゃんサイズとか何の嫌がらせだよ)

所詮は虫なのか統率が取れていないのが幸いだ。壁が少し薄い所があるのでそこに向かってファイヤーボールを連発。先頭の二匹が足を丸めた死体になったのを確認して更に走るスピードを上げる。剣で斬るには対象が低すぎて薙ぎ払えそうもなかったので、そのまま足で無理矢理蹴散らしていく。

案外脚力だけで蹴散らせるものだと思心していたら足首にチクッとサソリに刺された。しまったと思った頃にはもう遅い。

不味い。早く倒さないと痺れ毒が回る。ヤバい。これはヤバい。ヤバい。

剣を振り回して目の前のサソリを斬って斬って斬りまくる。当た

つてくれさえすれば簡単に斬ることが出来るので随分と適当に振り回しているが何とかなっている。

剣がサソリに触れる度に緑色の体液が飛び散り、赤い肉片が地面に転がる。また後ろから足首を刺された。焦りながらも後ろのサソリの蹴り飛ばす。

クソツ！こんなはずじゃなかった。もっとサクサク魔物を倒していくつもりだった。クソクソクソツ！何でこんな状況になったんだよ！こんなところで死ぬのはゴメンだ！

(シュウト落ち着いて。敵はあと三十体前後いるけどもう囲まれてはいないから焦る必要はないよ。それに不死身なんですよ？ それに解毒薬もあるんだし)

(…… わかってる。 わかってるよ)

深呼吸を一回して剣を構える。構えているというよりただ前に突き出しているだけだが、サソリは仲間の惨状を目にしているせいから少し臆しているように見える。今が多分チャンスだ。

まずは端っから攻めていく。ファイヤーボールを当てて近づいてきたら剣を振り回す。最初は大振りすぎたのか当たらないこともあったが、段々と当たるようになってきた。

気づけば数は十五匹程度になっていた。少し余裕が出てきたが油断はしない。剣を握る手が汗ばんできた。手から滑ってしまいそうで少し不安になったので、しっかりと握り締めておく。剣が変なことを言ってきたが頭に入らなかった。

そのままじりじりと近づいていくと我慢出来なかったのか一匹のサソリが飛びかかってきた。慌てて剣を縦に振り下ろすとサソリは俺の目の前で真っ二つになり、緑色の体液を撒き散らしながら地面に落ちた。俺の顔に体液をぶちまけるといっ置土産を残して。

俺が袖で体液を拭っている間に他のサソリが攻撃してくると思っただが、どうやら勝てない相手と思われたらしい。巣穴に身を隠してしまった。五分くらい待ったが出てくる気配はない。

「はぁ……」

深くため息。まさかこんなに手こずるとは思ってもみなかった。心の何処かで魔物を甘く見てたらしい。もし剣が焦らないように言ってくれなかったらもしかすると死んでいたかもしれない。

（感謝してね）

うるせえと返す気力も無かった。口の中で鉄の味がする。生モノの溜まり場みたいな臭いもするが深く考えないことにする。

第十一章

改めて周りを見渡すと酷い光景だった。真っ黒になって足を丸めているサソリ。胴体を真っ二つに両断されて臓器がはみ出ているサソリ。中には形を留めていない肉塊まであった。全部自分がやったのだ。

気持ち悪かった。だけど吐くまでではない。ゴキブリを潰したら中身が飛び出した時の心情とあまり変わらない。最後の体液のシャワーに関しては逆に吹っ切れてしまった。まあ最後に真っ二つにしたサソリの死体を蹴り飛ばしてやったが。

とりあえず手の平に頭一つ分くらいの水球を浮かべてその中に顔を突っ込み、片方の手でわしゃわしゃと髪を洗い流す。灰色の服もペンキをぶちまけられたみたいになってるのですぐに洗いたい。シミになったりしないだろうか。

そういえば討伐の際その魔物の一部を持ってこなきゃいけないだった。普通初めての狩猟依頼の時受付が説明してくれるはずだが、俺は何でも載ってる本があるので困りはしなかった。あの受付本当に仕事しないな。

サソリの尻尾を討伐の証拠として剣でちゃんと切り離して異次元袋に放り込む。たまにピクピク動くので凄気持ち悪い。こういう時のために異次元袋を二個買っておいてよかった。普段使う物が体液まみれとか想像したくもない。

ヘルスコープイオンの討伐の証としては尻尾が無難だそう。根元は柔らかいので切りやすいし毒も手に傷がなければ安全。本当にあ

の本は便利だ。何でも載ってるし今までガセネタだったことは一度もない。しかも魔法がかかっているのか厚みもあまりないから持ち運びに便利。この世界では俺の常識を司っていると言ってもいい気がする。無かつたら街にも入れなかったかもしれないし。

余った死骸は放置して大丈夫だよな。他の生き物が勝手に処理してくれるだろう。今は汗まみれ体液まみれの体を洗いたい。剣を布でグルグル巻きにしながら俺は砂漠を後にした。

「ちよつと髪を緑色にしてみました。似合ってるでしょう?」
「ハハハ……。そうですね」

水で洗うだけじゃ体液はちつとも落ちなかったので冗談かましてみたら、門番は気を使ってるのか苦笑いしてくれた。本気で傷ついた。部活の後輩を相手にしてるみたいだ。気まずいからさっさと帰れて心境がひしひしと伝わってくる。

そんな後輩門番にハートをスタボロにされながらもギルドに向かう。正直行きたくない。足取りが大変重い。精神的にも物理的にも今更になってサソリの毒が効いてきたらしい。何で俺がこんな目にあわなきゃいけないんだ。解毒薬今から飲んででも間に合わないよこれ。

サソリの毒のせいだし今日はギルドに行かなくてもよくない?と思ったら剣に論された。仮病はいけないと。お前に何がわかるっていうんだ!もうちよつと俺にご都合主義なイベント起こしてくれてもいいじゃん神様!

(シユウトは頑張ってるよ。ぱちぱち)

(剣に励まされる主人って何なんだろうね。そしてやる気のない拍手だな！？ 生徒集会で知らない誰かが表彰された時に聞こえるような拍手だな！？)

(僕にはシユウトの言ってる意味がわからないな。ちゃんとした言葉で話してね)

(剣に日本語で喋れって言われる主人って何なんだろうな！)

(ほら、今ギルド通り過ぎたよ。さっさと行こうよ)

ちゃっかり見てやがりましたよこの剣。そういや何処に目が付いてるんだよコイツ。布にいつぱいあるなんか言われたら俺は布を投げ捨ててやる。全力で砂漠に投げ捨ててやる。

地獄の門に見えるギルドの入口。何か禍々しいオーラが見えそうだよあれ。あの受付がいませんようにと神様をお願いしながら俺はギルドの扉を開いた。

……どうやら俺の髪の色が面白かったらしい。近くにいた冒険者は大袈裟に口元を隠していた。どうせならあの門番に笑ってほしかったよ！

結局受付は釣り目のあの子だった。背が低いくせに見下したような視線を送ってくる。さっさと用を済ませてここを出たい。異次元袋からヘルスコピーオンの尻尾を十個カウンターに置く。もう触りたくないなサソリの尻尾。

神様から呼ばれてきましたよ？神様も馬鹿なんじゃないかなあ？普通の人間だったら狂っちゃうよ？いきなり世界救うまで元の世界に返さないとかB型？自己中心？阿保なんだ。あー。俺不死身なんですよ？狼に腕喰いちぎられても再生するしさ、サソリの毒も効かなかったみたいでさあ。本格的に化け物だよな。俺、人間なのかなあ？違う？違う？違う？

化け物。

「……おい」

俺は剣に手をかけ

「お嬢さん。そりゃ流石にあんまりすぎないかい？」

後ろから突然黒い服を着た変な奴がきた。何だコイツ。関係ない。こいつら全員

「ほら、お前も少し落ち着けよ。冷静になれよ。な？」

変な奴が笑顔で……フードで口元しか見えないが、俺の手を抑えてきた。素早くではなくゆっくりと、押さえつけるように。何だよコイツ。でも振り払おうとしても手は外れない。自分の腕が鉛にもなったみたいに動かない。

「何ですか貴方は。依頼確認に介入しないでください。貴方には関係ないでしょう」

「大ありだねえ。俺もヘルスコープオン討伐してるしね。その時は尻尾でも討伐の証としては十分と言われたけど、何かそちらの認識でも変わったのかい？」

「この人はまだ討伐依頼を一件も受けてはいませんでした。そんな”無能”な彼が群れを成すヘルスコープオンに勝てるわけがないでしょう？ どうせちまちまと尻尾だけを切って逃げ帰ってきたのでしょう」

いきなり不気味に笑う変な奴、本当に何なんだコイツ？

「ヘルスコープオンは尻尾が切れるとバランスが取れなくなって巢穴に帰れなくなるって知ってるか？ 体の後ろ部分の大半を占める尻尾を切られたらそりゃそうだよなあ。それでバランス感覚も失っ

た生き物が砂漠で生きられる筈がないよな。お前新入りか？ 肩の力抜けよ」

変な奴はさぞ嬉しそうに笑いながら釣り目の彼女の返事を待っている。どうやら論破したようだ。証拠に彼女は俯きながらそこを動かないし何も言い返さない。

「黙っちゃいましたよこの受付？ ほおら謝罪は？ この旅人さんに謝罪はないのかなあ？ 流石に謝るくらいはヘルスコープイオンのこと知らずにハツタリかましてた”無能”でも出来るよなあ？」

いやに無能の部分を強調している怪しい人。あそこまで追い詰められたら俺だったら泣く。多分。

(シユウト酷いよ、僕のこと無視して。もう大丈夫なの？)

(あ、悪い。うん。大丈夫っぽい)

(思いつきり狂ってたよシユウト。あのままじゃ絶対……)

(うん。まあ殺してただろうね。今はもう大丈夫だよ？)

剣の布を払って受付の顔に一突き。眼球を潰し脳天を剣が貫通するビジョンが鮮明に浮かぶ。危ない。何で俺はあんなことを思ってしまったんだ。いつもならあんくらい笑って受け流せる……と思う。

(まあ僕はよくわからないけど、いきなり異世界に飛ばされたんで

しょ？ シュウトは最初は頑張ってたけど、やっぱり不安定だったんじゃない？

（そうなのかな）

（環境がいきなり変わったら誰だって怖くはなるって。しかもシュウトいきなり不死身になっちゃったんでしょ？ それにあのくらの虫も殺したことないと言ってたよね）

（うん）

（……まあ今回は大丈夫だったしいいじゃん！ 今度から僕の言うことも聞くんだよ！）

（わかったよ。何か迷惑かけたな）

（じゃあこれから毎日僕を研いで洗ってご飯も食べさせてね）

（調子乗んな）

コツンと剣を叩く。そういえば俺が剣を小突けるってことは怪しい人は俺の手を離していたのか。この人は一体何者なんだろうか。

「謝罪早くしてくれないとこっちにも考えがあるぞ？ さつさと謝れよ受付娘」

「……ッ！ 今日」

「今日はこの辺で勘弁してくれませんかねえ」

釣り目の彼女が何か言おうとした時に、タイミングよく受付の後ろからシロさんがため息をつきながら出てきた。相変わらず白い。服も髪も肌も。私は天使ですと言われても納得してしまいそうなおさ。でも相変わらず暑そうだ。長袖長ズボン。いや、人のこと言えるような服装じゃないんだけどさこっちも。

「……シロエアさんですか。流石にギルドマスターに楯突くことは出来ないので、今回はこの辺で引きましょうかね」

「ご理解が早くて大変助かります。これを渡しておくのでまた後日お越しください」

シロさんが怪しい人に何か封筒みたいのを渡すと、俺を見て何故か微笑みながら釣り目の受付娘を連れて奥に戻っていった。何か含みのある笑顔だったが俺には察することが出来なかった。

「さあ新人の旅人君。帰ろうか」

「え、あ。ハイ」

怪しい人はそう言って先にギルドを出ていった。……本当に何なんだあの人？

第十一章（後書き）

ちよいと物語が脱線しはじめた。いやーヤバい。別に修正しなくても面白そうだからいいんですけど。

毎日更新無理ですごめんなさい。あ、ポイントとお気に入り登録あたりがとです。俺のやる気スイッチがオンになるんでバンバン登録してください。

主人公狂いました。が、修正されました。狂いの描写は初めてなんで勘弁してください。あと15禁にしますがエロはあまり無いですよ？一応やってあるだけです。

第十二章

ギルドを出ると黒い人が外で待っていた。こっちに手招きしている。正直不審者にしか見えない。

でもまあ一応助けられた身だし付いていくことにした。警戒はしておくが。

「別に助けたから金よこせなんて言わないからそんな警戒すんなよ。同業者だったから助けただけなんだからよ」

「はあ。そうですか」

「まあ積もる話は君の宿でしようか。そっちは服洗ってきた方がいいだろうし、んじゃ六時になったらそっちに行くよ。宿の名前は？」

「えっと、サンって名前です」

「ああ、あの宿か。了解。じゃあ食堂に六時な。忘れんなよ」

早口で彼はそう告げるとさっさと人混みの中に紛れて消えてしまった。本当に何だったんだあの人は。

(まあ頑張っつてね)

(他人事かよお前。どうすりゃいいんだろこれ)

とりあえず周りの通行人が顔を歪めながら俺を避けてるのに気づいたので、宿でさっさと服を洗うことにする。正直まだ混乱している。あ、結局依頼完了してないや。

灰色の服を洗って干して昼飯を適当に済ましたらもう夕方になっていた。汚れが全然落ちなくて涙目になったが、気合入れて洗ったら何とか落ちた。手間取らせやがって……。

時刻は四時半。どうせ暇だし食堂に行つて何かつまみながら本でも読もうと思ひ、乾いた灰色のローブとズボンを着て食堂へ。実は制服を着てるより暑くないっていうね。何か涼しくなる魔法でも刻まれているのかこの服には。

初めて調理場の近くに座ることが出来た。時刻が時刻なだけにあまり人がいないせいだろう。ちょっとした優越感に浸りながらおつまみを頼んだ。枝豆みたいなものと煮卵がすぐに運ばれてくる。

調理場を見せ物にするのは元の世界にもあつたが、自分はテレビでしか見たことないので少し興奮気味。野菜を刻む小気味いい音にフライパンの上で踊つてるみたいに跳ねる油にステーキサイズの肉を入れるを光景。食をそそるには絶好の場所だ。

それにガスコンロや冷蔵庫も無いのに料理をしていることに少し驚いた。科学の代わりに魔法を使っているせいか科学はあまり発展しておらず、ここの最先端の技術を駆使して出来たものが豆電球らしい。火や光る生き物などで夜を過ごしてきた人達にとってはそれこそ魔法みたいな物だろうが、俺から見るとなんかね。火より光も

しょぼいし何とも言えない。

この店は刺激を与えると発光する虫を白い入れ物に入れて光を出している。十分に一回は入れ物を揺らさないといけないので面倒くさそうだが、一番光の強さが大きくて更に寿命も長いから高額らしい。サラが自慢気に言っていた。

本の魔物のページを開いて適当に流し読みしながら、片手で枝豆をにゅるんと皿に飛ばして遊んでいたら何やら外が騒がしいことに気づく。もうトラブルはゴメンだぞ。絶対に野次馬気取りで見にいかないからな！

しかし遠くから見るとはいはいだろうと騒ぎの方に目を向けると、何やら入口の方に人溜まりが出来ていた。凄い騒がしい。止める！とかなんて聞こえてくる。喧嘩か何かか？

すると人溜まりの中心が道を譲るようにぽつかりと空いて誰か出てきた。鬼みたいな表情のウエイトレスがずんずんと聞こえてきそうな足音でこちらに近づいてきている。服装が黒い服に黒いバンダナ、バンダナは首にかかっているが間違いなくウエイトレスだ。

しかしこちらに向かって不良もビビりそうなガンさえも飛ばしてきていた。もう少し頑張ればビームでも出そうな勢いだ。

近くに来るほどそのウエイトレスの身長が高いことがわかる。少なくとも俺より少し高い。180センチくらいだろうか？だがそれにしてはすらっとした体つきで顔もまあ悪くはなかった。ただ赤く長い髪がゆらゆらと揺れているのが少し怖かった。何かオーラかなんか出てそうだな。

まるでプロレスラーが前にいるような感覚に、俺はその場から尻尾を巻く暇も無くして逃げ出したかった。

だがそんなくだらないことを考えている内にもう目の前までできてしまった。平静を装っているつもりだが気を抜けば足が震えそうだ。そこらの不良よりよっぽど怖い。

「お前がシュウトか？」

そう彼女は言うと共にいきなりピンタ、じゃなくて張り手が飛んできた。避ける、なんて考える暇もなくそのまま張り手を頬に受けて綺麗に椅子から吹っ飛んだ。しかし大した痛みはなかった。友人の張り手に比べればまだマシな方だ。

倒れている俺の胸ぐらを掴んで真っ赤な顔を近づけてくるウェイトレス。怖い、とは思わなかった。照れてるのか？と思えるくらいなら余裕はある。どうせこいつが来た目的は大体予想はついているし、正直モンスターと比べたら人間の方が戦いやすい。元の世界でもこういふ展開がなかったわけではないからなあ。

まあ何処かの受付にボロボロにされて勢いに任せて殺そうとした奴が言える台詞ではないが。

「サラの知り合いか。これで気が済んだか？」

「済むわけがないでしょう！」

更に飛んでくる張り手。だがあまり痛くはない。

一方的な暴力、と周りは思っているだろう。だけどこっちは痛くもなんともない。別に不死身だから痛覚が麻痺してる、なんてことはない。だとすれば……ねえ？

「Aランクの冒険者には俺じゃ勝てない。そして君も」
「うるさいっ！」

また放たれる鋭い張り手に言葉を遮られる。今回は少し痛かった上に勢いで後ろの机にぶつかってしまった、誰かの食べかけのグラタンとお茶が床に落ちてしまった。勿体ない。あのグラタン美味しいのに。

「かと言って他にAランクに挑むような知り合いはいない。雇うにしてもあつちは魔法を習得している金持ちだ。どうせ買収され」
「黙れっ！」

こいつは言葉を遮るのがよっぽど好きなようだ。もう加減なんてありやしない。思いつきり吹っ飛ばされた。痛い痛いんだけど。絶対俺のほっぺた赤くなってよ。紅葉出来てますよこれ。

そして吹っ飛ばされた先には椅子。しかも角に頭をぶつけたせいか流血してしまった。あつちは血を見たせいかパニック状態に。いや、ヒステリックにもなってるか？

ヒステリックに陥っている彼女のピンタを止めるのは赤ちゃんをあやすくらいのものだった、なんて言えたら格好良かったのに。普通に手こずりました。力は強いわ体はデカイわ胸は小さいわ。結局足を引っ掛けて転ばしてマウントポジションをとって止めました。

しかし未だに暴れてる彼女はどうすればいいのか。男ならこのまま殴ってやるのだが、流石に女の子を殴るのはちょっと引け目を感じる。耳を甘噛みしてやろうかなんて考えが浮かぶところ俺はまだまだ余裕があるようだ。

「そのウエイトレス……ってお前隠れるな！ 早くコイツを止めてくれ！」

「えー嫌ですよシュウトさん。私は可憐で儂い案内娘ですよ？ そんな大きい人止められませんか」

「てめえ案内娘！ てかマジでヤバいつて！ お前殺気にも動じてなかっただろうが！」

「はいはいわかりましたよ……。ほら行くよみんな。あのままじゃシュウトさんにあの子が犯されちゃう」

「何か聞こえたんですけれども！？ 何か怪しいワードが聞こえたんですけれども！？」

案内娘が女のウエイトレスを引き連れて俺を突き飛ばすと、すぐに巨漢の彼女をウエイトレス数人が押さえつけた。手間取ると思ったが多勢に無勢だったようだ。ただ俺を見るウエイトレスの目が冷たい。新手のイジメですか？

「この子は責任を持って私がきつく言うておくのでシュウトさん

は口出し無用です」

「……いや、いいんだけど。何かこう釈然としないというか」

「シユウトさんはこの子に謝罪しろと言って夜伽をさせるのですね……」

「そんなこと言ってないだろうが！　みるみるとウエイトレスの視線が冷たくなってるんですけど！？　俺はそんなことで釈然って言つたんじゃないかな……」

「とりあえず君達は乱れた椅子を直しといて。シユウトさん、詳しくは後で。そろそろ夕食を食べに来る方がいるから早急に片づけなきゃいけないからさ」

「……わかったよ。ウエイトレスには後で説明するからなっ」

「ごめんねと舌を出して謝る案内娘。反省してねえ。軽く殴ろうとしたがそんな暇もあつちにはなさそうなので止めておく。机は倒れて食べかけの料理が落ちているし、椅子には血痕。今はもう五時半だしそろそろ夕飯を食べる人も増えるだろう。」

あ、枝豆が吹っ飛んでる。煮卵も食べときゃよかった。さよなら俺のおつまみ。

「なーんかとんでもない騒ぎになってるねえ、シユウト君？」

振り返ると室内なのに黒いフードを被ってる怪しい人がいた。お前に俺の気持ちかわかるまい……。最近結構仲良くなっていたウエイトレス達に冷たい視線を向けられた俺の気持ちが……。

「そんな目でみるなシュウト君。とりあえず散らかった物の片付け手伝おうか」

肩を回しながらウエイトレスの元へ歩いていく怪しい人。絶対俺だっただら怖がるな。怪しいし。

(僕もアレがいきなり話しかけてきたらちょっと怖いなあ)

……案の上怖がられているようだ。ウエイトレスにも剣にも怖がられてるとか、可哀想な怪しい人。

第十三章

血痕の付いた椅子は回収されて床に広がった残飯とお茶も綺麗に片され、喧騒に包まれていた食堂も徐々に落ち着きを取り戻していった。

そんな中俺は怪しい人と一緒に枝豆をニユルンと皿に飛ばして遊んでいた。いや、あっちも黙々と枝豆飛ばしてるからこっちも飛ばすしかないじゃないか。二人でやったせいがあつという間に枝豆の実が皿に積み重なっていく。コイツ……出来る！

枝豆が無くなると怪しい奴はやっと口を開いた。フードは外さないのかな？暑いだろう？

「君ってさ。ネットって知ってる？」

「え？ は？」

「ああごめん。じゃあ日本って国は知ってる？」

日本。その言葉を聞いた瞬間に脳裏に衝撃が走った。え、この人日本を知ってるのか？日本人なの？

……確かに神様は他にも異世界人がいるって言うってたけど、こんな早く会えるとは思わなかった。というかこの世界に他の、しかも同じ国の異世界人がいるとは。怪しい人とか凄い失礼なこと言っちゃいましたごめんなさい！

俺の反応を見て黒フード様は面白そうに笑いながら枝豆を食べて

おられました。

「えっと……知ってます。もしかして貴方も飛ばされたりしたりしますかね？」

「おう、狼少女にな。いやー、見つかってよかったよ。まあこんな格好だと怪しい人って思われるのは当然だろうし、まずは自己紹介からいこうか。俺の名前は荒瀬夜止だ。よろしくな」

「そうですか。俺は鎌夜修斗です。えっと……高校生です！」

話したいことが多すぎて言いたいことがうまく浮かばなかった。そんな俺を見て荒瀬さんは苦笑い。恥ずかしいったらありやしない。

「まあお互い聞きたいことはいっぱいあるだろうし、一回ずつ交互に質問していこうか。それじゃシュウト君からどうぞ」

何を質問しようか迷う。何歳？何故フードを取らない？どうやって飛ばされた？どうやって自分を見つけた？あとそれから他にもあるはずだ。もっと重要なことがあるはずだ。それを聞かないと……。

「別に急がなくても俺はどうか行かないから大丈夫だよ。何か起きない限りは今日はこの宿に泊まるつもりだからな」

「じゃあ……何でフード取らないんですか？」

「自分で言うのもなんだけど俺地味に有名人なんだ。中二病と思っ
てくれて構わないよ」

中二病？……いつしか友人が口にしていたっけ。私にもそういう時期がありました、とかなんとか言ってた気がする。俺にはあまりよくわからない。

「じゃあ次はこっちな。前の世界よりやたら不幸なことが起こったりしてないか？ いきなり通りすがりの人に絡まれたり、目の前でスリが起きて犯人と間違われたりとか。まあ既に二つ目撃してるから言わずもがな、って感じだけどさ」

言われてみれば多いかも知れない。異世界に飛ばされた時点で不幸だが他にもいっぱいある。確かにそうだ。何か仕組まれてるのか？まさか神様が仕組んでいたりして……。

「多分君が想像している通りだよ。俺達は神にトラブルが常に付き纏うように仕組まれていると思う。全く面倒なことをしてくれる。こっちはたまつたもんじゃない」

「じゃあ荒瀬さんもやっぱり……」

「偶然街にお忍びで来ていた女王に痴漢の容疑で牢屋にぶち込まれたり、偶然助けた子供が亜人種でいきなり死にかけるまでボロボロにされた拳銃に路上放置プレイをされたり。まあ喋ればキリはないよ。他になんか質問ある？」

そうなのか……。でも神様が俺に不幸なことが起きるようにして何のメリットがあるんだ？神々の遊びとか言ったら一生恨むけど。

「じゃあ荒瀬さんはここにいつ飛ばされたんですか？」

「二年前くらいかな。だから俺が来た時に困ったことを伝えようと思っただけけど……無理そうだね」

そう言っただけで荒瀬さんは食堂の入口を見ながらため息。まさか……。

「トラブルメーカーの異世界人が二人揃ったらどうなるかって予想はしてたけど、早いね。それに少しマズいかもね」

「……何が起きるかわかるんですか？」

「敵意のある魔術師がこつちに二人向かってきてる。敵対することになったら少し面倒くさそうだな。かと言ってこつそり逃げるのも無理そうだしねえ。宿屋の周りも囲まれてるっぽいし」

そんなことを言ってるにも関わらずのんきに枝豆を口に放り込んでいる荒瀬さん。魔術師って結構強いんじゃないの！？もし争いになったら俺は死なないからいいけど荒瀬さんは危ないんじゃないか！？

「ど、どうするんですか荒瀬さん。魔術師って強いんでよね？」

「別に倒そうと思えば楽勝だろうけど、あっちは金を持ってから後処理が面倒なんだよね。ここは先輩がサクッと解決してやるよ。これが終わったら俺結婚するんだ……」

「え？ そうなんですか？ えっと、おめでとつございます」

少し寂しそうに苦笑いをする荒瀬さん。一体どうしたのだろうか。

入口の方は人だかりが出来ていた。本日二度目の人だかりにうんざりする。そして見える人影。

きらびやかな装飾が付いた青いドレスを着た大人びた女性に、正反対の赤いドレスを着た少し幼げの残る少女。この酒場みたいな食堂には場違いな服装と纏っている雰囲気、周りは圧倒されていた。

カツカツと二人は足音をたてながら一直線にこちらに向かってくる。でも俺はあの人達を知らない。荒瀬さんの知り合いだろうか？

「あの金髪達は俺のトラブルだからシユウト君は笑顔でも作りながら黙っててね。話を振られるかもしれないけど、俺がフォローするから何も言わなくていい」

そうは言われてもあんな雰囲気纏ってる人を前に笑顔なんか作れる自信がない。アメリカの大統領でも前にしているかなような緊張感。心臓がやけにうるさくて今にも過呼吸になりそうだ。

「アラセ。やっと見つけたと思ったらこんな宿にいたとはね」

「これはこれは。ご機嫌麗しゅう姫方」

「ふん。気持ち悪いつたらありやしない。何よその口振りは」

「それは申し訳ございません。お気分が悪いのならばどうぞお引き取り下さい。ここは姫様には少々お早いと思えますので」

そう荒瀬さんに笑顔で返されて早くも顔がドレスの色より真紅に染まる少女。かなり感情的な子のようだ。

「アラセ。貴方は姫を強姦しようとした罪に問われています。大人しく牢獄にお戻り下さい」

「痴漢から強姦になってしまいましたか。残念ながら私には幼い子には興味がありませんので……。何度いったらお分かり頂けるでしょうか？」

「襲おうとしたのは事実でしょう。目撃者も多くいます。……ところでその隣の青年は貴方の友人ですか？」

青いドレスの人が俺の話題を持ちかけた。思わず顔が引き攣りそうになるが頑張って作り笑いをする。多分スマイル - 100円くらいの出来だろう。

「友人だったら貴方達が来る前に避難させてますよ」

「では何故同席しているのですか？」

「失礼なことにこの人の枝豆を運んでいたウエイトレスとぶつかってしまいました、それでお代を払うついでに自分も枝豆を頼んだだけです」

よくあんな笑顔で嘘がつけるなあ。俺だったら顔に出ちやいそうだ。今でさえ顔が引き攣りそうだし。

「それで、自分を牢獄に入れるつもりですか？」

「ええ。罪を償ってもらいます」

「それじゃあ逃げさせてもらいますね？」

「無駄です。この宿屋の外は兵士で包囲されていますので、逃げるのは不可能です。まあ貴方如きなら私だけでも充分でしょうが」

青いドレスの人に返事は返さずにスツと席から荒瀬さんが立ち上がって、何処かへ歩いていく。

彼女達に向かって歩いていく……？どうしたんだ。まさか投降するつもりなのか？それとも人質にとって脱出するのか？

「投降する気になりましたか？ 少しは利口になったようですね？前は無駄に暴れて面倒でしたしねえ？」

「いいえ、投稿するつもりなんてこれっぽっちも無いですよ」

言葉と行動が全然一致していない。荒瀬さんは武器も持たずにただ彼女達に向かって歩いていく。もしかして俺に何か合図でも送っていたのか？

しかし助けるといっても無闇に俺が突っ込んで意味がないだろう。ここはやっぱり何もしない方がいいんだよね？ 不安だ……。

彼女達の横を普通に通り過ぎようとする荒瀬さん。当然青いドレスの人が腕を掴もうとする。しかもかなり速い。どうやらただのお姫様ではないようだ。

しかしその腕は掴まれることはなかった。でも荒瀬さんが避けた

ような動作をしていなかった。……どうなってるんだ？

「一体、何をしたんですか？」

「さあ？ 貴方が単にノロマなだけじゃないですかね？」

青いドレスの人はすぐに荒瀬さんに向かって体当たりするが、ただスルツと体を突き抜けただけだった。そのままバランスを崩して転ぶと思いきや、彼女は危なげに踏みとどまった。まるで荒瀬さんが実体がない幽霊にでもなったみたいだ。何かの魔法か何かかな？

今度は赤いドレスの人が捕まえようとタツクルするが、彼女が派手に転んだこと以外はさつきと変わらなかった。実態のないホログラムにでもタツクルしているような感じだ。傍目から見ていると少し不気味だ。

「何ですこれは……」

「二年前は俺なんてすんなりと組み伏せられたのに触れることも出来ないなんて、ねえ今どんな気持ち？ 雑魚だと思ってた俺に触れない気持ちってどんな気持ち？ 俺はこんな気持ちです、滑稽すぎてお腹がよじれそうですよ。ククッ」

そう荒瀬さんは心底楽しそうに言った後ポケットを叩きながら俺にウインクしてきた。そして何かを言う暇もなくそのまま走り去ってしまった。二人の姫方は何かを叫びながらその後を追っていった。

食堂のみんなは心ここにあらずといった感じだった。竜巻がが過

ぎ去ったような雰囲気だ。誰一人喋ろうとしないし物音もしない。

……なんかあつという間に消えていった俺と同じ異世界人、荒瀬さん。でも異世界人が俺一人じゃないとわかった。

俺は一人じゃなかった。ただそれがわかったただけでも俺はよかった。

それに次々とトラブルが起こるのも神様の仕業らしい、ということとも大きい収穫だ。あの神様少女を問い詰めたいが出来ないのが悔しい。一体何が目的なのだろうか？

枝豆を上に向けて口でキャッチして遊びながら考えていると、枝豆が怒ったのか直接喉に潜り込んできた。気管に入ったようで思わず咳き込む。

「うえつ。ウエイトレスさんお茶を下さい」

「ふえ？ あ！ はい！ すぐお持ちします！」

ふえ？なんて言う人初めてみたよラッキー、なんて思いながらすぐに来たお茶を飲み干して枝豆を胃へ押し込んだ。死ぬかと思った……。

そして徐々に元の雰囲気に戻っていく食堂。俺は枝豆を食べ終えていそいそと自分の部屋に戻っていくのであった。

第十三章（後書き）

前の更新遅れたので早めに投稿。月曜日にバイトが入ってしまった
ああ。まあ頑張ります。

第十四章

翌日。もう慣れてしまった強い直射日光に目を細めながらも俺は朝早くからギルドに向かっていた。正直眠い。本日三度目の欠伸を堪えながらギルドの扉を開ける。

何故朝早くに起きてギルドに来ているのかというと、昨日ポケットを探ったらギルドに朝早く行けと書かれたメモが入っていたからだ。他には白い封筒に荒瀬さんの手紙も入っていた。

手紙に書かれていることを要約するとこんな感じだった。トラブルに慣れない内は自暴自棄になるかもしれないが頑張つて耐えろ。俺以外は信用するな、だけど信じてもいいかもしれない。強くなれ。

他にも聞きたいことがあったのだがいなくなってしまったのでそれはもう叶わない。いつかまた会えるかもしれないがそんな簡単には会えないだろう。

「お待ちしてました。どうぞこちらへお座りください」

扉を開けるとシロさんが受付に姿勢正しく立っていて、その受付の席を勧めてきた。やっぱり朝早く来たせいかなり冒険者の姿は見当たらない。片手で数えられるくらいだ。

シロさんと向かい合うように席に座るとお姉さんが冷たそうなお茶を運んできた。何も飲み食いせずに来たのでこれは助かる。お礼を言つて一口飲むと氷も入ってないのになんか冷たくてびっくりし

た。お茶を持ってそのまま動かないところを見ると彼女はシロさんの横に付くようだ。

「今日はお早い時間にお呼びしてすいません」

「いいえ。でも今日はどんなご要件ですか？」

「昨日の貴方を担当した受付のことです」

やっぱり、と肩をすくませる。俺がギルドに呼ばれる理由がこれしか見当たらなかった。だが肝心のその受付の姿は見当たらない。謝るなりなんなりするとは思っていたが。

「昨日は本当に申し訳ありませんでした。しかしご無礼を承知で聞かせて頂きたい。貴方は彼女の嫌がる何かをしていたりはしませんでしたか？」

「え？ ……してないですよ。まず彼女を知った理由が自分の悪い噂を流しているってことでしたから」

「……そうですか」

シロさんは俺を値踏みするかののような細目でしばらく見た後、何かを諦めたように目線を外した。料理の中に髪の毛が入っていて店員に文句を言ったら”自分の髪の毛では？”と言われたみたいない感じ。胸糞悪いつたらありゃしない。

「重ねて謝罪します。ご無礼を失礼しました」

「……シロエアさんのことを少し嫌いになったかもしれません」

言った後から自己嫌悪する。シロさんはただ確認をしただけじゃないか。何て器が小さいんだ自分は。馬鹿だ。荒瀬さんの手紙にも書いてあったじゃないか。耐えろと。

「大変失礼しました。ただ私には少々信じられないのです。彼女がそんなことをするはずがないんです」

「……何故そう言えるんですか？ それほど自分の部下に自信があるんですか？ 実際にされていたんですよ。自分は。貴方は見ていなかったかもしれないけどね！」

「しかし私は信じたい。彼女は何もしていないと。しかし」

何かを叩くような強い音が響きわたった。

俺が反射的に机を叩いてシロさんの言葉を遮っていた。後ろにいたお姉さんが怖そうに肩を揺らしているが、俺が悪いのか？ イライラする。何なんだこの人は？ 俺にただ謝るならまだしも俺を疑っているのか？ 意味がわからない。意味がわからない。俺が自己嫌悪する必要は無かったのか？ 何でこんな理不尽に耐えなきゃいけないんだよ！ 耐える必要なんて

(シユウト)

(わかってる！ だけどおかしいんだろこんなの！ そうだろ！？)

(神様がそうなるように仕組んでいるんでしょ？ とりあえず話を最後まで聞いてみようよ)

(わかったよ……。聞けばいいんだろ聞けば！)

今すぐにもギルドを出ていこうとする足をむしゃくしゃする頭で無理矢理押さえ込む。今にも爆発しそうな脳はいくら落ち着けと言っても落ち着かない。そしてこんなことで簡単に怒ってる自分に自己嫌悪する。自分らしくない。こんなに怒りやすくは無はずだ俺は。

俺のことをじっと見つめた後にシロさんは後ろのお姉さんに目配せした。すると何か青い膜のような物が受付のテーブルを囲うように現れた。何だよこれ。まさか

よ)
(この円の範囲の音と景色を遮断する魔法だね。別に危険性はない)

それを剣から聞いて少し安心する。俺は攻撃魔法かなんかと思ってた。ということは周りには漏れてはいけないことを話すのか？

「彼女は、亜人なんです」

「は？」

「彼女は人間ではなく亜人なんです。彼が貴方は亜人に対して偏見を持っていないと言っていたので言わせて頂きました」

「……亜人の大陸は壁があるからいけないんじゃないですか？」

「戦争の時に捕虜として捕まった亜人は数え切れないほどいます。それは奴隷扱い……いえ、それより酷いかもしれません。私はその亜人を買収取ってここで人として働かせています」

なるほど。戦争で捕虜になった亜人は奴隷となる。それをシロさんはここで身分を隠させて働かせている。だがそれが何だ？ 亜人だからって俺に嫌がらせをしていいのか？

「一度地獄を見てきた彼女達だからこそ、そういう騒ぎは起こさないとと思うんです。女性の方が奴隷になったら……わかるでしょう？ ですから彼女達は些細なミスはありますが、昨日のようなことは絶対にやらないと思うんです。大きい問題を起こしたら地獄に逆戻りですから」

理解は出来る。女性の奴隷と言えば性欲の捌け口に辿り着くだろう。だから絶対にそこに戻りたくはないからミスは絶対にしない。でも彼女は俺に陰険な嫌がらせをした。……確かにおかしい。シロさんが俺を疑ったのも理解は出来た。

「でも亜人を見る目は周りを見た限り酷い物でしたよ。シロさんだけならまだ理解出来ますけど、他の働いてる人は何か言わないんですか？」

「それはありません。私以外全員亜人ですから。結界を張ってる彼女もそうですよ？ 今は魔法を使ってるのでその特徴が出てきてると思います」

後ろの彼女をよく見ると頭から白くて細長い兔耳が生えてきていた。彼女はそれを見られて俺が何か言うと思ったのか顔を強ばらせていたが、俺は珍しいくらいにしかならない。亜人の特徴を目にし

たら周りの亜人死ね、みたいな気持ちが芽生えるなんてこともなかった。

「彼女が貴方に嫌がらせをしていたのは周りの職員も目撃しています。私には信じられなかった。しかし貴方が彼女に何かをしているわけでもない。彼女を私は理解していたつもりでしたのでしようか……。私は何て愚かだったのでしょうか……」

シロさんの頬には一粒の涙が伝っていた。この人は……なんなんだ？ 百年戦争を繰り返してきた種族なのに、何でそんな種族のために涙を流せるんだ？ まさか本当に天使だとかじゃないよな。

天使……ねえ。

「待てよ？」 神様”は俺にトラブルが付き纏うように設定したんだよな？

例えば俺から脅して金を取るうとした男がいたとする。神様はどうやってその男を俺に絡もつとさせるのだろうか？

その男の目から見て俺を貧弱そうに見させるのか？ それとも強盗するまでにその男を追い詰めてその前に自分を通らせるのか？ それとも

ただ”何の理由もつけずに”自分に絡ませるのか？

人間の行動には必ず動機がある。動機も付けずに俺に絡ませたらどうなるだろうか？

ただの強盗ならそれでもいいかもしれない。ただ今回はそれじゃあ駄目だった。彼女は問題を絶対に起こしてはいけなかった。

神の力によつて無意識に俺へ嫌がらせをしていて気がついたら地獄に行き着いていて、弁解しようにも嫌がらせの証拠は完璧に揃っていたら……不幸だ。それは俺よりも不幸かもしれない。

俺は選択出来る。だが俺へ不幸を持つてくる人は選択が出来ないとしたら？俺が怒るのはその人にじゃなくて神様に怒るべきなんじゃないか？と俺は思った。

……自分で言つてて馬鹿らしい理論だ。自分に降りかかる火の粉は太陽から降つてくるから太陽を壊せばいい、こんな感じの暴論だ。それにこれは予想でしか無いし、もしかしたら彼女に悪意があったかもしれない。

だけど一度くらいは確認したかった。もし理論が当たってたらそれは大変なことだから。

とりあえずお姉さんに貰ったハンカチで涙を拭いているシロさんに聞いておきたいことがあった。

「彼女はこれからどうなるんですか？」

「……貴方は彼女に何も手を出していない。それに彼女の立場を覆せるような物ありませんし、残念ですが……」

「自分が彼女を許すと言えば大丈夫なんじゃないですか？」

途端にシロさんと後ろのお姉さんが目を丸くした。そりゃあそうだろう。机を叩きながら顔を真っ赤にして怒っていた人がいきなりそんな提案をしてくるなんて思いもしなかっただろうから。

「それなら彼女の罪は帳消しには出来ませんが……よろしいのですか？」

「一つ条件があります。彼女と話をさせて下さい。ただ自分から見れば彼女が反省などをしていなかった場合は彼女を許しません。自分が信用出来ないのであれば彼女が今発動している遮断魔法の中で話しても構いませんよ？ 話の内容を聞いても構いません。どうでしょうか？」

「……わかりました。では明日の午後六時にここに彼女に遮断魔法をかけさせるので、そこでお話し下さい」

シロさんはその提案に一瞬迷った後に食いついた。余程彼女のことが大切なのか二の次も言ってられないのだろう。

「それじゃあ今日はこれで失礼しますね。明日また伺います」
「……本当にありがとうございます。まさかこんな良い結果になるとは思いもしなかった。貴方を疑った自分を殴りたい気分です」
「私からもお礼を言わせて頂きます。彼女にチャンスを与えてくれてありがとうございます」

二人とも深々と腰を折って謝ってきたが俺はそれを返さずにギル

ドを出た。彼女が悪意を持ってやった場合も充分に考えられるのだ。そうだったら多分許せない。今の自分は自分であって自分じゃない。異世界に飛ばされてたった一ヶ月そこらで前の世界と同じように平静になれるほど、俺は器も大きくなかったようだ。

元の世界では絶対に怒らないとまでは言わないが、自分で抑えられないくらい怒ったことは滅多にない。バイト先で嫌味ったらしいパートさんに鍛えられたこともあるせいか、基本は怒らない人って自分で思ってたつもりだ。

それがこつちの世界に飛ばされてからは酷い。目も当てられない。自分でも驚くくらい思考が単純になって顔も真っ赤になっていただろう。十年のタイムリミットのこともあるし自分は焦りすぎているのかもしれない。一回焦らずに落ち着いた方がいいかな。

そんなことを考えながら寄り道もせずに宿屋に戻って部屋の鍵をお姉さんに貰って部屋に直行。まだ日が昇ったばかりの時刻だがベツドに身を投げた。

最初はおちゃらけたことを考えていたが、現実を思い知らされていくとそうはいかなくなってきた。思ってるほど簡単に物事は進んでいかない。頭の中では冷静に話そうとしても心が単純な言葉を口走ってしまう。

けどこんなにも辛いとは思いましなかった。荒瀬さんもこんな感じだったのだろうか。まあ俺みたいに単純な挑発に乗ってしまったりはせず、ちゃんと冷静に物事を解決していたんだろうな。かなり羨ましい。

とりあえずこれからのことは寝てから考えることにしよう。意識

を手放そうと目を瞑ると簡単に手放すことが出来た。ふう。引き籠
りたい。

第十五章（前書き）

前回のあらすじ：主人公はシロさんと色々話した後、日が登ってるのに何故かベッドで寝ました。何というわかりづらい始まり方なんだ。

第十五章

湧き出る眠気を堪えながらベッドから起きて顔を洗いにいく。少し薄汚れている鏡を見ると酷い顔だった。ダランと垂れた頼りなさそうな目に笑顔の欠片も見せようとしない表情筋。

引き籠りたい。お金はあるんだ。それに時間も十年もあるじゃないか。しかもまだ一ヶ月しか経ってない。あと百十回は月が来ないと阿鼻叫喚なんて起きやしない。戦争は起こらない。まだ余裕はあるんだ。少しくらい休んだっていいんじゃないのか？

そう鏡に写ってる自分が問いかけてきていた。

……自分の妄想なのか？ やっぱり疲れているらしい。そんな鏡の自分に心の中で言い返す。

また昔に逆戻りするのか？ ただ布団の上で無気力に時間を過ごしたあの時のように。

辛いことからはずぐにでも逃げ出したい。けど逃げたって結局はその場しのぎにしかならない。導火線に火が点いている爆弾を持っているようなものだ。その導火線は引つ張るだけで伸び続ける魔法の導火線だが、いつかは伸びなくなってしまう。勇気を出して導火線の火を手で握ってでも消さなければ、取り返しをつかないことになってしまうのだ。

俺はもう伸びなくなってしまうた導火線を他人に手伝って貰って消すことが出来た。俺は本当に幸運だった。だけど幸運はそう簡単には起きない。もう二度目なんて無いんだよ。

だけど世界を平和にするなんてどうやってすればいい？この先も理不尽な不幸に耐えられるのか？自分に不幸を与えた神様は本当に自分を返してくれるのか？と鏡の自分は迷子の子供みたいな泣き顔でそう言ってきた。

確かにこの先の不安はある。未来の問題なんて考えればいくらでも出てくる。だけど今はそれはあえて深くは考えない。頭の片隅に置いてくような感じが丁度いいんだ。友人に会って最初に教えて貰ったことだろ？未来と過去なんて考えすぎても無駄、なんて言われたっけ。

まだ、やれるはずだ。俺はまだくじけてなんかいない。ポジティブな考え方なんて未だ完璧になんて出来やしないが、ポジティブって言葉を思い出すことが大事なんだ。

鏡に写ってる泣き顔の自分はどうかやら満足したらしい。満面、とまではいかないがぎこちない半面の笑みを浮かべていた。

(シュウト。ポジティブってどういう意味なの？)

(前向きな考え方って意味かな)

(へえ。じゃあシュウトには是非ともポジティブになって欲しいね。いつも暗いし)

うるせーぞと文句を返して布に巻かれた剣を手に取り叩いておく。痛いなんて声が聞こえてくるが無視する。毎晩研いでやってるのにこの言い草は許さないぞ！

剣を一通り虐め抜いた後お腹がすいてきたので食堂に行くことに

した。時刻もそろそろ十二時を回る頃だし、軽い手荷物を持って部屋を出る。

「あら、シュウトさん。いいタイミングで出てきましたね」

扉を開けると目の前に案内娘がいた。相変わらず変わらない白いTシャツに黒いジーパンらしきズボン。目に少しかかるくらいの茶色いショートカットの彼女は案外ここでは古参で偉いらしい。この宿は本当にこんなんで経営していけるのだろうか。

「ちよつと受付でトラブルが起きちゃってねー。今度はギルドランクも無いただのチンピラだからちよつとお願いできないー？」

「何で俺なんですか。というか用心棒なんかはここにはいないんですか？」

「用心棒に頼んでもいいんだけどね。ほら、君はあの時逃げちゃったじゃない？ だからサラが落ち込んだじゃってさー。君も最近サラ見てないでしょ？」

確かにここ最近は見えていない。受付も他の子がやっていたし自分の朝と夜の食事の時も乱入してこなくなった。まあ自分が絡まれているのに見捨てられたら印象悪くはなるだろう。自分もある程度は覚悟はしていたし。

「大変だったんだからねー。サラがいないと水が提供出来なくなっちゃうし。今は何とか立ち直らせたけどしぼんだ花みたいな笑顔し

が見せないし。私も悪かったけど君も悪いんだから今日は協力しなさいよー？」

そう言っつて俺の腕をむんずと掴んでそのまま受付へ向かおうとする案内娘。早速のトラブルに俺は頭を悩ませながらもどうチンピラを追い払うのか考えるのであった。

案内娘に連れられて受付までやってきた。目の前には子犬みたい
に縮こまっているサラに、スキンヘッドのおっさんが怒鳴り声み
たいな口説き文句を並べている姿。そんな歳にもなつてナンパつてど
んどけ女好きなんですか。しかも見た目中学生の人を口説くか普通？

……よし。

「あー。受付での口説きはご遠慮して貰えますか？　ここより外
で口説いた方が出会える確率もあると思いますよ」

「何だてめえ！　邪魔するんじゃないか！」

おっさんは聞く耳を持たずに待つてましたと言わんばかりに自
分の胸ぐらを掴んで顔に唾のシャワーを浴びせてくる。アルコール臭
いし酔った勢いでサラを口説いていたのかな？　まあどっちにしろ俺
はたまったもんじゃないが。

話し合いで解決は出来なさそうだ。強行手段に出るか？鍛え抜かれた筋肉がちらほらと目立つが胸ぐらを掴むあたり実は戦いのプロでした、なんてこともなさそうだし。

とりあえず胸ぐらを掴んでいるゴツゴツした手を離させようと手を握って引き剥がした。少し強めに握っただけなのに面白いくらいに痛がってすぐに離してくれた。

そついや前の世界と比べると力上がってるんだよな。今までと争う機会があまり無かったから実感していなかったし、自分の力を知れるいい機会かもしれない。いや、おっさんには悪いけれども。

ゴツい手首にうつすらと黒い痣が残っているところを見ると相当痛そうだ。しかしおっさんはそんなことではへこたれなかったようだ。奇声を上げながら俺に突進してくる。

俺は半歩横に動いて突進を避けて軽く握った拳をおっさんの鳩尾に叩き込む。当たりどころが良かったのかおっさんは苦しげにお腹を抑えてその場に屈みこんでしまった。

随分あっさりと倒れてしまったおっさんに自分がびっくりした。普通もつと抵抗してくるよな？

「……案内娘。この人の介抱よろしくね」

「別に外に放り投げといてもいいんじゃない？ 自業自得だし」

「いいから。お酒の勢いでやっちゃったただけなんだから許してやれよ」

本音は俺のせいでこんなことになってしまった可能性もあるからだけど。不自然な点が結構あったし、もし俺の神様補正のせいで操られているとしたら不敏でならない。

しかし今回は驚くほど冷静にあっさりトラブルを回避することが出来た。頭の中でやるうとしていたことが思い通りに出来たし、かなりキマツてるんじゃないか？

「え……。う……」

何やら困惑しているのかサラが何か言おうとしているのか口を開いているが、内容がしどろもどろで何が言いたいかわからない。餌を求めるウーパーパーみたいな顔をしている。

「大丈夫か？ 今度から気をつけるよ」

「えっと……うん」

「んじゃ俺は行くからな」

食堂で食事を済ましたかったがニヤニヤしている案内娘にイラついたので外で済ませることにした。貯めてたお金も装備と道具でほとんど使ってしまったし、ヘルスコープの報酬も貰えてないから正直財布は潤いが無くなってきているから贅沢は出来ないが。

「あれ、シュウトさん何処に行くの？」

「外で昼食を楽しみたいんだ。悪いかよ」

「悪くないよー？ まあ夕食はここで食べるだろうしねー？ 楽しみだなー！」

うししと笑う意味わからん案内娘を無視して俺は宿屋を出た。案内娘マジでうぜえ。

賑わう露天をぶらぶらと歩きながらお手頃価格の肉と野菜の串焼きを二本買って、色んな声が飛び交っている商店街を歩き回っていると裏路地で何か怪しい光景が見えた。

見覚えのある小さい子供が全身黒服のフードを被った怪しい人の足元に抱きついてた。あの黒服は荒瀬さんなのか？どちらにせよかなり困っている様子だしちょっと行ってくるか。

「あー。荒瀬さんですか？」

「おお。シュウトか。丁度いいところにきたな」

俺の姿を見るなり反発する磁石みたいに逃げようとする子供の汚れた服を、荒瀬さんは口元をニヤけさせながらガツチリと掴んでいた。わたわたと手を振って子供は子犬みたいに暴れていたが無駄だと悟ったのかすぐに大人しくなった。

「こいつはお前のことを色々嗅ぎ回っていたから捕まえてみたんだ。それでな……痛っ！」

子供が荒瀬さんの手を抓りながら首をぶんぶんと横に振っていた。まるで壊れた人形みたいだ。あ、何か荒瀬さんがしたようで子供がいきなり大人しくなった。

「こいつはお前に助けられたからお礼がしたいそうさ。だけど人見知りなのか声をかけられじまいの所を俺に捕まったってわけ」

さぞ楽しそうに語っている隣で子供はプルプル震えながら茹でダコみたいに真っ赤になっていた。いや俺的にその気持ちは嬉しいんだけど子供が少し可哀想だ。荒瀬さんはDSすぎやしませんかね？敵には絶対回したくないタイプだ。

「それとシユウト。自信を持って。お前なら出来る。諦めんなよ！」

「……………？何がですか？」

「んー。まあ何というかアレですよ。べ、別にアンタのためにヒントをあげようとしてるんじゃないんだからね！みたいな感じですよ」

「……………えーと。荒瀬さん？」

「とりあえずこの子供は頼んだ。ちゃんと面倒みてやれよ。お兄さんの約束だぞっ」

そう言うのと否や荒瀬さんは裏路地に走り去ってしまった。何か言っていることが支離滅裂だったが何だったんだらうか？

くいつと袖を子供に引つ張られる。所々破れているつぎはぎの服に泥を被ったような顔は見ていて気分が悪かった。子供がこんな惨

めな生活をしてるなんて日本では見たことがないし、見ていて面白いものではない。

だけど自分はこの子を一回見捨てた。自分が困るから、面倒だからと言って目を背けたんだ。同情するだけして面倒をみないんだ。たらこの子が可哀想だし、同情せずに無視していた方が自分も罪悪感に苛まれずに済むだろうと思っていた。

「僕……面倒みてもらうため、近づいたわけじゃない。困らせてごめんなさい」

子供はそう言って頭を下げるとサッと裏路地に向かって走って行ってしまった。暗くてジメジメした裏路地に。

「……………どうすっかなあ。」

追いかけるか否か。田舎に住んでる爺さんは何してんだらう。すげえどうでもいいけどな。

第十五章（後書き）

期間限定のリア充ことd y冷凍です。いや、ほんとすみませんでした。調子乗りました。

プロットどころか次の話さえも考えてない。計画性無いなチミィ！まあ気長に頑張ります。

第十六章

今俺は子供を背負いながら裏路地を命を削る勢いで、と言っても不死なんだけどさ。まあ一生懸命走っています。後ろには黒服にガスマスクらしき物を被っている刃物を持った追っ手三人付き。どう見ても暗殺者か何かです。本当に神様が憎いです。追われる理由は詳しくはわからないがとりあえず一時間前くらいを遡ってみる。

あの後俺はこれだけ露骨に見捨てるのは気分が悪いし荒瀬さんに面倒見ると言われたし、と自分を正当化しながら裏路地であの子を走りながら探していた。

一キロくらいなら息切れもせずには走れる自信があったしすぐに見つかるだろーと樂觀視していたのが間違이었다。もう同じ景色を三回は見たのにまだ見つからない。あの子は隠れんぼのプロだと汗を流しながら思った。裏路地は商店街より広くはないもののその分道が入り組んでいたりと、ゴミ箱やら家具やらがあって隠れるところも沢山あるから厄介だ。

もうここが街のどこかもわからないし諦めようかと酸素不足の脳でぼんやりと考えていたら、天罰なのかもの見事につまずいてコケた。しかも目の先には薄汚れた水たまり。おかげで服がびしょ濡れになって気分は最悪。

というか何で雨も降らないのに裏路地には水たまりがあるんだろ。もうここに来て一ヶ月近く経つが雨どころか雲さえもあまり見

えない。

濡れた灰色のコートを鬱陶しく思いながらも両手を使って起きようとした。ん？前のゴミ箱の間に何かいるぞ？

「……………はあ」

不幸中の幸いといったところか。転ばなかったら絶対に気づかなそうな場所に子供はいた。木製の黒ずんだ二つのゴミ箱の間に丸まってすっぽりと隠れている。上には大きいゴミが乗っかっているから注意深く見ないとわからないし、危うく素通りしてしまうところだった。

子供はこちらに背を向けて丸まっているので気づいていない。脅かしてやるうかと思っただが犯罪者と間違われそうだから止めておく。悲鳴でも上げられたらたまったもんじゃない。

「あー、君。ちょっと話があるんだけど」

そう俺がゴミ箱の前でそう言った途端に子供は肩を小動物みたいにピクリと跳ねさせてゆっくりとこちらを向いた。そんなに買ったばかりのペットみたいに怖がられても俺はかなり困るんだが。

（暗い裏路地で子供に声をかける灰色のコートを着た人…………丸つきり変質者だねシュウト）

(お前最近俺に遠慮ってものが無いよな)

最近剣は研げだの風呂に入れろだのうるさいったらありやしない。飯を食わせろって言ってきた時はどうするか本気で悩んだ結果、スープを入れた桶に突っ込んでおいたら寝る時にギヤーギヤー騒がれるという有様になった。ってそんなことはいいんだよ。

「んーとき。君の面倒をみたいんだけどさ。大丈夫？」

子供のこちらを見る目は怯えている小動物のようだった。そりゃいきなり面倒みたいなんて言われても怪しまれるだろうけどさ。

「悪いようにはしないって言っても信用出来ないよねー。うーんど
うしよー」

瞬間、背中にドンツとボールを当てられたような衝撃。倒れるような衝撃では無かったのに俺は何故か倒れてしまった。

立ち上がるうとしたが力が入らない。俺はそのまま汚い地面に這はいいつくはる蹲ることしか出来なかった。前にいる子供は幽霊でも見たような顔でこちらを見ている。

お腹辺りに感じる生暖かい液体で大体想像がついた。俺は背中を誰かに刃物で刺されたか魔法を打たれたらしい。銃なんてものは多分無いだろうし多分血の量からして刃物か何かだろう。鈍器だった

ら血は出ないだろうし。

俺の横を誰かが通った。黒い靴が見える。数からして三人くらいか？

こんな状況なのに自分が恐ろしく冷静なことに少し寒気を覚えた。自分じゃなくて他人を見ているような感覚。腕を喰いちぎられたりするのを体験すれば背中を刺されたくらいじゃ絶対に動揺しない、とは言い切れない。平和な日本で血なんてあまり見ない物だし。

だけど俺はパニックになって騒ぎ出すことは無かった。ボーツとゲームのディスプレイを見ているような感じだ。とにかく冷静だ。うん。

「目標を発見。速やかに確保する。しかし慎重に事を進める。ジェスはそこの死体を処理しろ」

何かの魔法なのか人間味のない機械みたいな声だった。そんなことはいい。ここからどうすればいい？どうやらこいつらの目的はあの子供らしい。前のおっさんみたいなのシヨタコンにしては明らかに違いすぎる。声まで隠蔽する細さに人を躊躇なく一撃で殺す残忍さ。あの子供はそんなに重要なのか？

(シユウト。相手は三人でしかも暗殺の手練だし、素直に逃げた方がいいと思うよ。今はジェスって奴が死体処理の準備してるから時間はあるし、後の二人もあの子供を狙ってるから何とかかなると思うよ)

よく見えないがジエスは俺の持っている異次元袋と同じ物をいじっている。確か生き物に入れられなかったはずだから何か死体処理の道具を探しているのだろう。火葬とかはまっぴらだ。

後の二人は何故か子供のことを警戒しているのか中々動かない。何で警戒してるのかはわからないがこっちは時間が出来て好都合だ。

(あの子を助けるぞ)

(馬鹿なの？ ポジティブになったのはいいけど気持ちの問題でこれは解決出来ないよ？ いくら頑張ったって今のシュウトじゃ歯が立たない)

(ただ突っ走って行くだけじゃ勝てないことはわかってる。作戦がある。勝算はあると思う)

馬鹿げた神から貰った能力と魔法と魔法と道具を使えば勝算はある。相手が暗殺の手練だろうが隙をつければこっちのものだろう。

(じゃあシュウトは 人を殺せるの？)

(……………)

(無理、だよな。サソリを殺したくらいで動揺してたもんね。シュウトに人は殺せない)

(別に人を殺さなくたってこの作戦には関係ない)

(そんな覚悟じゃ素人が玄人に勝つなんて無理だよ。ここは意気地にならずに逃げた方がいいよ。シュウトは落ち着けば頭が回るんだ

からわかるでしょ？)

確かにそうかもしれない。今ならただ走り出すだけでも逃げられるだろう。死体がまさか走るなんて予想はしてないだろうし、全力で明るい方向に向かって走ればこの危機を脱出出来るだろう。

今回は仕方がなかった。しょうがなかった。これは戦術的な撤退なんだ。それにあの子は一回助けたじゃないか。命を張ってまで助けるなんてお人好しすぎやしないか？しかも自分の自己満足

心に浮かんできたその言葉達を払拭する。言い訳するのはもう沢山だ。

(俺は人を殺せない。だけどあいつらを何とかしたい)

(それは色々求めすぎなんじゃないかな)

(俺は死なない。それに身体能力も上がってるし魔法も使える。道具も一応あるし作戦もある)

(痛覚はあるから怯むし身体能力はあっても使いこなす技量はない。魔法も初級魔法しか使えないから最初で最後。頼れるのは道具と作戦だけだよ)

(それでも……やってやる。ここで逃げるのが最善だったとしても、俺は逃げたら死ぬほど後悔すると思う。だから逃げない)

呆れたようなため息が返ってきた。俺だっつて若干自分の我儘加減に呆れているぞ。

だけど子供一人救えないでどうやって世界を救うっていうんだ。戦争なんてどうやって止めるっていうんだ。

サラもあの子供も一回見捨てた。今度こそ、今度こそやってやる！ 覚悟はもう決まった。

(…………もう知らないっ)

ごめんな剣。男に生まれたらやっぱり引けないこともあるんだよ。俺みたいな奴でもな。

ジェスという男は準備を終えたのかこちらに近づいてきた。さあ、失敗出来ない作戦の始まりだ。

第十六章（後書き）

眠いです。主人公立ち直り早いのはご都合主義ということ。俺だ
つたらあと一ヶ月くらい引きこもる自信がある）どやあ

第十七章

自然と震える体を抑えながら武者震いだと心の中で復唱する。失敗したらそれこそ絶望しか無い。今も自分の吐息が相手にバレーしまうんじゃないかと根も葉もないことを想像してしまっている。出来る限り浅く呼吸してるし俯せだからバレーないとは思っけどかなり怖い。

そしてジェスの靴が俺の目の前までやってきた。俯せのままなるべく息を殺してバレないように様子を確認する。

ジェスは何かの道具を持ちながら目の前でしゃがみこんでいるようだ。今が絶好のチャンスだ。何回も反復した虫食いだらけの作戦をもう一度頭に刻み込んで行動に移す。

まずは土の初級魔法、ソイルを自分の右手を覆うようにイメージして発動する。次に雷の初級魔法、サンダーをこれまた自分の右手を覆うようにイメージする。魔法を詠唱無しで出来るか不安だったが成功したようだ。証拠に自分の右手には針を何本も突き刺されたような痛みが走っている。

手に初級ではあれ雷を纏わせたらどうなるかは一応想像は出来ていたが、如何せん覚悟が足りなかったようだ。悲鳴が漏れそうになったが歯を食いしばって何とか痛みに耐える。土の魔法で手を保護していなければ絶対悲鳴を上げていただろう。

この痛みから早く解放されたいがためか、おくびよう風が吹いていた心が瞬時に晴れ渡った。素早く顔を上げてジェスの手を思いっきり掴む。ガスマスクらしき物を被ってるから表情は見えないがジ

エスは相当驚いただろう。

手を掴んだ瞬間にジェスの体は釣り上げられた魚みたいに激しく跳ねた後、意識が無くなったのかこちらに倒れ込んだ。すかさず抱きとめて音をたてないようにゆっくりと地面に下ろす。前の二人には子供の方に集中していることも相まって気づかれなかったみたいだ。

次は前の二人だ。まずは背後からの奇襲で一人を行動不能にして、二人目は道具を使って足止め。その隙にあの子供を背負って逃げる予定だ。大丈夫だ。きつと上手くいくはずだ。

後ろからそつと近づいていく。抜き足差し足忍び足つといったところか。友人が名前の由来は武術の歩法からきているとか何とか言っていた気がするなあ。

何だかんだで一人の目の前に来た。とりあえず異次元袋から外気に触れると光る粉が入った袋を三袋ほど取り出しておいて、更に右手に纏っている魔法が切れないように重ねがけする。よし、準備は万全だ。

右手を暗殺者の首元に添える瞬間だった。

「ゲレス！ 跳び退け！」

後ろの暗殺者は人間味のある声でそう叫んでいた。さっきの奴は気絶なんかしていなかった。いや、気絶はしていたはずだ。あ……気絶した時の特徴を確認していない。ガスマスクを被っていたから

白目になっていたかなんてわかるはずがないじゃないか。

「チッ！」

目の前の暗殺者の対応は早かった。すぐに横へ跳び退いて地面を一回転してギリリと光るナイフを構える。取り残されていた一人もすぐに対応して子供を視界に置きながらもこちらを警戒している。

「おいおい。ゲレスがしくじるなんて明日は雨でも降るんじゃないかな？」

「いや、確かに殺った感触はあったんだが……クソツ。暗殺を失敗したのは新人以来だぜ」

「二人共、いつ声帯を戻していいと言った？ それと世間話は後にしろ。今は目の前の邪魔者を消すのが優先だ」

「へいへい。全く我らのリーダー様はお堅いこって」

自分の奇襲を避けたゲレスはケラケラと笑いながらもこちらに煮えたぎるマグマのような殺気を送ってくる。暗殺を失敗したのが悔しかったのだろう。狼と立ち会った時よりはマシだがあくまでマシなだけだ。ひしひしと伝わってくる殺気に足が震えそうになる。

「あー。マスクが暑苦しいな。リーダー？ 取っていい？ どうせ声もバレちまったんだしさ。もう顔なんか隠さなくてもよくない？」
「好きにしる。俺は任務が成功出来れば構わない。ただし生きて帰すなよ」

「わかってますっつてえ。素顔見せるんだから生きて返すわけないでしょう?」

ゲレスはまたケラケラと笑いながらガスマスクを片手で乱暴に取り外した。まるで彼の気持ちを表すような真つ赤な長い髪。つてこの人……。

「女性だったのか……。道理で声が高いと思った」

「ハッ。男が私の顔を見たのはお前で二人目だ。私の初めてを奪えなくて残念だったなあ?」

ケラケラと壊れた人形みたいに笑う彼女。何処か頭のネジが外れているような印象を受けた。顔は整っていて綺麗なのに少し勿体ない気がする。

「おら、じゃあさっさと死ねや!」

いきなり笑うのを止めたかと思っただらいきなり赤い目を大きく見開き、ナイフを振り上げてこちらに向かってきた。大きく横に飛び退いて銀の斬線を描くナイフを避ける。

どうやら他の二人は手出ししないらしい。こっちとしてはかなり助かる。三人も相手にしたら勝機は確実に無かった。

(シユウト？ 結局戦うことになってるけど？ 僕は力貸さなくていいよね？)

(……すまん)

(本当に馬鹿。シユウトのバカッ！ あれだけ言ったのに言うこと聞かないからこんなことになったんだよ！？ もうっ！)

(……わかった。これは俺の責任だ。剣は手出ししなくていい)

(ちよっと！？ まだ話は)

剣との会話を打ち切る。考え事をしながら凌げるほど俺は強くもないしな。

次々と繰り出されるナイフの乱舞に俺は反撃の術を見つけることが出来なかつた。道具を取り出すどころかナイフを避けながら呼吸を整えるだけで精一杯だ。魔法も無詠唱で出来たのは落ち着いていだからだと思っしあまり期待は出来ない。

「アハハッ！ ちよこちよこと逃げる虫だなあ！ ほらっ！ このまま避けてても私には勝てないよ！？」

返す言葉もない。というか返せない。こっちは命懸けでナイフ避けてるから精神的にもよろしくないんだよっ！

若干大振りの攻撃を避けて体制が崩れたところにすかさず蹴りを放つが、彼女は海を泳ぐ海蛇みたいに躲していく。しかし後方に少し退いたので右手に雷。左手に氷の魔法を無詠唱で纏わせる。勿論土属性魔法を先に纏わせることを忘れない。上手くいってかなりホツとした。俺って本番に強いタイプ？

とりあえず次に来たナイフにあわせて左手で受け止めて右手で感電させる即興で思いついた作戦を実行する。果たして上手くいくだろうか？

「どんな小細工したって私には勝てないよお？ さっきは何をやったかは知らないが……いい加減死ねっ！」

さっきよりも大振りの攻撃だ。これなら止められる。左手の手の平でナイフの刃先を掴む。若干ナイフがめり込んできて肉が切れたが騒ぐほどの傷ではない。

「なっ！」

ナイフは止まった。それどころか氷の魔法はナイフを伝わって彼女の右手に侵食していつている。これは嬉しい誤算だ。このまま右手を彼女に叩き込んでやる。

持っていたナイフを離して今度は右手で彼女の肩を掴んだ。瞬間、彼女の体は大きく跳ねて五メートルほど後ろに吹っ飛んだ。いや、彼女がわざと後ろに跳んだのか。初級とはいえ普通の人間が食らったら気絶するほどのショックなのによく耐えられるもんだ。こいつらは化け物か。

「……フフツ。アーツハツハツハ！ ヒヤハハツ！」

少し前でしゃがみこんでいる彼女はいきなり狂ったように笑い出した。あれはもう目の焦点が合っていない。目が怖いくらい開いているから瞳孔も開いてるだろう。何か不気味だ。電気で脳でも狂ってしまっただろうか。

「いいねえ！ いいねえ！ まさか餓鬼にこれだけやられちゃうとは思ってもしなかったよ！ ヒツヒツヤハハハハハ！ 笑いが止まらねえよ！ しかも魔法か？ 無詠唱で使う餓鬼なんか生で見たことねえよ！」

どうやら無詠唱で魔法を使ったことに驚いているらしい。頭を両手で抑えてヒイヒイ笑って地面を転がる始末だ。あれとは正直関わりたくないな。頭おかしいだろあいつ。怖えーよ。

「面白いもん見させて貰った礼だ。気づかぬ間に殺してやる」

狂ったように笑ってた彼女がいきなり笑いを止めてナイフを横に投げ捨てた。……何だ？まるで傀儡人形みたいに力を抜いているように見えるが。それに何故武器を捨てたんだ？

「シね」

俺が瞬きする間にはもう目の前に彼女はいた。ずぶりと胸の中に彼女の手が入っていくのが見える。ニヤリと口角を三日月のように歪める彼女。

痛いなんてものじゃ無かった。意識を丸々削がれるような激痛。爪でこのコートを貫いたのか？かなり丈夫なはずんだけどなあ。ハハッ。

ふらつと目眩がして意識が消えそうになったその時だった。

子供の顔が彼女の後ろから見えた。恐怖しながらも悲しそうで、何もかも諦めたような表情をしていた。まるで死んだ魚のような目。あの目は……前の俺と同じ目だ。何もかもやる前から諦めて言い訳ばかり口にしていた自分にそっくりだ。

言ってやりたかった。救ってやる。その底なし沼から俺が引きずり出して救ってやると言っただけでやりたかった。

「うおおおおおおオオオオオオ！！！」

痛みなんて感じない。目眩も……しない！

惚けた顔をしている彼女の腹を蹴り飛ばす。途中彼女の右腕が抜けて胸から血が大量に溢れ出したが気にはしない。不意打ちの攻撃には対応出来なかったのかしゃがみこんでいる彼女の腕を掴んで、固まっている二人の方へぶん投げた。

ここぞとばかりに光の粉を辺り一面にぶちまける。まるで天の川を間近で見ているような素晴らしい光景だったが、出来れば胸に穴が空いていない時にみたかったもんだ。これで少なくとも目眩まし程度にはなるはずだ。

これまた鶏が空を飛んでいるのを目の当たりにしたような顔をしている子供を抱えて裏路地を走る。とにかく明るい方向へと。外を目指して。

第十七章（後書き）

戦闘描写だから筆が進むと思ったらすうでもなかったです。難しい。

そろそろ外伝的なものもいれようか。いや、更新遅くてごめんなさい。あとポイントとお気に入りありがとうございます。励みになります。

第十八章

「くそつ。どうすりゃいいんだよ……」

回想も終わったが奴らの狙いはわからない。この子供が目当てなのはわかってているが一体何のために狙っているんだ？

「おらおら！　いつまでそれが保てるかなあ！？　ヒヤアアハア
ああああー!!」

後ろを追いかけてくる頭のイカれた女は単三電池サイズの針のよ
うな物を雨のように投げってくる。他の二人は途中で何処かに消えた、
と思ったら俺の目指す出口付近に必ずいいタイミングで出現して通
せんぼしてくる。攻撃してこないのは助かるが精神的に厳しい。ご
飯の前で待てを言われる犬にでもなつたみたいだ。

しかもこの女は裏路地からでも表に聞こえるような大音量で叫び
散らしているのに人が来る気配がしない。周りに結界魔法でも張っ
てるに違いない。ギルドの兎耳お姉さんと同じようなモノだろう。

このまま相手が諦めるのを待てるほど俺も余裕はない。背中に針
を付けて僕はハリネズミの生まれ変わりなのさ！って言うわけにも
いかないから、光の初級魔法ライトを壁に変化させて針を凌いでい
る。流石に他の六属性よりレアで成功率も低いだけあってか、光の
魔法は強く感じる。針は刺さるところか弾かれているし。

しかし魔力がこのまま続くかが心配だ。湖の水を飲んだから魔力が無尽蔵になつたらしいがいくら何でも無限つてことはないだろう。しかも俺は一回死んでいるし胸に穴も開いた。体の再生にどのくらい魔力を使ったかわからないし、自分の魔力の残量の確認なんてまだ出来るはずもないからいつ魔力切れを起こすかが不安で仕方ない。

それにこの女は遊んでいる。さっき胸を刺された時は動きが全く見えなかった。今それを使って俺に追いついて直接攻撃してくればいいのにそれはしない。俺は子供も抱えているし魔法も防御しか出来ないから近づけばもう詰みのはずなのに。

攻撃しようとも思ったが魔法は完璧にイメージを確立しなければ発動しない。手の平ならまだしも、俺は背中から炎の玉を飛ばして相手を攻撃するなんてイメージは完璧には出来ない。子供を地面に投げ捨てるなんてことも出来ない。結局選択肢は逃げるか諦めて立ち止まるかの二択しか用意されていないのだ。

「ほらほらあ！　そろそろ諦めたらどうだい？　命乞いすれば助け
てあげるかもしれないよお？」

後ろを見ると肉食獣のような目を痛いくらいに見開きながらこちらに迫ってくる彼女。命乞いしたところで絶対に助けしてくれないだろう。手に持ったナイフで俺の体を汚らしく喰い散らかすに違いない。

「……僕を捨てた方がいい」

「うるせえ！　俺が面倒みるって言っただろうが！」

抱えている子供がそう囁いてくるのを一蹴する。さっきから捨てるだの言って暴れるからたまったもんじゃない。もう自分は底なし沼に両足をつ突っ込んでいるのだ。出来れば自分で走ってもらいたいが子供の足じゃ無理だろうし。

流石に走りすぎたのか息も切れてきた。もうかれこれ十分は走りっぱなしな気がする。頭もクラクラしてきた。脇腹も痛い。棒みたいになつてる足を休ませたい。休みたい。そう思ったのが間違이었다。

背中の光魔法がフツと消えた。その瞬間に女の楽しそうな叫び声が聞こえてくる。

「やっと解けたああああ！　ここからが楽しみだよお？　そおらああ！」

背中にドツと衝撃が走る。針が一本。二本。三本。四本。ダーツの的にでもなつた感じだ。

針が刺さつたままじゃ再生しても無駄だろう。両手も塞がってるから抜けもしない。このままじゃ本当に不味い。また光の壁を張らないと！

しかし駄目だった。魔力切れかイメージが足りないかはわからないが光の壁は自分の背中を守ってはくれなかった。こうしている間にも針は順調に自分の背中に刺さり続けている。もう一桁は超えた

んじゃないだろうか。生まれ変わったらハリネズミにでもなるかな。

背中に走る鋭い痛みを堪えながら走り続ける自信は俺には無かった。迎え撃つなんて馬鹿な考えまで浮かんでくる始末だ。何か方法は無いか？裏路地に役に立つものは何か。

しかし辺りにめぼしい物は見当たらない。薄汚れた木のゴミ箱に虫がたかっているだけ。何か。何かないか。

「……お兄さんは充分頑張ったよ」

子供から聞こえたその言葉で走る速度が急に落ちた。一旦遅くなってしまったらもう加速することなんて出来ない。段々と遅くなつて遂には足を止めてしまった。いざ動かそうとしても足裏から地面に根でも張り付いたみたいに動かない。

後ろを見るとナイフを持った女がニタアと口裂け女みたいに笑っていた。

「やっと止まったかい坊や。今はどんな気分だい？ 絶望？ 悲しみ？ 痛い？ キヤキヤキイ！」

狂った女はナイフを持ちながらこちらに向かって歩いてくる。しかし足元は動かない。逃げることを諦めたのかピクリとも動かない。

「やめて。この人殺さないで。貴方達の狙い僕だ。この人関係ない」

子供がするりと自分の腕を抜けて彼女の前に立ってそう言った。怖いはずだ。こんな狂ったナイフを持った女の前に立つなんて怖いはずだ。子供なんだから。

だけど目の前の子供は怖がる素振りさえ見せなかった。子供の一言に甘えて足を止めてしまった自分が情けなく思える。

「こつちにもメンツつてもんがあるんだよ餓鬼。まあそいつをゆっくり殺してる間に餓鬼は他の奴らに捕まってるだろうし、私にはそれを受け入れる義理は無いわけ。わかるう？」

「言うことかかないと僕死ぬ。舌嚙む」

「……クキィキヤキヤキヤ！ 餓鬼が私相手に交渉なんて生意気だ、ねえ！！！」

彼女は目も眩むような速さで子供に向かって針を投げた。当然避けられるはずもなく針は吸い込まれるように子供の二の腕に刺さった。くつ、と小さい悲鳴を漏らす子供。

「即効性の痺れ薬が塗ってある針さ。これで餓鬼は動けないよ。さあ、次は坊やの番だよ？ 簡単には殺さない。ここで四枝の骨を砕いてからアジトに持って帰って拷問してあげる。貴重な魔術師様だからねえ。最後は私の奴隷にしてあげるわ。キヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

こてん、と子供は固まった石像みたいになって地面に倒れた。そして不気味で狂気のにじみ出た笑みを浮かべる彼女。

「じゃあ……足から壊していくよ」

彼女はまたナイフを投げ捨てた。来ると思っている頃にはもう遅い。彼女はもう目と鼻の先にいた。胸を容易く引き裂く凶器とも言える手刀が振りかざされる。

怖くて反射的に俺は目を瞑ってしまった。もう、終わりだ。

「ギッ！ あああああアアああああ！！」

大きい悲鳴が裏路地に反響した。……俺は悲鳴なんか上げてない。恐る恐る目を開けてみる。

「また何か小細工をしたのか餓鬼いいいいイイイ！！」

彼女の右腕が有り得ない方向に曲がっていた。俺は魔法なんて使

ってないし道具も使っていない。一体何が起きたんだ？

周りを見回しても特に変化はなかった。目を瞑る前に変わっているところは……目の前に布に包まれた剣が落ちていることぐらいだった。

……助かった。というか剣は自分の意思で動けるんだな。

今前で腕を抑えながら苦しんでいる彼女に魔法を打ち込めば勝機はあったかもしれないが、背中ジクジクとした痛みと酸欠の脳で魔法が成功する自信がなかった。まずは背中に刺さっている針を出るだけ早く抜き、その後動けない子供と剣を持って出来るだけ早く前へと歩く。

(ありがとな剣。本当に助かった)

(シウトが捕まったら僕も身動きとれないからね。シウトのためじゃないから。自分のためだから。……だから早くここから逃げて僕を宿屋で研いでよね。約束だからねっ！)

心の中でお礼を言ったが剣は素っ気なかった。まあ危険だっけ言っているのにそれを押し通って子供を助けたんだし怒ってて当たり前か。しかも勝手に約束を取り付けられてしまった。宿屋に帰ったら丹念を込めて研いでやるとしよう。

再生が終わったのか背中痛みも消えて少し落ち着いてきた時、彼女の笑い声と共に骨を砕いているような音が聞こえた。折れた腕を強制的に直しているようだ。B級ホラーどころか一種の心霊体験を目の当たりにしている気分だ。

後ろを見ると彼女の仲間が腕を応急処置しているようだ。荒い治療だと思いつながら子供を抱え直して急いで走り出す。ここからどう彼女を撒こうか。答えは……。

先の曲がり角を曲がって少し離れた後に詠唱を始める。やたら長いがまだ彼女が来るには一分くらいはあるだろうし、ゆっくりと慎重に詠唱を続ける。

「また追いかけてこかいいい!? 私もう飽きちゃったなあああアアアア!?!」

「そうかよ。俺も逃げるのもう飽き飽きだ」

曲がり角を曲がってきた彼女にそう言葉を返した。子供はライトで作った球体の中に入れて地面に置いて、更にモヤツとボールの形状を想像して棘を追加。次に闇の初級魔法、ダークネスを地面にカーペットを敷くように広げる。大体自分を中心にして半径五メートルくらいだろうか。

「光と闇を同時に使ったあ? アツヒヤヒヤヒイひゃ! 餓鬼は貴族の御子孫なんかなのかい?」

「うるさい。黙って俺を殺すことも出来ないのか? 御託はいいから早く俺を殺してみろよ」

軽い挑発に彼女はすぐに乗ってきた。ナイフを持ってこちらに猪突猛進。こんな挑発に乗ってくれるなら勝率はぐんと上がる、と言

つても分の悪い賭けに近いが。

しかしあのまま逃げてもジリ貧になるだけだと思っただから思い切っって対峙することにした。剣にまたとやかく言われそうだな。

闇の効果は侵食。吸引。破壊の三つだ。他にも効果はあるが代表的なのはこの三つ。初級魔法のダークネスはこの三つの効果全てを持っている。そしてある程度自分が好きな効果を選べる。俺が今地面に敷いたダークネスには吸引の効果が強めに設定してある。

吸引は相手の体力を吸収したり動きを制限出来る。つまり彼女は俺の陣地に入ったら動きがかなり悪くなる。相手が冷静なら様子を見ると思っただが、ここまで単純だと少し不安さえ覚えてくる。まあこのままなら上手くいくだろう。

途中で急激に走るスピードが遅くなる彼女。そこに一気に近づいていって、顔面に向かって拳を唸らせる。女性だから顔は殴らないとか、そんなフェミニストなことは頭から除去されている。今はこの女を倒す。どんな手を使っても。

しかし流石は暗殺者と言ったところか。闇の効果で動きが制限されているはずなのに彼女は横に飛び退いてそれを避けた。だがそんなことはお見通しだ。すぐさまファイヤーボールを右手から連射する。これも忍者みたいに人間離れた跳躍で彼女は回避していく。

「チツ！ 魔術ばつかで面倒だねえ！」

「おいおい。こんなに弱いんだっただら最初から戦つとけばよかったなあ」

見え見えの挑発にまたも乗ったのか、彼女はクスクスと不気味に笑いながら下を向いて、ナイフを横へ投げ捨てた。

「ヒィヒャヒャヒャヒャ！！ そんなに早く死にたいならあすぐに殺してやるよおおオおお！！」

来る、そう思った瞬間に彼女は目の前に現れた。奇声を上げて唾を撒き散らしながら、彼女は指を尖らせて自分の心臓を一突きしように腕を鞭のように振るった。

「死ねええエええエええ！！」

彼女がナイフを投げ捨てたら目の前に来る。そう心の中で念じていたから自分は早く動けたし、準備は出来ていたから問題はなかった。

ソルトで胸と右手をコーティング。更にライトで分厚い壁を目の前に作成。そして水の初級魔法、ウォーターを壁にして腕の勢いを弱める。

ここまでしたにも関わらず彼女の手は自分の胸に穴を開けたのは流石といったところか。だが心臓にまでは届いていない。彼女はまさか自分が耐えられるとは思わなかったのだらう。その確かな自信を崩された彼女に生まれた隙を見逃すほど俺も馬鹿じゃない。

すぐにサンダーを右手に纏わせてずぶ濡れの彼女の手を掴む。
水は電気をよく通す。

断末魔を言う暇もなく彼女はこつちを恨めしげに睨みながら地面に倒れた。今度は絶対に気絶したはずだ。もしかしたら死んだかもしれない。

でも勝った。今は猛烈に湧き上がってくる達成感に身を任せただった。声を出すのは流石に危ないので心の中で盛大に喜んでおく。興奮したせいか胸から血が溢れてきたが痛みはあまり感じなかった。

しかし勝利の余韻にいつまでも浸っている場合じゃないと自分を戒めて、二の腕に刺さっている針を動かさないように子供を抱える。早くここから離れないと不味い。まだ仲間が二人もいるんだ。

「逃げられると思ったか？」

走り出そうとした瞬間にいきなりガスマスクを付けた二人が何処からともなく現れた。来るとは思ったが早すぎる。自分は彼女に任せっきりにされていたのだと都合のいい解釈をしていたが、やっぱり見張っていたのか。

「まさかゲレスがやられるとはね。しかも死なないように加減されてだ。なあリーダー。こいつスカウトしよう。闇と光を使える奴なんて滅多にいないよ？」

「黙れジエス。ゲレスは狂気に身を任せすぎるからこんな小僧の策

にハマるんだ。今回はいい教訓になったろう。だが小僧は処分決定だ。確かに育てがいはありそうだがゲレスが許さないだろう」「リーダーもゲレスもお堅いこつて。年寄りじゃあるまいし、おつと。わかりましたよ。黙ります黙ります」

ナイフを首元に当てられてジェスは手をヒラヒラと上げて降参のポーズを取っている。あのリーダーはかなり部下に厳しいようだ。

「それじゃ俺にやらせて下さいよ。流石に彼も満身創痍でしょうし」「いいだろう。ならさっさと殺れ。アイツの結界魔法が完璧だとしてもそろそろ誰かに察知されるかもしれない」

どうやら俺は殺されるらしい。肺に穴でも空いたのか息がしづらい。それにあのジェスは俺の戦闘を見てたらしいから魔法も効かないだろう。

「くそっ……」

「あ、素顔見せてやるよ。死ぬ間際には美人が見えた方が悔いも残りにくいだろうしね？」

ジェスがガスマスクを脱ぎ捨てた。青い坊っちゃんみたいな髪型でボーイッシュな感じの……女の子。また、女性。暗殺者には普通男性ばかりだと思っただが……。

「男女平等か。出来れば他の所で知りたかったよ」

「むさ苦しい男に殺されたかったの？ あ、貴方ってそっちの人？」
「違うわ！」

親しげに話しかけてくるのに凄い違和感を感じる。普通すぐに心臓を串刺しとかにするだろ。

「一応俺……じゃない。私の中では貴方は結構評価してるのよ？」

ゲレスが狂気に飲まれてたはいえ貴方の体術は素人丸出しだったし、魔法もあまり使い慣れていなかった。それでゲレスに勝ったっていうのは凄いなと思うわね。違う場所で会ってたら惚れちゃいそうだったよ？」

「そりやどうも。もう、さっさと殺せよ」

「出来るだけ楽に殺してあげるね。痛いのは嫌でしょ？」

別にどうせ死なないから関係ねーよと言いたかったがそんな暇はなくて、首に少し痛みが走ったと思っただら地面に倒れていた。そして何故かジェスに首を腕で抱えられている。目の前にはジェスの青い目が真っ直ぐとこちらを射抜いていた。

「毎回こんな面倒なことしてるのか？」

「ご褒美よ。ご・ほ・う・び！ 私の腕の中で安らかに眠りなさい」

反撃のチャンスは死んだと思われた時。そこで光と闇の魔法を無詠唱で発動して子供を抱えて逃げる、が妥当かな。と言っても二人

相手じゃ流石に効かないか。詰んだ。ゲームオーバー。

不死身と知られたら何をされるんだろうか不安が襲う。一生カプセルの中で暮らすのかな……。嫌だ。だけでもうどうしようもない。

(シュウト。約束、守ってよ?)

(無理。完全にゲームオーバー。詰みだよ。お前は自分で動けるんだから今の内にどっか飛んでいけよ)

(さっきのは僕の魔力を半分使ったからね。もう無理だよ)

(そうかよ。……悪かったな。お前の言うこと聞いてたらこんなことにならなかったのにな)

(後悔してる?)

(してない)

(……ならいいよ。シュウトが永遠に閉じ込められても僕が居るから。暇つぶしに喋ってあげてもいいよ?)

(ん、サンキュ。)

ジェスが長細い針みたいなのを取り出した。あれで心臓突き刺して俺は死ぬだろう。呆気ない最後だった俺の人生。

「修斗。お前はそこで諦めるのか? 女の腕の中で、ぬるま湯なかに浸かってんじゃないよ!」

誰かの声が聞こえた。いや、一筋の光明が差し込んだとでも言うべきか。

第十八章（後書き）

一時間遅れかー。眠いです。誤字とかあったら教えて下さい。主人公メンタル弱すぎだと従兄弟に言われて、ためーにそっくりだよって思ったのは秘密です。

第十九章

「俺が一生懸命見えない結界探して破ってやっとたどり着いたと思つたら、青髪娘とお楽しみ中でしたか。いいご身分に成り上がったんだなあ修斗君？」

「ち…がいま…すよ…」

痺れ薬か何かを打たれたせいかわ舌が思うように動かなくて喋りにくかった。何やらジェスがまさかの第三者乱入に驚いたのか目を見開いている。それよりも口を歪めながら淡々と喋る荒瀬さんは少し怖かった。

「チツ。まさか本当に結界を破る奴が来るとはな」

「お前はフラグ建築家一級を目指せる逸材だな。自信持っていていいぞつとお！」

そんな軽口を言った途端にナイフが荒瀬さんに向かって飛んできた。ただどくると回りながら荒瀬さんはナイフを避ける。というか半分ふざけているように見える。

「ゲレスは素人の小僧に倒されて奇怪な実力者が乱入。今回の任務は想定外なことが多過ぎる」

「奇怪な実力者、か。最近色んな場所で暗躍している組織の幹部にしては高評価だねえ」

荒瀬さんはケラケラと面白そうに笑いながらも口ボ声の暗殺者の攻撃をヒラヒラと避けている、というより避けていると言った表現はおかしいかもしれない。何だろう。攻撃を目で見て避けるんじゃないくて、攻撃がそこに来るのをわかっていてそこから体をずらしているような感じ？

それにしてもあんなに激しく動いているのにフードが取れないのは何故だろうか。相変わらず口から上は見えない。絶対領域ってものなのかね。

「おい修斗。テメーはいつまでそいつに腕枕されてるつもりだ。叩き潰すぞゴラァ」

「痺れ……薬を打たれましたね……？」

「気持ちの問題だ」

「無茶……言ってくれますねっ！」

その言葉を返して青髪のジェスの腕から難なく逃れて光の玉に入っている子供に向かって走り出す。よくよく考えれば簡単なことだった。ヘルスコープイオンの毒は効かなかった。ならコイツが打った毒も効かない可能性もあったんだ。

「嘘！？ 人間じゃ指一本動かせない程の猛毒なのに！？」

その言葉を聞いて若干足元が痺れてきたような気がしてきた。いや大丈夫だろ。多分。

「俺と会話した時点で舌が動いてんだろ。もう毒は解毒出来るよ。さっさと子供運べや修斗」

「何か……荒瀬さん怒ってます?」

「怒ってねえよ。こいつらは俺が抑えてるからさっさと走れよったあ！」

口ボ声の暗殺者の腹に回し蹴りを入れながら荒瀬さんは大声で言い散らした。五十メートルくらい離れてるゴミ箱にまですっ飛ばされた暗殺者を見て少し口角が引きつった。荒瀬さんそんな怪力何処から出したんですか。見た目はかなり細身だぞあの人。

「簡単には逃がさないわよ。シュウト君?」

子供を光玉から出して抱えてる間にジェスがこちらにナイフを持って迫ってくる。光の壁をイメージするも雑にイメージしたせいか発動してくれない。

「させるかよ青髪娘。そら、吹っ飛べ」

水の壁を張ろうとした瞬間に荒瀬さんがいきなり前に現れてジェスの胴体を蹴り飛ばした。瞬間移動でもしてるのかこの人は。今さっきまで結構距離離れてたぞ?

「メチャクチャですね荒瀬さん……」
「不死身のお前に言われたくないわ。毒も自動解毒とかチートすぎだろ」

そう軽口を叩いていたら前から単三電池サイズの針が雨のように飛んできた。魔法を展開する時間も無い。壁は間に合わない。俺は反射的に子供を抱えて針に背を向け、そしてすぐに来る痛みに目を瞑った。

だけど痛みは来なくて何かを弾くような音が響きわたっているだけだった。前を見ると針を荒瀬さんは全て素手で弾き飛ばしていた……どうやってるんだろうか。腕が金属にでもなっているんだろうか？

荒瀬さんに弾かれて勢いを無くし、地面にばらばらと落ちていく針。針の嵐が止む頃には、地面に子供が作った砂山程度の針が落ちていた。

「そら。お返しするぜ！」

荒瀬さんがそう言って片足を踏み鳴らすと、地面に落ちていた針がカタカタと動きながら宙に浮いた。無数の針はそのまま前の二人に向かって雨のように降り注いでいく。いや、荒瀬さんの方がよっぽどチートだろこれ……。

「む、流石にあんくらいじゃ死なないか。さて問題だ修斗。ここから何をすればここから逃げられると思う?」

「荒瀬さんならあの二人倒せるんじゃないですか? 俺は……痛つ!」

拳骨を食らわされた。痛い痛い。指を尖らせて殴つたよこの人!

「子供とお前守りながら戦えるかってんだ。ヒント。裏路地とはいえこんな騒ぎが起きてるのに誰も来ない理由は何だ?」

「遮断結界が張ってあるんですね?」

「そう。詳しくは閻属性の結界だけど、それを壊せば周囲が騒ぎに気づくからあいつらは退かなければいけない。そうすりゃ俺達の勝ちだ」

でも荒瀬さん結界を破ってきたんじゃないのか? ……閻の吸引でどっから魔力を吸引して結界を自動修復しているのかな? 質問しようとも思ったがロボ声の暗殺者がロケットみたいに飛んできたから聞くことは出来なかった。

「とりあえず修斗は爆発する光玉を作れ。イメージしろ。十秒後に爆発する花火をな。その後は俺に任せな」

そう言つて荒瀬さんは暗殺者のナイフを素手で受け止めて対峙した。花火……か。とりあえず子供を棘付きの光玉に戻して、きつちりと塞いでおく。

荒瀬さんが何をするかはわからないが目を瞑ってイメージする。祭りの時に見る打ち上げ花火みたいなイメージ。十秒後に花火みたいに爆発する光玉のイメージ。

(危ない！)

剣の言葉を聞いて目を開けようとしたがまだ光玉のイメージは完成していない。あと少して完成する。あと、少っしっ！

「ライト！」

そう詠唱して目を開けるとサッカーボールくらいの玉が自分の手に収まっていた。花火をイメージしたせいか熱が発生してるみたいで手に置いてられないほど熱く、つい反射で手を引いて地面に落とってしまった。

しかも前を見るとジェスがこちらに迫っている。何とかしてあの光玉を荒瀬さんに渡さないといけない。でも荒瀬さんは暗殺者と対峙しているし、この光玉は熱いから荒瀬さんも多分持てないだろう。いや、持てる気がしないでもないけどさ。

「荒瀬さん！ パスです！」

荒瀬さんが暗殺者のナイフを弾いて後退させた直後に、俺は荒瀬さんの足元に向かって光玉を蹴り飛ばした。ボーリングの球を蹴った感じで思いつき蹴ったことを後悔した。というか足の指折れたかもこれ。

ゴロゴロ転がってくる光玉を目の端に入れた荒瀬さんは俺の様子を見たのか少し笑いを堪えながら、転がる勢いを利用して光玉を靴の上に乗つけた。そしてこっちに顔を向けて一言。

「ナイスボール！」

荒瀬さんはボールを一回浮かせた後に、見てて爽快なくらいに上空に光玉を蹴り上げた。メテオみたいな勢いの光玉はそのまま空へと向かい、何かとぶつかって止まった。

いや、止まっていない。メリメリとガラスが軋むような音が響いている。

そして空にヒビ割れが入ったと同時に、ガラガラと音を立てて見えない何かが崩れさる音が聞こえた。

そして爆発の十秒を過ぎた。

光玉は激しく発光して派手な爆発音を撒き散らしながら、色鮮やかな光を空に放った。うん。昼だからあまりよく見えないけどこれなら大丈夫だろ。

荒瀬さんは愉快そうに笑いながら対峙していた暗殺者の様子を伺いながら訪ねた。

「結界は破れてギルドも今の騒ぎには気づいただろ。早く退いた方がいいんじゃないか？」

「……退くぞジエス」

「えー。もう少しでシュウト君殺せたのになー？ ちえー」

拗ねた子供みたいにこちらを見るジエスの青い瞳は少し背筋を震わせた。一見愉快そうに目を丸めているが、奥にはゲレスのような狂気が垣間見えた。

そして暗殺者達はゲレスを担いで退いていった。ホッと一息する。何回死んだと思ったか。いや、実際三回は死んだんですけど。

疲れた。激しく疲れた。ドツと疲れが肩にのしかかってくる。

「……流石にあれは派手すぎやしませんかね修斗。どうシロエアに説明すりゃいいんだよ。花火大会してたとも言っただけか？ それに光魔法をあんな派手に使える奴なんて片手で数えるほどしかいないからな。どう誤魔化すつもりだよ……」

ジト目の荒瀬さんの視線を感じるが鈍感なフリをしてやり過ごす。いや、絶対誤魔化せてないだろうけど。

わざとらしくため息をついて首をくいつと動かして付いてこいと促す荒瀬さんに、背中を小さくしながら俺は子供が入ってる光玉を解除した。

「あ……れ……？」

疲れたのかいきなりふらっと目眩がして地面に倒れてしまった。視界もぐらついて定まらない。それにとんでもない眠気が襲ってくる。三日間徹夜でもしたような感じた。

「……はあ。力を使いすぎて起きれないなんてオチですか？」

「すいま……せん……」

「あー今日は散々だな。明日は仕事休もうかなーっと」

荒瀬さんの右肩に担いでもらって俺は裏路地を抜けた。とんでもなく疲れた。だけど薄れる視界で荒瀬さんの左肩に乗ってる子供の安らかな寝顔を見たら、苦労も心労も抜けた。この子供を俺は守れたんだと思うとこんな酷い目にあってもいい気がした。

（最初は見捨てたけど結局助けたね。シュウトは冷徹非道だと思っ
てたけど、やっぱりお人好しだね。馬鹿みたい）

そんな剣のつぶやきを子守唄にして俺は意識を落とした。

第十九章（後書き）

思ったより更新遅れてしまいました。すみません。そしてストーリーの進行速度の遅さにもびっくり。反省します。

外伝 もう一人の異世界人（前書き）

荒瀬さん視点です

外伝 もう一人の異世界人

肩の上ですやすやと寝ている修斗と子供を置いてどっかに高飛びしてしまおうか、何て考えを捨てて黙々と蒸し暑い路地裏を歩く。嫉妬って怖いネ！

しかもフードを被っているから更に蒸れて不快指数は増すばかり。修斗の服みたいに冷却魔法なんてかけられていないから今すぐにも脱いでしまいたい。女の子の蒸れたスパッツとかなら何時までも被れるような気がするんだけどこれも。

そうそう、雨は一年に数回しか降らないのに裏路地がなんでこんなに湿っているのか。それは水魔法を練習している魔術師が作りすぎた水を路地裏に捨てているからだ。砂漠に捨ててしまうと水を求めて魔物が近づいてきてしまうため、捨てる場所がここしかない。

しかしこの街は水を捨てるほど余裕はない。何故せつかく作った水を捨ててしまうのか。それは水の質が魔術師によって違うからだ。科学的に言うと純水と飲料水と言ったところか。いや、全然科学的じゃないか？フヒヒ。

ほとんどの魔術師が作ってしまう純水はミネラルが入ってないからあまり美味しくはない。だが飲めないほどでもないし身体に何か影響が出るわけでもない。しかし人間は贅沢が大好きなので美味しい水の方を飲む。しかも純水を飲むとお腹を壊すとかタチの悪い噂が広まっているために、純水を作って売ってもあまり売れないのだ。マジカワイソス。

今のところ人間が美味しく飲める飲料水を作成できるのは一人し

かこの街にはいない。サラ・ベントス。簡単に言つと俺の弟子だ。とは言つても一から十まで教えたわけじゃないから弟子にはならないかもしれないが。

今から五年前。魔法のことを適当にまとめといたメモをうつかり宿屋に忘れてしまい、見ちゃらめええと急いで宿屋に戻つてみたらそこにはメモをじーっと手に取つて見ている幼きサラ・ベントス。

自意識過剰に聞こえるがあえて言おう。俺はこの世界では神さえも殺せるくらいの力を持っている。あと三年前にこっちに飛ばされたと言つたがアレも嘘。本当は十年前。丁度この大陸が戦争してる頃。

まあそんな自分が適当とはいえど書いた魔法のメモだ。常人に曖昧でも記憶なんてされたらたまつたもんじゃないわけで。

殺すことにした。金髪の十歳にも満たない女の子を。どうせなら誘拐して奴隷商人にでも売り払つてしまおうと考えたが、こっちのミスなんだし彼女に地獄を見せてやる必要はない。

案外自分は罪悪感を感じていたのか安楽死の方法をとつた。彼女の首に触れて光の魔法陣を展開しようとした時に変化は起きた。

彼女の魔力には光属性を扱う素質があつた。現に自分の魔法陣は魔力を彼女から勝手に吸い取っている。お、こりゃ好都合じゃないか？

一般人だと五十年に一度のペースでしか光属性を扱える人は見つからない。殺すのは少し勿体ない。もしかしたら役に立つかもしれない金の卵がいるのだ。

どうするか。いきなり光魔法を教えても周りの期待と嫉妬の重圧に耐えられないだろうし、最初は水魔法でも教えることにした。この街は水不足だし丁度いい。

「あなただーれ？」

「君が持つてる紙の持ち主だよ。返して貰えるかな？」

「あ、ごめんなさい。かえすね！」

こっちに笑顔を振りまきながらメモを返してくる彼女。普通黒ずくめの人に笑顔なんて浮かばないと思うんだがなあ。ロリコンに目覚めそうだ。

「ああ、君の名前は？」

「サラ！」

「じゃあサラちゃん。魔法とか覚えてみたりする？」

こうして魔法を教えることになったんだが流石は異世界人。トラブルが起こりまくるのでじっくり教えるわけにもいかず、基本的なことしか教えられなかった。だけど彼女はこの街ほとんどの飲料水を作るまでに成長していた。この結果には流石にニヤニヤした。嬉しすぎる誤算だ。

しかし最近修斗が何かしでかしたみたいで今は少し不安定だ。色々と根回しはしていたが半分諦めていたし、潰れてくれても構わない。まあでも嫌いではないので今度世話してやるか。あれ、俺いつ

からツンデレになったんだろうな。

それと今担いでる子供の魔力には闇属性の魔法を扱う素質がある。これは事前に調べていたから修斗の味方にでもしておくかと色々細工をした。まあ子供を狙った刺客が来るとは思いもしなかったがあの時は焦った。すぐに助けにいこうとしても十人くらいに足止めされたし。修斗の頑張りに救われたわ。

でもこれで光のサラに闇の子供を味方に付けた。更に俺が仕入れた魔剣に防御面はほぼ隙がない灰色のローブ。ギルドリーダーのシロエアとも明日には信頼のパイプを築けるだろう。修斗があのお受付を許しさえすればだが。

嫉妬しないのかと言えば嘘になる。俺がココに飛ばされた時は全部一人で行った。だから修斗も一人でやれと言いたいところではあるが、今でさえ修斗は不安定だ。しかも俺は修斗みたいに一般人ではなかったし、そんな無茶を押し付けるほど俺も頭は固くない。

修斗をもし放っておいたら次々と起こるトラブルに心を蝕まれて狂気に支配され、神々から貰った力を使い一人で世界を灰塵に帰す”孤高の塵人”になってしまう。それを止めるのは俺でも少々厄介だ。全魔法使えて身体能力も高く、不死身。更に心は壊れているから言葉も通じない。

修斗を放っておいたら俺の目的は達成できない。まあ同じ異世界人じゃなかったらとくに体をバラして監禁してるんだけどね。同じ国の同じ境遇の人間は出来るだけ救いたいんだよ。修斗凄いい子だし。ただ今はチラホラと狂気に目覚めそうでごっちはヒヤヒヤしながら監視してるんですけど。

神の考えは未だにわからない。人を異世界に飛ばして何の利益があるのか。ただ飛ばされた奴が神に憎しみを覚えるだけだと思っただがなあ。

まあ人間の俺が神の考えを読むつてのが無理なんだろう。そんなことはもう腐るくらい考えた。今は修斗を導くことを考えますか。

そう思考を完結させて裏路地を抜けて騒がしい商店街へ足を運ぶ。シロエアにどう言い訳しようか。花火大会してましたって舌でも出して言ってみるか。だ、駄目だ。俺のキャラが崩れる。

（相変わらず心の中が騒がしい人だね。異世界人ってみんな思慮深いのかな？）

魔剣が喋りかけてきた。が、無視する。適当に話してるところの情報吐かされるからな。相手は数千年生きてきた精霊だ。人間じゃ太刀打ち出来ない。まあ自分も人間とは言い難いんだけども。

（君は大変だね。色々、ね）

（黙ってる）

（おお怖い怖い。まあ退屈しのぎになるから僕はいいんだけどね？）

魔剣はそう言って沈黙した。宿屋のサンへ向かう途中何度か喋りかけてきたが、今度こそ何も言わずに放置した。むうとか色々可愛い反応をしているが全部計算だろう。

宿を取ろうと受付に行くと、幼い頃と全然変わっていないサラ・ベントスを発見。肩に人間を担いでる怪しい格好の人間の対処はまだ慣れていないらしい。ツインテールを揺らしながら目を泳がせている。

彼女は俺のことは覚えていない。闇の魔法で記憶を吸引したからな。多分綺麗さっぱり忘れているはずだ。少し寂しい気がしないでもないが覚えられてたら色々と面倒だし。

「ほ、本日はどのようなご要件でしょうか!？」

「宿を取りたい。三人部屋。一週間分先払いしておく」

「わかりました! えっと、ひいふうみい……」

お。俺が教えた数え方だ。まだ覚えてんのかと関心しつつ金を数え終わるまでしばし待つ。

「丁度頂きました。ではお部屋にご案内しますね」

「貴方が案内するののか?」

「案内娘は今ちよつと外出してるんです。ですので私がご案内しますね」

そう言ってスタスタと歩いていくサラ・ベントス。受付どうするんだよと思つたら遠くにいた男性従業員がため息をつきながら受付へ歩いていった。おいおい。オーナーがこんなんで大丈夫なのか?

案内されたのは割と広い部屋だった。川の字で寝れそうなベッド

に柔道でも出来そうなスペース。こんなクソ暑い中柔道なんて俺はまっぴらですけど。女の子と柔道なら大歓迎です。

「案内ご苦労様」

「いえいえ。では失礼します」

そう言っただけ彼女はニッコリと笑って扉を閉めた。まだすやすやと寝てる子供と修斗にイラッときたのでベッドに放り投げてやる。あ、やべ。子供の二の腕に針刺さってるんだっけ。

「あー」

声の方に目をやると扉の隙間からサラ・ベントスがひょっこり顔を出していた。うわあ。小動物みたいで凄く可愛い。あつちは凄く怖がってるけど。

「何だ？ シャワー室の説明なら知ってるからいいぞ」

「何処かで……お会いしたことはありませんか？」

「……無いよ。ついさっき会ったばかりだ」

「そうですか……。失礼しましたっ！」

そう言い残して彼女は逃げるように立ち去っていった。クソッ。

滅茶苦茶可愛いじゃないかこの野郎！実は俺が魔法教えたんだよーって言いそうになっただわ！

やはり光の素質があるから闇魔法の効力が軽減されたんだろうか。それとも自分が彼女の記憶に残りたくて無意識に……って流石にそれは無いか。そこまで飢えてないだろ俺。

ああ。これから修斗に手紙書いてシロエアに事情説明しにいかなきや。裏方は忙しいっいたらありやしない。そろそろトラブルが起きそうだ。

第二十章

目を覚まして辺りを見回すと馴染みのある我が家みたいな風景だった。父親と母親はどうしているだろうか、なんて飽きるほど考えたことを考える俺は物わがりの悪い人なのかもしれない。

起きようとするとう腕に違和感。見るとあの子供が腕を抱き枕みたいにして寝ていた。しかも涎をたつぷりと垂らしながら。安心しているようで嬉しい。嬉しいんだが……。

そんな子供を起こさないように剥がして、机に置いておつたタオルで腕を拭きながらその隣にある置き手紙に目を通す。多分荒瀬さんが書いた物だろう。前もあつたよなこんなの。直接説明してくれてもいいと思うんだけどなあ。

手紙の内容を要約するとこんな感じだった。明日受付娘のこと忘れるな。サラが夕食誘つてたから後で誘つてやれ。こつちも出来る限りはサポートするが出来ない時もあるから体と魔法を鍛えろ、体術は合間を縫つて教えてやる。子供の面倒を見なかつたら生きてることを後悔させるぞ。爆発しろ。

最後辺りが意味わからない。子供の面倒を見るのはまだいいとして、爆発なんて出来るのか？ 火の魔法で自爆技でもあるのかな？ 確かに俺は不死身だし有効かもしれないけど。相手に心臓刺されて油断している時に爆発とか、なんて凶悪な不意打ちなんだ。

それと子供の着替えも置いてあつた。些か地味な色合いではあるが別に文句はない。荒瀬さん準備がいいな。自分も心臓部分に穴の空いている灰色のローブを脱いで白いＴシャツに着替えておく。

うーん。どうするか。子供を起こして食事して寝たいってのが本音だけど、サラが夕食誘ってくれてたんだよな。最近一緒に夕食なんてしてなかったしな。いや、全面的に俺が悪いんだけど。

気持ちよさそうに寝てるどころ悪いと思いつつ子供の肩を揺らす。すると子供は可愛く欠伸をしながら起きて周りをキョロキョロした後、俺の方をじっと見た。

「えっと、おはよう」

「……ここどこ？」

「宿屋。ああ。あの怖い人達なら大丈夫だよ。あの人が追っ払ってくれたからね」

子供は落ち着かなそうにソワソワしている。まあ起きて知らない宿屋だったらこうなるのも当たり前か。俺は起きたら知らない世界にいたんだけれども。

「君の名前はなんて言うの？ 僕の名前は修斗。まだ駆け出しの旅人ってとこかな？」

「インカってよばれてた」

「それじゃインカ君。まずはご飯食べに行こうか。僕もお腹すいたしね」

インカは何か引け目を感じているのか随分と遠慮がちで受身なので半ば無理矢理連れていくことにした。後を付いてくるし大丈夫だ

よね？

食堂についてインカに何を食べたいか聞いても答えないので適当に注文することに。肉に野菜にパン。好き嫌いがあっても多分大丈夫だろう。

しかし料理が運ばれてきてもインカは食べる素振りを見せない。こういう時はどうするんだ？ 年下の子供なんて面倒みたことないからどうすればいいのかわからない。

「ちょっとトイレ行ってくるね。先に食べてて構わないから」

そう言って席を外す。取り敢えずサラを呼んでくることにした。サラは明るいいし女の子だし。うる覚えだけどカウンセリングなんかは女性の方が安心するらしいしね。

受付に向かうとサラは何処か拗ねているような表情だった。暇そうにペンで机を叩きながら欠伸をしている。いやいや、アイツオーナーだよな！？ 本当に大丈夫かあんなんで！？

「少しは真面目にやれよ」

「あ……シユウトか」

サラはボーッとしているような感じでこつちを見ていた。羊を十匹数えたらそのまま眠ってしまいそうだ。

「眠そうだな。今日は止めとくか？」

「昨日徹夜だからね……って何を止めるのさ？」

「いや、今日夕食一緒に食べようと思ったんだけど」

そう言うとサラは石像みたいに固まった。いや、何してるのサラ？ こっちはお腹ペコペコだから無理なら無理と言って欲しいわけですが。

「やっぱり徹夜じゃきつ」

「行く！」

声が大きくてびっくりした。さっきまでの眠そうな顔は何処にいったのか、何か急に太陽みたいな笑顔になった。どんだけ食いしん坊なんだコイツは。食べ物でこんなに食いつく女の子も珍しいぞ。

サラは受付を飛び出して遊園地に入った子供みたいにはしゃぎながら食堂へ走っていった。受付どうするのと思っていたら、遠くの若い男性従業員が頭を頂垂れさせながらこちらに向かってきているのが見える。

……あの男性に謝っておくか。俺が誘ったからサラは飛んでいつてしまったんだし。

「……ごめんなさい。自分のせいでこんなことになってしまって」「え？ あ、ああ。別に構わないよ。いや、本当にいいですから」

少しシャイな人らしい。顔を俯かせて手を振りながら急ぎ目に受付へ潜り込んでしまった。俺も人見知りはする方だがここまでの人は少し珍しい気がする。

まあ話しかけてほしくなさそうなので軽く頭を下げた後に食堂へ向かう。遠くから見てもわかるくらいにブンブンと手を振っているサラに苦笑いしながらもそこに向かう。

「あー、サラ。席は取ってあるから移動するぞ」
「うん。ほら、早く早く！」

ぐいぐいと前に押してくるサラ。いや、前じゃないから。右斜め横の席だから、と言う前にお茶を運んでいるウエイトレスにぶつかってお茶を被る羽目になった。

結果から言うとサラを連れてきたのは正解だった。命を助けた俺よりインカは三十分前に来たサラの方がお気に召したようで、凄く楽しそうに喋っていた。いや、子供に好かれたいから助けたのかと言われたらそうじゃないんだけどさ。

そんな下らない嫉妬に蝕まれてるのに気づかれるのは嫌だったの

で、お代を置いて服を着替えてくると言っただけで外に飛び出してしまった。自分で自分が情けないなんて何回も感じた自己嫌悪にため息を吐きながら、東京と比べると少し薄暗い商店街を歩く。

「はあ……」

もう一度ため息。この世界に来てからため息が多くなったのは気のせいでは無いだろう。友人に助けられたあの時から自分が変わったと思っていたが、そんなことはなかったみたいだ。次々と沸き上がる嫉妬、自己嫌悪、憎しみ。

自分の目的は十年後に起こる戦争を止めて元の世界に帰ること。別に帰れば俺はどうでもいい。知らぬところで子供が野垂れ死にしようが、自分がよければどうでもいいんだ。

「……はあ」

また、ため息。ブーツとしてたら買い物途中のおばさんと肩がぶつかってしまった。別に転んだわけでもなかったしそのまま歩こうとしたらいちやもんをつけられた。

「あんた！ 一体何処を見て歩いてるのさ！」

俺が悪いんだろうか？ 神様がトラブルを起こしてるんだから神

様が悪いんだろう。別に俺はぶつかりたくてぶつかったわけじゃない。

「ほら！ 何か言ってみたらどうなんだい！」

「……すみませんでした」

「はっ！ 最初から謝ればいいんだよ謝れば！」

そう言っつて不機嫌そうに背を向けるおばさん。今なら剣で頭を一突きすればおばさんの頭は真つ二つになるだろうか？ 手足を切り飛ばして魔法で焼け焦がすことが出来るだろうか？ 自然と右手が剣にかかる。魔法の詠唱が自然と頭に浮かび上がる。

待て、と言う自分がいる。前より頭は利口になってたみたいだ。深呼吸して頭を落ち着ける。大丈夫。大丈夫だ。そんな簡単に人殺しになってたまるか。

「ふう……」

「我慢出来たみたいだな、修斗君？ にしては賢者タイムみたいなセリフしてますけど」

聞き覚えのある声に振り返ると黒ずくめの怪しい人が口元を歪めさせながら立っていた。賢者タイムってどういう意味だ？

「これくらい、我慢出来ずにどうするんですか」

「そうか。今からお話でもしようと思っただが必要ないみたいだな。

安心したよ」

「あー、はい。でも結構相談したいことはあるんですけど」

「甘えんな。あの嫌味ったらしいババアを殺さずに済んだんだから、大丈夫だろう。後は自分でなんとかしろよ。俺もそろそろ忙しくなるしな」

そうなのか。まあそうだよな。荒瀬さんも異世界人だから元の世界に帰る条件を達成しただろうし、そんなに暇人でもないだろう。今まで助けてくれただけでもありがたいし。

「というか派手に動きすぎると俺もヤバいしな。もし困ったらシロエアに頼ってくれ。あいつなら多分何とかしてくれるだろう。あ、これ手土産な。それじゃ頑張れよ」

荒瀬さんはそう言って黒い異次元袋を俺に手渡すと、人混みに紛れて消えてしまった。相変わらず消えるように去っていくなあ。本当に何なんだろうあの人。

そろそろ宿屋に戻らないとな。服を着替えるだけにしては遅いとサラが騒いでそうだ。インカの面倒もどうするかな。シロエアさんに頼み込めば面倒みてくれるかな？

インカをこれからどうするか考えながら宿屋に帰って食堂へ向かうと、サラとインカはいなかった。あれ？ 何処行ったんだ？ 伝票が無くなってるから会計は済んでるみたいだけど。

トラブルに巻き込まれたのか？ その言葉が頭に浮かび上が

って自然と手が汗ばむ。まずは自分の部屋に帰って準備をしてから聞き込みしなきゃいけない。

駆け足で自分の部屋に戻って勢い良くドアを開ける。荒瀬さんから貰った異次元袋を置いて灰色のローブに着替えようとした時、ふとベッドを見てみると。

「……はあ」

サラとインカが姉妹みたいに抱き合ってベッドで寝ていた。焦っていた自分が馬鹿みたいだ。本日何度目かわからないため息が自然と漏れ出す。ベッドのシーツを引きはがしてやりたいが気持ちよさそうに寝てるので止めておく。

川の字で寝るなんて考えは浮かばなかったので固い床で寝ることになった。うわ、頭が痛い。枕欲しい。

第二十一章

今日の朝は最悪だった。早めに起きてギルドに行く午後六時まで何をしようかゴロゴロ転がりながら計画していたら、いきなり前の扉から拳が突き出てきて嵌め込みタイプの鍵を外して引っ込んでいった。

突然の出来事に驚きながらも扉から離れて様子を確認。しかし扉を開けて出てきたのはいつしか見た顔だった。女性にしては背が高く眼光の鋭い従業員と、食堂のウエイトレスが数名。何故扉を破ってまで来たのか。それは拍子抜けするような理由だった。

宿屋内では深夜にサラが行方不明になったと騒がれていたらしい。それでこの人は一目散に俺の部屋を蹴破ろうとしたが、深夜にあまり騒がしくは出来ないので朝早くにこっちへ来た。いや、俺の評判落ちすぎやしてませんか？

まあ自分は床で寝てたから無罪放免だったからいいけどさ。扉の修理費は俺が払うことになった。今回は自主的にだ。一応自分の責任でもあるんだし。まあ張り手の人に払えと言われてイラッとしたんだけど、流石に剣に手をかけるなんてことはなかった。

朝からそんな騒がしいことがあって落ち着かないまま食堂の席に座る。同席しているサラはしょんぼりしていてインカも何故か縮こまっている。キッチンから聞こえる食欲をそそる豪快な音とは裏腹に、こっちは鬱蒼とした空気が漂っていた。いや、凄い扱いらしいんだが。

「別に俺は気にしてないから元気出してくれ。朝からそんな空気醸かし出されても俺が困るわ」

「でもシユウトみんなから変態って呼ばれてるよ？ いいの？」

「よ、よくないけれども……。まあ水に流せよ、サラだけにサラっ
と」

「……………」

ふ、二人揃ってクスリとも笑わなかったぞ。凄い気まずいんだが。というか最近空気が凍ることが多くなった気がするぞ。何でだ。

「よ、よーし。今日はいっぱい頼んじゃうぞー」

いつもの三倍料理を頼んで全部食べきった。やけ食いじゃない。断じてやけ食いじゃない。サラとインカの嫌な視線なんか感じていないし、料理を運んでくるウエイトレスの視線も普通だった。まあ、朝食は最悪だった。

その後インカと今後のお話をしようと思っただら逃げられた。そしてインカは磁石みたいにべったりとサラにくっついていて。勝手にしやがれってんだバーカ！

って言うって外に放り出すわけにもいかないの、インカをどうするかも考えなければいけない。シロさんに少し知恵を借りようかな。自分もここにいつまでも留まっているわけにはいかないんだし。

インカに今何を言っても聞かなさそうなので、無理矢理サラから引き剥がして自分の部屋に肩で担いで持っていく。あのままにして

たらサラが仕事できないだろうし。

インカはさつきからブツブツ言いながら二の腕辺りを地味に抓ってくる。いつからそんなにアグレッシブになったんだよ。昨日サラが何か吹き込んだのか？

そんなインカをお姫様抱っこして柔らかくて広いベッドに投げ捨てた後に、異次元袋からちゃぶ台くらいの机を出して筆箱とノートを出し、神から貰った資料本を横に少し今後について考えながら本の内容をまとめることにした。

ここを出るのは……そうだな。ギルドランクがBランクになったらこの街を出るか。他の場所ではランクがリセットされるのが少し面倒だが、まずはこの世界の情勢を知らなきゃいけない。そのためにはBランク辺りの実力があれば問題は無いはずだ。世界の情勢は本にも一応書いてあるが大雑把にしか書いてないから判断しづらいし、ここ最近のことは載ってないしな。

こういう時にインターネットがあれば便利だったろうなとしみじみと思う。検索すればパツと出てくるしなあ。まあ本当は亜人の文化なんてわかるはずもないんだからこの本には感謝してるけれど。

それと魔物がいるから魔王もいるのだとばかり思ってたがどうやら違うらしい。魔物は亜人と人間が戦争していく度に生まれる血肉や魔力、魂などが入り交じって偶然生まれた生物と記されている。ただ人間は魔物は亜人が作った生物と子供に伝え、亜人も魔物は人間が作った生物と子供に伝えているらしい。意見の食い違いって怖いね。

魔物による被害はかなり多いらしいが、もし魔物が生まれなかつ

たらこの世界の文明レベルはとんでもなく低かったかもしれない。前の世界で言えばエジソン辺りかな？ いや、もつと技術的に言えばもつと低いだろうな。

魔物は大体特殊な習性や能力を持っている。今は火を起こしたりするのにも竜系統に属する魔物の発火器官を使っているし、最近開発されたらしい豆電球を動かす電気も魔物の発電器官を使用している。魔物による被害もあるが魔物による恩賜もそれと比較してあまりある価値があるようだ。

読み取った本の内容を適当に自分の中でまとめてノートに書き記していく。一年早い大学受験勉強といったところか。落ちたら世界が阿鼻叫喚ですけどな！

それとこの世界のペンはやたらペン先が太くて書きづらいからシヤーペンやボールペンは貴重だ。そろそろボールペンが一つ潰れそうで焦っている。ノートもあと五冊。この世界にも紙はあるが安価なものではごぼこして書いて書きにくいし、最高級の紙でも少し書きづらい。

まあ無い物ねだりしても変わらないのでひたすら本の内容をまとめてノートに書く。こんな所で友人の手伝いでやってたことが役に立つとは思わなかった。

ひたすらに書き進めて亜人の種類のページに来たところで息を吐きながら腕を上へ伸ばす。二時間はやったか。前の世界では考えられない集中力だな。これも能力のおかげかな？なんて思いながら異

次元袋にちゃぶ台を放り込むと、ちゃぶ台はみるみる内に小さくなって異次元袋に吸い込まれていく。理屈はわからんが何かの魔法を使っているんだろう。

少し休憩に何処か散歩でもしてこようかな？ インカは布団にくるまって退屈そうにしてるし。こんな暑い中そんなことして何が楽しいのか俺には理解出来ないけれども。

「ちよつと外に出かけるけど一緒に行く？」

「サラ、いないならやだ」

「ならここで留守番しててね。夜になったらサラに会えるからそれまで我慢して」

そう言い残して軽い黄土色の異次元袋を肩にしょって、受付のサラに鍵を預けて外に出た。相変わらずの日差しの強さに目を細めながらも昼から騒がしい商店街へ足を運ぶ。

そういえば砂漠から見た最初の街の景色に紛れていたあの馬鹿デカイ塔。あれはこの街の名所と想っていたがむしろ逆らしい。というか街の中じゃなくて街から少し離れた場所に塔はただずんでいたわけだが、まあその塔はこの街にとって驚異になっているそうだ。

俺の倒したヘルスコープイオンの親玉に当たる魔物、キングスコープイオンとクイーンスコープイオンが三年前にこちらに一带しているサソリを率いてあの塔を築き上げ、ずっと住み着いているらしい。ここからでもよく見える塔をあのサソリが築くなんて凄いやと思うが。

そして一年に一回あるクイーンの産卵期になるとキングは食料の

蓄えに動き出す。しかしここ一帯は砂漠地帯なので食料となる生物はあまりいないから、人間が絶好の獲物というわけだ。だから産卵期には街を出る商人や冒険者が多数行方不明になることも度々あるらしい。

ギルドが冒険者を止めない理由は単純だ。ギルドはただ仕事を紹介するだけの組織なので、その仕事を受注した後のトラブルは冒険者の自己責任。だからギルドは冒険者を止めない。それが表立った理由だが、どうせキングに捕らわれる人が少なくなったら街が襲撃されるかも、なんて考えてるんだらう。

冒険者の新人は産卵期のことを知らないとまず死ぬ。依頼を受けて砂漠に出てみれば俺が見たような赤い景色が待っている。装備も整っていない新人なんかはサソリの大群なんて対処できるはずも無く、クイーンの餌になってしまいうわけだ。

でもここ最近では情報が出回ってきたのか犠牲は減ってきているが、もし本当にサソリが街を襲ってきたらどうなるやら。それまでにはこの街を出たいもんだ。

そんなことを思いながら商店街に立ち並ぶ食料品を立ち見していると、軽い人だかりを見つけたので少し覗いてみた。汗臭い衣服の合間を縫って覗いてみると、小振りのカラフルな魚が氷で出来た水槽の中で泳いでいた。氷の中で泳いでるカラフルな魚達は幻想的で周りのギャラリーも目を奪われてるみたいだ。

商店街には暇な時によく来ているが、生きている魚が売られているのは少し珍しかった。買おうかなと迷いながら財布を見ると二万円。魚の値段は一万円。明日依頼をこなすにしても少し厳しいか？

く、くそう買いたい。魚は食堂でも一回しか食べたことがないからな。刺身にして食べたい。あのプリプリした食感をもう一度体験したい！でもお金がない。いやいやでも……。

(買ったやいなよ)

(いやでもな……)

(最近はマシになったけどシュウトは毎日精神すり減らしてるんだし、少し贅沢したっていいじゃない)

そんな甘い言葉に俺は簡単に屈してしまった。一万円を握り締めながら魚屋のおじさんの元へふらふらと向かっていく。

「おじさん。一匹頂戴」

「はいよ。袋に水入れるからそれに入れて持っていきな。だがお前さんにこの袋は持てるかな？」

手渡された袋はサンタさんが担いでる夢が詰まった袋くらい大きかった。取手がない白い袋は持ちにくかったので異次元袋に入れようと思ったが、おじさんの試すようなニヤケ顔にムカついたので堂々と持ってやった。

周りから少し関心したような声が響いて若干調子に乗っていたら前から子供が突っ込んできて袋はあえなく破裂。魚は地面をピチピチと跳ねていて、俺は全身びしょ濡れ。何故だ。そして子供の後を追うように現れた母親らしき人物。

嫌な予感しかしない。いちゃもんつけられるんだろうなあ。こんな時にすみませんという発音を頭の中で即座に準備出来るようになった俺は、将来立派な商業マンになれるに違いない。そう信じたい。

「すみません！」

「……？ いえ、大丈夫です。そちらの子供に怪我はないですか？」

先にすみませんと言ったのは母親の方だった。思わずずっとこけそうになった。しかも肝心の子供は跳ねている魚をおっかなびっくりつついていた。こ、この子供め。どんだけ魚が好きなんだよ。

「本当にすみません。代金はお支払いしますので……」

「べ、別に子供がしたことですし、代金は結構です。別に死んだってわけでもないですし。はい」

そう挙動不審に答えながらもおじさんから急いで水の入った袋を貰って魚を放り入れる。うん。少し衰弱してるけど生きてるみたいだな。まあ死んでても食べるから問題ないんだけどね。

「おい兄ちゃん。一匹サービスしてやるよ」

「いえ、別にそういうつもりじゃなかったの……」

「その子供の父親があげたいと言っているんだ。素直に受け取ってくれ。それとさっきは何だ、すまなかった」

そう言われて頭を下げられながら魚を差し出されたので受け取らないわけにもいかなかった。何だ。今日は何か運がいいぞ。ラッキ―デーか何かを設定されているのか？いつもだったら母親に「家の子供に何するの！」と怒鳴られるはずなんだが。

そんな出来事を不気味に思いながらも魚が二匹入った袋を異次元袋にしまってぶらぶらする。通行人と肩がぶつかってしまい、すぐに謝ったらすんなり許してくれた。他にもたまたま見つけたスリの犯人を捕まえて持ち主に返してあげたらすんなりお礼を言われた。

何かおかしい。いや……これが普通なのか？とにかく今日はトラブルはいつも通りの頻度だがすんなり解決するような気がする。気のせいなのか？俺が対処に慣れてきただけなのか？

そんな普通の出来事に警戒しながらもドアの修理を依頼して宿屋に戻った。時刻は夕方四時過ぎ。そろそろ準備をした方がよさそう
だ。

第二十一章（後書き）

台風凄いですね。

更新遅れてごめんなさい。それと最初の方色々指摘したんで直してみました。

第二十二章

宿屋に着いた。すぐに食堂に行つて魚を料理人に渡し、夕食に出して欲しいと頼み込む。料理長からすんなり了承を得たのは意外だったが、どうやら魚を調理することがあまりないらしいのでこちらからお願ひしたいぐらいなんだそうだ。夕食が楽しみすぎる。

心の中をお花畑にしながら自分の部屋に入ると、インカが何やら黒い袋をいじくっていた。あれは確か……荒瀬さんに貰った異次元袋か。そついや中身確認してなかったな。

「ここから美味しい匂いするっ！」

「ん？ そつなのか？ ちょっと貸して」

案の定インカは離さなかつたので折れてしまいそうな足を持つて盛大にジャイアントスイング開始。自分が気持ち悪くなつてきて動きを止めた頃には、インカは力なさげに床へ倒れ伏せていた。馬鹿な奴め。

遠慮も手加減もしない自分は大人げないかもしれないが、インカには地味にイラついていたので手加減なんか微塵もするつもりはない。根暗と思わせてサラにべつたりして俺には我儘とか、軽くイラツときている。

何やら文句を垂れているインカをベッドに放り投げた後に袋の中を覗き込んでみると、見やすいように大きさが統一されている色々な物が目に映つた。食べ物らしき物に武器らしきものも見える。し

かしそれを差し置いて目立つものが一つ。取つてと言わんばかりに赤くチカチカと点滅している手紙らしき物。まずはそれを取り出してみた。

手紙の封を開けると赤色に光る玉が部屋中を縦横無尽に駆け巡り、その光は段々鳥に変化して空いていた窓から飛び出していった。インカが目を丸くしていたが気にせず手紙の内容を黙読する。何とどうか気にしたら負けな気がする。

少し失礼かもしれないが荒瀬さんの手紙は前置きが結構長いので、前半部分は流し読みして後半部分だけ真面目に読んだ方が楽だ。少しわからない単語もよく見かけるしな。メンヘラだのDQNだの、わけわからん。友人がそういったことを日常会話で振ってくるので覚えた単語もチラホラあるが。

要約するとこの異次元袋には便利なアイテムがいっぱい入っているけど、ある一定の条件を満たさないと取り出せない。理由は遊び心。袋の中の物に触れるとそのアイテムの詳細と開放条件が頭に浮かぶ。

何かのゲームっぽくて中々面白そうなので試しにピンク色の香水らしき物に触れてみると、視界がゲームウインドウみたいなものに切り替わった。

「惚れ薬」

これを対象の人物に飲ませると一番最初に体が接触した相手に惚れやすくなる。効果は一ヶ月。これで気になるあの子のハートをガツチャしよう！ ただし二度飲ませると高熱で相手は死ぬ。

開放条件：第一条件、異性との交流を深める。

うーん。思春期の男の子が夢みてそんなアイテムだな。それに開放条件も大雑把でわかりにくい。他のもこんなんばつかな。荒瀬さんだし。

その後も黒い異次元袋を適当に見ていたらいい暇潰しになった。とんでもなく名前が長い銃やふざけた名前の物が多かったが、いざれ使う時が来るのだろうか。開放条件が意味不明だったり無理難題なものが多かった。今は無理そうだが、今後は少し楽しみだ。お腹も空いてきたしサラとインカを呼んで食堂にいけますか。

朝早く起きたからか自然と出た欠伸を噛み殺しながらインカを連れて食堂に向かう。インカがおんぶしなきゃいけないなんて言い出したから、足を肩にしょって逆さまにおんぶしてあげた。最初の遠慮するインカはどこにいつてしまったんだろうか。あとでサラに聞いてみるか。

サラに飛びつくインカを横目に食堂で魚の塩焼き？と刺身を食べた。どうやらここの住人は魚が苦手な人が多いらしく、サラとインカもそれに含まれていたため俺の独り占めとなった。美味かったけどやっぱり醤油が欲しい。味噌汁も飲みたいなあ。醤油つて豆を発酵とかさせるんだっけ？

そんな空想を頭から追い出して仕事が終わったサラにインカを預け、荷物をまとめて夕日に彩られている街に出た。目指すはギルド。あの受付娘はどうしてるのやら。やっぱり無意識に神に操られていて自分の無実を証明しようとするのか、それとも……。

(別に何を言われようが今は手がすぐ出てしまつほど怒ってはいないし、大丈夫だろ)

(ならいいけどね。まずは僕の言葉に耳を傾けてよ。また暴力に身を任せる馬鹿だったら僕はもう知らないからね。もし危ないと思ったら僕に話しかけるんだよ。約束だからね)

剣から手厳しい言葉を頂いた。くそ。これが黒歴史というやつなのか？ まあそんなことはいい。もうギルドは目の前だ。緊張してきたぞ。

一回扉の前で深呼吸をしてから、ゆっくりと扉を開いた。様々な服装と武器を持っている冒険者達の間をすり抜けて奥に進むと、四人席のテーブルにシロさんに兎耳受付に、釣り目の彼女が座っていた。

緊張しているのか拳動がおかしい兎耳を見て、若干緊張が溶けるのを感じながらも三人が座っている反対側へ腰を下ろす。時刻は五時四十五分くらい。

「時間にはまだなってますがシュウトさんも来ましたし、始めましょうか」

「ええ。そうしましょうか。じゃあ結界お願い出来ますか？」

兎耳さんがコクリと頷いて目を閉じるとすぐに周りに結界が張られた。さあ、ここからだ。目の前の釣り目は神に操られていたのか見極めなければ。もし操られていなかったら……問答無用で地獄に

叩き落としてやる。

「まずは貴方の名前を教えてくださいませんか？」

そう言つと釣り目の少女はビクッと肩を震わせて、おずおずと上目遣いでこちらを窺っている。ここで名前教えないなんて言われたら操られてるの確定だったんだが、少し残念だ。シロさんの気迫すら見えそうな視線から今すぐにも逃れたいからか、膝に置いている拳に嫌な汗が滲む。

しかしアドレナリンやら出ているのか怖いとは思わなかった。あつちがやる気ならとことんやっけてやるつもりはある。

「ら、ラミと言います」

「……ではラミさん。貴方はどうして自分にあんな嫌がらせを？ 動機を教えてくださいますか？」

あわあわしている姿は素にも見えるし演技にも見える。自分にあれだけの態度を取っていた人間が知らん顔で困惑している姿は見て思わず舌打ちが出そうになった。すぐにその猫被りをひっぺかしてやるから覚悟してろ。

「自分でもよくわからないんです。あの時は無性に……その、苛立つていた？」

「では貴方は苛立つていたら、初対面の人にあのような態度を取る

のですか？」

「そんなことはありません。彼女は少し抜けている所はありますが、今まで一度もこのような問題を起こしていませんから」

会話に割って入ってくるシロさんに苛立ちながらも話を進めることにした。現段階じゃ演技の可能性も否めないしな。何も聞かずに許すことが出来ない自分は心が狭いんだろう。ただ意地悪をされただけでこんなに怒ってるのは小学生以来だ。餓鬼すぎるな俺は。

「動機は苛立っていたから、本当にそれだけですか？」

「自分でもわかりません……」

「では自分にミニゴレムを勧めた時は何を考えていました？へルスコーピオンの尻尾じゃ討伐の証にならないと言った時は、何を考えていた！？ 言ってみるよ！」

「ひっ！ わからないんです……ボーツとしてたというか、うう……。ごめんなさい」

彼女は頭を抑えながら泣き出してしまった。苛立つ心を抑えながらも話を進めようとしても彼女はそのまま伏せてしまって動かない。自然と彼女に向かって伸びていった手にハッと気づいて素早く引っ込める。髪の毛を引っ張りあげるなんてしたら俺が悪者になってしまう。

(その調子だよシュウト。苛立ったら僕にそれを吐き出して解消しなよ。僕そついうので興奮するし)

そんな剣の気遣いなのかツッコミ待ちなのかわからない言葉をスルーして彼女に向き直る。シロさんに慰められながらも彼女は話そうとする意識は見られる。よし、さっきより俺は落ち着いてる。これなら切り札となる言葉を言っても感情的にはならない……はず。

自分が許さないと言ったら彼女はどうするのか。ここが見極めるための分かれ目だろう。伏せている彼女が起きるのを待つのも考えだが、正直どうでもよかった。

「動機が苛立ったからなんて聞いたら許す気にもなりませんね。この後貴方はどうなるんでしょうね？」

「そんな……」

シロさんがこちらに淀んでいるような瞳を向けてくるが、視線は合わせない。もし操られていなかったら……彼女は何かをする？猫被りを辞めて暴言を吐いてくるのか、そのまま演技を続けるか。どちらかだろう。

彼女の方を見ると……何て言えばいいんだろうか。魂を抜かれたような、人形のような目をしていた。演技……なのか？

「貴方はまたあの場所に逆戻りです。残念だったな。」

「……最低っ！」

暴力的な言葉が次々と浮かんでくるが我慢我慢。兔耳が今にも自

分を殺しそうな勢いで睨んできて、暴言も吐かれたが別に怖くも何ともない。シロさんも自分の物言いに苛立ちを隠せていないようだが、殴りかかつてはこないだろう。

彼女は何も言わずに俯いているだけだった。まだ演技を続けているのか？ 五分くらい何もアクションを起こさないので何か言おうと口を開こうとした時だった。

彼女がいきなり口を抑えたと思ったら、机の上に嘔吐し始めた。ベビーフードみたいな嘔吐物が手の隙間から漏れ出して机を支配していき、酸っぱい臭いが目の前に広がる。

演技で嘔吐するなんて出来る……はずがないよな。そこまでの演技派なら一本取られても清々しいだろう。彼女が神に操られていたという推測は多分あってるだろう。同時に彼女の深いトラウマをほじくり返したことに罪悪感を覚えたが、心の中では何処か笑ってた。ざまあみるなんて思ってたりする。心狭すぎるな俺。

取り敢えず嘔吐物を水で洗い流して闇で吸引する。そしてもう一回机に水を流した後に、若干火を混ぜたドライヤーくらいの風で机を乾かす。

そして涙やら鼻水やら嘔吐物やらで汚れている顔は見ていたくはなかったなので、頭一つ分くらいの水球を机の上に並べた後に、眉間にシワを寄せているシロさんに向き直る。

「自分は彼女を許します。証拠があるなら契約書でも持って来て下さい」

「……貴方はおかしい。では何故彼女を突き落とすようなことを？」

貴方こそ行動に動機がない」

「じゃあシロ… エアさんは見ず知らずの人に暴言を吐かれたらどうします？ 動機が苛立ったから。そんな人を心の底から許せるんですか？ 自分は許せなかった。それだけですよ」

そう言っただけで席を立ち上がり、結界から出てギルドを後にする。俺がギルドで喚き散らさない限りは彼女は大丈夫だろう。何というか微妙な感じになってしまった。俺絶対嫌われたなこれ。最後に余計なこと言わなきゃよかったなあ。

夕日が沈みかけている空を見上げながら一つため息。ギルドの仕事で危ない依頼とか回されないだろうか。産卵期のことには知ってるからまだいいけれど、もし酷かったら早めに街を出ることを考えるべきか。

取り敢えず今日の夕食を思い浮かべて嫌な気持ちやシャットアウト。明日は何をするかな。

第二十三章（前書き）

インカ^ニ子供

名前を付けていたこと忘れてましたね。すみません

第二十三章

翌日、寝相が悪いのか床に落ちているインカをベッドに戻して、少し違和感のある扉を開けて部屋を出る。まだ朝の四時なので食堂も閉まっているし、受付の青年も眠そうに欠伸をしながらこつちを物珍しそうに見ている。

朝っぱらから元気な太陽に目を細めながらも宿屋を出て砂漠地帯へと足を進める。何でこんな朝早くから起きて砂漠に向かっているかはもちろん理由があるわけで。

俺は今更ながら危機感を感じていた。そりゃもう盛大に。

今日からギルドで魔物の討伐依頼を受けようと思っていたが、昨日の夜暗殺者の襲撃についてノートにまとめていたら考えが変わった。

あの時は荒瀬さんが来ていなかったら間違はなくこの世とさよならしていただろう。あれはイレギュラーすぎたかもしれないが、魔物の討伐に行ったら強い魔物が乱入なんてことも有りうるかもしれない。実際にヘルスコープイオンの大群に囲まれたわけだし。

正直な話魔法あるし身体能力もあがってるし、強い剣もコートもあるから勢いでBまではいけるんじゃないかって考えてた。自分無謀すぎるだろ、というかコートは左胸に穴開いたままだし。

だからまずは初級魔法を無詠唱で確実に出せるようにする。それと自分には魔力がどのくらいあるのか。それに剣術も少し学ばなければいけない。あの時は結局剣を抜いてすらいなかったし。

屈強な体つきをした門番に挨拶して砂漠地帯に足を踏み入れる。街から少し離れた所で荷物を下ろして軽く準備運動。まだ朝早いの体操しただけでじっとりと汗が出る気温の中、まずは何をやるのか考える。

まずは魔力の確認。初級魔法をどれくらい打てば魔力は切れるのか。死んだらどのくらい魔力が減るのかも試すべきだと思ったが、足が竦んで出来なかった。まあ死ななければいいことだ。

結果的に太陽が落ちるまで初級魔法を出しっぱなしにしても魔力は切れなかった。魔力が少なくなると倦怠感、碎いて言うところになるらしいが、そんなことはなかった。それと一日中魔法を打ちっぱなしだったから成功率も上がってきた。イメージが固まってきたんだろう。

それに初級魔法は威力が弱い反面、応用がかなり効くから使いやすい。まだ変幻自在とはいかないものの壁や球状に変化させるのは慣れてきた。ここからは遠いが魔法学園なんて所もあるらしいから行ってみたいもんだ。

一方剣の方は全く手応えを感じない。剣道なんて元の世界ではやったこともないので剣術なんてわかるはずもなく、適当に素振りするだけだった。

こんなんで大丈夫なのか?と思いつながらもひたすら砂漠で素振りしながら、たまに湧き出るスコープオン系の魔物と俺と同じくらいの体長のトカゲを倒したくらいだった。

一回調子に乗って街から離れてみたら遠くにめっちゃくちゃ大きい

蟻地獄らしきものが見えたので少し近づいてみたら、足元を何かに掴まれて振り払おうとしたら足首を切り落とされた。

予想もしなかった激痛に脂汗をかきながら地面を這っていたら、蟻地獄の中から拳サイズの小さな虫がわらわらとこっちに近づいてきていた。幸い足首はすぐに再生したから逃げ遅れることはなかったが、魔物の怖さを改めて思い知ったいい機会だったかもしれない。もう二度と体験したくはないけれど。

再生したては履きなれていない靴で走るような感覚だったが、そんなの気にせず死にも狂いで遠くの砂岡にたどり着いて東京ドーム並みの蟻地獄を見下ろしていたら、馬鹿デカくて丸っこい虫が蟻地獄から這い出てきてこっちを威嚇してきた時は戦慄が走った。

その体験のおかげか修行を適当にやるなんて考えも浮かばなかったらしく、短い期間にしては成果はかなり良かった方だと思う。約一週間修行らしきものを四時から暗くまで行なった結果、初級魔法はほぼ確実に使えるようになったし、中級魔法も一部使えるようになった。

しかし剣の方はからっきし駄目で、剣からもため息をつかれるほどだった。あえて上げるとすれば剣に魔力を纏わせることが出来たくらいか。荒瀬さんなら剣術とか知っているだろうか。

インカには修行に出る前に一ヶ月分のお金をあげたから心配はいらないだろう。逃げてるかなーって卑屈に思いながら部屋に入った。本を読んでいたの、だーれだって後ろから目を隠したら鳩尾に頭突きされた。

俯いてる顔を下から見ると涙を必死に堪えていたので少し可愛い

と思ってしまった。引き取っておいて放つたらかしたのには流石に無責任すぎたか。ごめんと謝りながら頭を撫でてご機嫌を取っておく。

インカはシャワーが嫌いらしくあまり体を洗わない。裏路地で生活していたから体を洗うって考えがまだわからないらしい。俺が無理矢理シャワー室に連れていってもすぐに逃げてしまいが、サラに任せると入る。母親がやっぱり恋しいんだろうか。

お金に関してはいらぬ物を質屋で売ったから問題ない。衝動買いしたのも多かったから異次元袋を整理するいい機会だった。ついでに砂漠で剥ぎ取ったスコープオンとトカゲの素材も売っておく。アクアスコープオンの貯水袋が割と高めで売れたので満足だ。

その後夕食にサラを誘ってインカがトイレに行っている間に何を吹き込んだのか聞いてみると、案外単純な答えが返ってきた。

彼は君を傷つけたりしないよ、と言っただけらしい。首を傾げる自分にサラは無邪気に笑うだけだった。丁度インカが帰ってきたので俺の皿に乗せられていた野菜をインカの皿に移しておく。

「あ！ 何で僕、お皿に野菜乗ってるっ！」

「好き嫌いはいけないぞ。そのくらい頑張って食べるよ」

「じゃあ私のをシュウトに……」

「お前はアホか」

サラの野菜を跳ね除けて自分はシャキシヤキの歯応えが特徴的なキャベツと肉を挟んだハンバーガーを食べる。じゅわっと溢れる肉

汁とキャベツが相まって凄く美味しい。正確にはキャベツじゃなくてシャタラって名前らしいがキャベツでいいよもう。

「ほら、インカもサラもちやんと食べよ」

「野菜食べなくても生きていけるよ！ 何でこの緑色の不気味な物を食べなきゃいけないのさ！」

「ぶー」

子は親に似るとはこういうことか。二人共唇を尖らせて机に顎を乗せながら、あーだこーだ言っている。うわ、凄くウザいなこれ。

「食べるまで返さないぞ。ほら、インカは肉あげるからそれと一緒に食っちまえよ」

「えー！？ ずるいー！」

持っているフォークとナイフをバタバタさせながら文句を言うサラを軽く小突いて、早く食べると目線で告げる。緑色の丸っこい野菜が本当に嫌いなのか涙目で何か訴えてきているが、こっちとしては早く食べとしか言えない。ウエイトレスがお皿をかたずける時に睨まれるのは俺なんだよ。

結局調味料をいっぱい振りかけ、味を誤魔化してサラは食べた。食べさせた。俯せになって動かないサラをインカが心配そうに揺すっていたが、大丈夫だろ。多分。

愚痴垂れてるサラを見送った後に部屋に戻って砂漠で見た蟻地獄

に關することを神本（この本の正式名称らしい）で調べてみると、砂漠地帯では食物連鎖の頂点に君臨しているガユラという魔物らしい。しかもあれで幼虫。とんだ化け物だ。二度と会いたくない。ちなみに俺の足首を切断した魔物はアシカリ。ガユラと協力関係にあるらしい。

それと魔法について少し疑問がある。普通の人は魔方陣を通して魔法を発動するけど俺は自分でイメージした魔法が発動する。だから基本の初級魔法使えれば上級魔法も出来るんじゃないか？って話になるわけなんだが、実際のところは無理だった。

初級魔法は単純に火の球を出したり水の壁を形成したりするだけだからイメージは簡単だが、上級魔法は基本二属性を混ぜている魔法だからかなりイメージが難しい。

中級魔法はその中間と言ったところか。ただの炎の槍なら使えるが、刺さった相手の体内で爆発する炎の槍なんてのはまだ使えない。

直接見た魔法なら使えそうなんだがこの街には魔術師が少ないのでそんな機会も無く、上級魔法を覚えるのはかなり先になりそうだ。

「シユウト、暇」

「寝ろよ」

「まだ眠くない」

そう言って背中に飛びかかってくるインカを振り落としてベッドに投げ飛ばす。しかしめげずに立ち向かってくるインカ。何とも振り落としていたら段々キックするようになってきた。

うん。絶対調子乗ってるよコイツ。

「痛いから止める」

「いや」

ムカついたから布団でグルグル巻きにして光の初級魔法ライトを糸状にして縛っておく。氷の初級魔法アイスで作った氷があるから熱中症になることもないだろう。

「出して」

「嫌なこった」

芋虫みたいに転がってるインカ。ざまあと心の中で言いながら神本を異次元袋にしまつて就寝準備。流石に寝苦しいだろうから魔法を解いてやったらまた立ち向かってきた。

「出して」

「お前なあ……」

再び芋虫に成り下がった子供を見下ろしてため息。やんちゃしい年頃なんだろうか。だったら外で他の子供と遊んでこいよ、は少し酷なのかもしれないかな。今は俺が親代わりなんだしなあ。実感があまり湧かないけど。

「次やったらもう出さないからな」
「わかった」

翌日。午前三時に起きるのが日課になってしまったのが随分暗い時間に目が覚めた。欠伸をしながらベッドから起きて、隣の芋虫の魔法を解いておく。アイスで冷やしていたから暑苦しいってことはなかっただろうから大丈夫だろう。

多分体が強化されてきたから睡眠時間もあまりいらなくなったんだろう、と適当な考察をしながらもう少し明るくなるまで荒瀬さんの異次元袋を弄って朝まで漬した。

朝五時辺りになると段々と外が活気づいてきた。異世界の朝はかなり早い。窓から外を見ると配達の人が必要な荷物を持って走り回っている姿が伺える。俺もギルドに行く準備をしますかね。

灰色のローブを桶に入れて渦巻く水をイメージ。十分くらい洗った後に暖かい風をローブに吹き付けて乾いたら異次元袋に入れておく。基本洗濯はこんなもんだ。異臭がすることはないからまあ大丈夫だろう。

基本周りの人は地味な色を使ったラフな格好なので灰色のローブは少し目立つ。なので自分も最近街に出かける時はベージュの半袖

半ズボンとかで出かけている。基本は灰色のローブだけど。快適だし。

食堂で適当な物をつまんだ後にギルドへと向かう。暑いから氷でも周りに漂わせたいが、魔法を使うと貴族か何かと勘違いされるのが釈然としないので止めておく。

あの門番がやけに低姿勢だったのもこのせいだ。あー暑い。

第二十三章（後書き）

深海にいる巨大生物とか何か怖いですね。読み返してみたら微妙でしたけど

第二十四章

灰色のローブに着替えてフードを深く被りながらギルドに入ると、いつもと違って珍しい光景が広がっていた。若い女性達が他愛も無い話に花を咲かせ、幼い女の子は周りの雰囲気戸惑っている光景。

「は？」

そんな声が自然と漏れてしまうくらいこの光景は異質だった。まず女性なんて受付娘しかギルドでは見ないし、まだランドセルを背負っていそうな子供がここにいるのもかなりおかしい。

こんなことになっている理由を四人席のテーブルに座りながら、居心地悪そうにちびちびと酒を飲んでいる冒険者達から盗み聞きしてみる。

「おい、何でこんなに女がいるんだ。居心地悪いなんて騒ぎじゃねえぞ」

「情報が遅いなお前。昨日黒の旅人が夜中に孤児の女を集めて魔法を教えたらしい。噂では死者も出たとか」

「黒の旅人って確か……魔術開放運動の代表者だったよな？ 他にも色々やってた……って、何で死者が出るんだよ。それに孤児にしちゃ服が綺麗じゃねえか」

「初級魔法を教えた女共を砂漠に放り出したらしい。命懸けで魔法を使った方が効率がいいだの言ってたそうだ。服や髪が綺麗なものは黒の旅人が用意でもしたんじゃないか？」

「……そうか。でもよ、そしたら貴族やこの街の警備隊も黙っちゃいないだろ。いくら有名な黒の旅人でもよ」

「だが現に貴族も警備隊も動いていないんだ。まあ俺は魔法使える奴と組めて黒の旅人万々歳なんだがな。小さい餓鬼と組むのは御免だが」

そう言っつて酒を飲み干した冒険者から目線を離して改めてギルドを見渡す。今までギルドで女性冒険者を見たことなんて一、二回しか無いし、全員質の良さそうな装備をした貴族だった。

基本女性は冒険者に向いていない。男性の方が力が強いから当然と言えば当然なんだが、そのために女性冒険者は魔法を使えなきや話にならない。しかしお金が無いと魔法を覚えられないので貴族しか魔法は覚えられない。だから冒険者の女性と言えば貴族か金持ちだけだった。とは言っても冒険者を希望する貴族なんて稀なだけだ。

それはそうと普通に考えたら魔法は貴族や金持ちの独占している場所だと思っただが……黒の旅人はそこを荒らしてしまっただ丈夫なんだろうか？魔法が普通の人も使える国はあるらしいが、少なくともこの砂漠の国サンドラは違う。貴族側からしたら黒の旅人はかなり邪魔な存在になってそうだが。

まあ黒の旅人……多分荒瀬さんのせいで朝っぱらから随分とギル

ドが騒がしくなっているし、周りの冒険者も困惑している様子だった。パーティを組もうだの何でこんな餓鬼が、何て言葉が飛び交っている。

「何よ！ Dランクが警戒言ってるんじゃないわよ！」

「ああ！？ 何だとてめえ！」

P T契約で意見が食い違ったのか激しく口論している男女が遠目に見える。受付娘達が慌ただしそうに止めようとしているが、止まる気配が感じられるどころか男は背負っている重厚な盾を取り出して槍に手をかけ、女は胸ポケットから魔方陣っぽいものが描かれた紙を取り出している。おいおい。ヤバいんじゃないかこれ？

こんな時にシロさんは何をやってるんだ。中に割って入るなんて俺はごめんだぞ。誰か助けてーとギルド職員を見回してみるが、モヤシ体型の男一人と兎耳と受付娘三人。しかもこういった物騒な騒動は初めてなのか縮こまっている。た、頼りねえ……。兎耳は一応頑張っているけれども肝心の男女は何を言っても聞かないだろ、あの様子じゃ。

誰か助けないかなーって他人ずらしていたら遂に女の方が紙を持ちながら詠唱を始めた。男の方は距離を詰めればいいのに何故かどつしりと盾を構えている。おいおい。相手が雷属性だったら感電しちゃうぞ。

「清らかなる水よ！ 水の弾と成り、敵を貫け！ ウォーターボール！」

彼女の手の平にある紙から人の頭ほどの水球が作り出され、弾丸のような勢いで発射された。一発、二発目は弾いてみせたものの、その内男の表情は苦々しいものに変わっていくだろう。

腰を低くして水球を弾いているその姿は勇姿そのものだけでも、初級と言えどDランクの人間が魔法に勝てるはずもないのもう少しすれば水弾に盾を弾き飛ばされそうだ。

このまま男が弾き飛ばされたらあの女は絶対調子乗るだろうなあ。少し息を切らしているがまだあの水球は飛ばせるだろうし、ここは男の方に助太刀しておくべきなのか。余計な手出しをするなどか言われるのが目に浮かぶけどな！

結局他人ずらして立ち去ろうと思ったけど、モヤシな男性職員が思いのほか騒動を止める意思を見せているので助太刀することにした。今は野次馬に弾かれて目の前に突っ伏しているけど。

女性職員は魔法使うと亜人の特徴出るから手出し出来ないのか慌てるだけだし。周りの冒険者は面白がって止めないし。何この好き勝手なお祭り状態、と毒づきながら男性職員を手当している兎耳の元へと走る。

「えっと、お姉さん。シロさんは何やってるんですか？」

「……出かけています」

前のことを根に持つてるのか兎耳は随分と冷ややかだった。女性

の冷たい視線などこの二ヶ月ちよつとの間だけで何十回と経験したので痛くも痒くもない。いや、ちよつとだけ痒いかも……。

「用心棒みたいなのはいいんですか？」

「三人いたんですが一人はキングスコープピオンの塔の視察に駆り出されて、二人目は腹痛。三人目は外の対応に追われています」

「そうですか。……若干二人目がおかしな気もするんだけど」

「ギルドに来た瞬間からトイレに籠ったつきりで出てこないんです……」

「何そのトイレの用心棒！　がっかりだよ！」

つい何処かのノリでツツコんでしまったせいか、はあと若干引き気味な兎耳。そんな茶番を演じている間に水球を受けていた男が苦しげに声を上げていた。あ、ヤバイヤバイ。

後ろから彼の盾を支えて水球を弾き飛ばし、そのまま水球を連発しながら息を切らしてる女に盾の後ろから止めると意思を込めて一睨みしてやるが効果は無し。俺の眼力は女一人も怯ませられませんよ。ええ。

周りから流石お手伝いやら野次が飛んでくるが気にせず盾から出て剣を構える。安心の布付き。流石にいきなり間に現れた乱入者に水球を打つほど彼女も切羽詰ってはいなかったらしく、水球が飛んでくることはなかった。

「余計な真似をするな餓鬼ッ！」

「……別にアンタの負けってわけじゃないさ。ほら、あの女も息を

切らしてるし」

魔力を消費すると倦怠感が体を襲い、次に極度の疲れと眠気。それを無視して魔力を酷使すると視覚や聴覚が失われたり体組織が分解したりする。息切れしているってことは魔力はあまり残っていないだろう。せいぜいあと一、二発打てるぐらいか？今にもあの女は倒れそうだし。

「私はまだ……やれるわっ！」

「そう意気込むのは勝手だけれどもあと二発くらい発動したら失明すると思うよ？ それでもいいならご自由にどうぞ」

そう言うとき女の方は大人しくなった。男の方はその様子を見て満悦のようだが、さっきから盾がピクリとも動いていないから盾を持っている手は痺れてるんだろう。目で追うのがやっとな勢いの水球を何ども片手で止めてたんだし。

「というわけで引き分けて結果で文句ないかな？」

「そんな結果で納得出来るわけないだろ！」

威勢のいい男の盾をガツンと剣で殴りつけてやると、男は呻きながら盾を床に落とした。

「引き分けだよな？」

「……………ああ」

その言葉を聞いて安心の息を吐きながらも、男に肩を貸して四人席に座らせてあげた。女も同様にして同じ席に横にしておく。困惑している男に笑みを返して兎耳の方へ小走りで向かう。

これで女が息を整えて喋れるようになった時に男は絶対気まずくなるだろう。ククク……。ざまあみやがれてんだ。

「……………今日はありがとうございました」

相変わらず冷ややかな視線な兎耳に嬉しくもないお礼を言われ、何故か仲良さげにPTを組んでいる男女二人組に苛立ちながらもギルドを後にした。依頼を受けようと思ったが周りのPTの勧誘の声や子供の視線が鬱陶しかったので、街を適当にぶらついた後に砂漠で狩りでもすることにした。

「お、新しい物仕入れたんですか？ 随分と大きいですけど」

「こいつは凄いで。魔力を流せば砂漠の荒野も走り抜けられるパワーバイクだ。魔力消費が激しいのが厳しいがそれさえ乗り越えれば

頼もしい砂漠のお共になるぜ」

雑貨屋に寄ると何やら凄い物があつた。赤い装甲に黒く光る二輪のバイク。これで走ったら楽そうでいいな。砂漠を徒歩で走破なんてしたくもないしこれは買いたいな。百万越える値段がネックすぎるけど。

そうそう。魔法を使うのは習わなきゃ出来ないけど、魔法を使うのは誰でも出来る。現に料理人が火を使うのも火が出るコンロみないなのに魔力を流して使っているし。

実際のところ魔方陣に魔力を流すだけで魔法は使えるが、魔方陣を書くのが難しい。なら他の人が書いた物を使えばいいと思うかもしれないがそうもいかない。

自分の魔力を使った魔文字を使って書いた魔方陣じゃないと魔法は発動しないからだ。自分専用の魔方陣じゃないと魔力は反応してくれない。何という我侭な魔力だ。贅沢言うなと言ってやりたい。

まあ結局今はパワーバイクなんて代物買えないので予約という形を取った。これで一層働く意欲が湧くというものだ。目的なしに金集めなんてやってられるかってんだい。

「また寄ってきなよ」

「気張ってお金貯めてきますね」

そう言って雑貨屋を離れて砂漠へ向かう。流しそうめんの門番は

相変わらず俺のことが嫌いなようで、軽いジョークを言っても苦笑いしか浮かべない。凄い悲しい。何？ 俺親父になっちゃったの？
俺のジョークは親父ギャグ並みに寒いの？

そういう思いながら砂漠を歩いていたらヘルスコープオンを発見。憂さ晴らしの感情が入っている剣を振りかざしながら、俺は砂地を蹴ってヘルスコープオンへ向かっていった。

第二十五章

ヘルスコープイオン十匹を切り伏せて一息ついていると少し遠くの方でアクアスコープイオンと戦っている二人組みの冒険者PTを見つけた。

一人は身の丈程ある大剣を盾変わりにしてアクアスコープイオンの体当たりを防ぎ、もう一人は魔術師なのか腕を突き出して何かの塊を連射している。前衛後衛に別れたバランスの良いPT。もう魔術が使えるらしい女性達は冒険者と馴染めたのか。俺も誰でもいいからPT組みたいなあ、と実現出来そうにない空想を思い描く。

そりゃあ俺もPTを編成して依頼を達成したいけれど、色々問題があるから多分PTを組むことは無いだろう。もし怪我を負って再生するところを見られたら化け物扱いされるのは目に見えてるし、もっと怖いのは神が俺に落とす不幸でPTの誰かが死んだりすること。

今でも若干憂鬱なのにそんなことが起きたら立ち直れない。だからしばらくは一人の旅路になると思う。寂しさは否めないが剣もいるんだし孤独死することは無いだろう。兎みたいに俺は寂しがり屋じゃないぞ。

そんな思考に耽りながらヘルスコープイオンをナイフで解体していたら、ゾンビみたいいな呻き声が聞こえた。何かの魔物かと顔を上げて辺りを見回すと遠くで戦っていた男女二人の内、大剣を担いでいた男がうずくまっていて女の方は後ろでうろたえていた。

これも神が落とした不幸なのかと内心ため息をつきながら冒険者

の元へ走る。何とというか、俺に起こる全ての出来事は神が仕組んだことって思うと何かム力つく。神の髪も不幸と一緒に落としてしまえ。

そんな罰当たりなことを考えながら走っていたら冒険者達の所へ到着。真新しいバッグをあさりながら酷く錯乱している青髪の彼女の肩を叩いて尋ねる。

スパアンと小気味いい音が響き渡った。視界が横に少しぶれる。

「……どうしました？」

「えっ？ あっ！ ごめんなさい！」

混乱していたからか彼女は振り向きざまに俺の頬を思いっきりピントした。切実に泣きたいし怒りも感じたが、最近は何事にも慣れたせいがこの程度なら全く気にしなくなってきた。何か人間として駄目な気がするけどな！

それにかなり苦しそうにしている男の前で女に謝罪を求める凶太さも持ち合わせていないので、痛む頬を摩りながらもさっさと話を進める。

「このくらい慣れてます。それでどうしたんですか？」

「青いサソリに何か吐かれたんです！ そしたら彼がいきなり苦しみ出して……それでっ！ えと！」

不思議な踊りでもしてるのかと言いたくなるようなジェスチャーを混じえた彼女の言葉を聞いた後、異次元袋を覗き込んで赤い容器に入った塗り薬を取り出す。どうやら彼はアクアスコープピオンの酸液を浴びたらしい。

奴は滅多にここ一帯には現れないからあの男はその特徴を知らなかったんだろう。奴は命の危機を感じると石をも溶かす胃液と水を混ぜた酸液を口から吐き出す。まあその時奴の口の中もとんでもないことになるので滅多に使わないだけだ。

「顔から手を離して下さい。大丈夫です。痛くないですから」

男はその声が聞こえていないようで砂漠でのたうち回っている。早めに処置しなきゃ間に合わないかもしれないので、遠慮している暇はない。と言うわけで無理矢理拘束することにした。

土魔法のソルトで男の足首を固めて動けなくしたところで胴体に乗ってマウントポジションを取り、手を退けさせて手首をソルトで固める。後ろの女は止めようとしてきたが知らんぷりした。

彼の顔は肌が溶け筋肉は露出していて、理科室の人体模型を彷彿とさせた。あまりにもグロテスクすぎて吐き気がするが、そんなこと言ってもらえないと自分に言い聞かせて男の顔を観察する。

目は溶けてなく酷いところは頬辺りなのが幸いか。目が溶けてたら応急処置なんて出来ないしなあ。その分鼻や口元が酷いことになっている。鼻からは骨がこんにちわしているし、口元も見るに耐えないような感じだ。

「君、何属性の魔法が使えるの？」

「えっと!?! 氷です!」

「……そう。じゃあ氷をこの中に入れといてくれる？」

異次元袋から桶を取り出して彼女に手渡してそう告げた後に男へ目を向ける。取り敢えず外傷に良く効くと評判の不気味な赤い塗り薬を顔に塗ったら、男は凄いい勢いで悲鳴を上げた。まさに大絶叫。耳が痛い。

今塗った薬は外傷に凄いい効き目のある薬らしいが、その分死んだ方がマシってくらいの痛みが襲ってくる塗り薬らしい。やっぱ死ぬほど痛いのだろうか？ しかも顔から赤い気泡が出始めたど大丈夫なのかこれ？

もの凄く高いらしい薬（って言っても依頼の報酬で手に入れた物なんだけど）は使う機会が無かったので今使ってあげたらこの有様いや、赤い塗り薬なんて不気味だし使いたくなかったのが本音だけ。

薬を塗ってる間男が凄いうるさかったので適当な布を噛ませておいた。後ろの彼女は必死に氷を作っている。取り敢えず作らせてるだけなんだけど何に使えばいいんだろう。

グチャグチャの顔から色んな汁を出している男を励ましながら薬を塗りたいくらい、やっと塗り終わったので包帯を巻いておく。何かミイラみたいになってしまったが問題無いだろう。息は出来るようにしてあるし。というか気絶しちゃったし。

死んじやいないだろうな……と訝（いぶか）しげに思いながらも薬をしまつて後ろを見ると、俺の身長を越す勢いで積み重なってる氷があつた。この女は限度を知らないのかと思つた。

「急いで街に運びましょう。貴方は……そうですね。彼の顔を氷で冷やしてあげて下さい。布越して包帯が濡れないようにした方がいいかもしれませんね」

「は、はいっ！ わかりました！」

男を背負つて彼女に布を渡してもう踏みなれた砂漠を走る。後ろの彼女は男の顔を冷やすどころか、着いてくるのに必死なようで物凄い息切れしている。速度を落とすことも出来ないので頑張つて下さいと励ましながらも門に到着。

事情を話した後の門番の対応は迅速だつた。すぐに医者と呼ばれて男は担架で運ばれていつて、彼女も息を切らして慌てながらもそれに着いていつた。こういうことはやっぱり頻繁に起こるのかね。

それと応急処置していたことを門番に何故か褒められた。普通は怪我をした他人の冒険者を助けて更に応急処置までする奴はいないらしい。俺も勝手に傷が治るなんてことがなかったら見捨てはしないと思うが、薬は使わなかつたかもしれない。

冷徹野郎と後ろ指を指されそうだが弁解させてもらう。だつてプリンカップくらいの容器に入った小さい塗り薬で五十万だよ？ 効果が一番高いらしいけどまさかゲームみたいに体力全回復！ っつても無いだろうしぼつたくりだろこれは。塗るだけで傷口が再生

するような薬をこの世界で作れるなんて有り得ないだろうし。

「そう思って薬の運搬……元の世界じゃ怪しい仕事に見えるけど。まあ薬を貰った店に訪ねてみた。薬の説明は何というか……うん。わけがわからなかった。」

俺が貰った薬は妖精の心臓とドラゴンの血を混ぜて作った塗り薬らしい。いや、本当にわけわからん。何か使ってる材料からして凄い薬に見えるが、俺は薬運んだだけで貰ったんだけど？

……ヤバい仕事だったのかー？ あれー？ ヤバい仕事だったのかー？ 渡した人は感じの良い青年だったけどなー？ 俺何かの組織を敵に回したとかそんなオチは求めてないぞー？

冷や汗を流しながらも薬屋を出てその後も雑貨屋などを周り、日が落ちてきたら宿に戻って一息つく。インカとサラと夕食を食べて、部屋に帰ったら神本を読みながら飛びついてくるインカを軽くあしらう。

インカが寝た後に平和だなあと爺さん臭いことを思いながら夜景を眺めていたら、いきなり荒瀬さんが窓から侵入してきた。完璧な不法侵入です。びっくりして俺のおつまみ達が床に落ちたわ！

「何処から入って来てるんですか！」

「窓から颯爽と入るのって格好よくない？」

「荒瀬さんだけですよそれは」

手厳しいねえ、と口元をニヤケさせながらも荒瀬さんは床に腰を

下ろした。枝豆は貰った！何て言って枝豆を拾ってる姿には少し笑ってしまった。

「今日はどうしてここに？」

「理由も無く来ちゃいけないのかい？ ハッ！ また新しい女を引っかけたのね！？ この優男！」

「いや、何ですかそのオカマ口調は。気持ち悪いです」

「最近修斗君僕に冷たい！ 私への愛は嘘だったのね！」

（最近僕にも冷たいよね。最近話しかけてもくれないし。ワ、私への愛はウソダッタノネー）

うわあ。凄い疲れる。こいつ凄い面倒臭い。そして地味に会話に混じってくるなよ剣。しかも棒読み感抜群すぎるだろ。

「とまあ冗談は置いて。確か修斗君特訓してたよね？」

「え？ 荒瀬さんストーカーですか？」

「修斗君がいつの間にかSに成り代わっている…だと…？ いや、まあそれは置いて。魔法は何かかなりそうだったけど体術とか剣術に苦戦してたよね？ 憶測なんで間違ってるかもしれないけど」「そうですねー。剣道とかやったことないですし、今は適当に振り回してるだけですなー」

そう言つと荒瀬さんはクツクツクと含み笑いをしながらこつちの反応を伺っている。あれ？ 荒瀬さんこんな面倒臭いキャラだった？ 何か無性に殴ってやりたいぞ？

偽物かと少し疑ってみるもののSなんて言葉使うのは荒瀬さんぐらいだし……大丈夫か。

「今日やっと仕事が終わったわけで、修斗君強化期間を設けようと思っただけですよ！」

「仕事終わったんだったら休んだ方がいいんじゃないんですか？」

「お金払って剣術習うってことも出来るわけですし」

「今日徹夜で特訓内容考えてきたんです！ その努力を無駄にしないためにも特訓を受けて下さいお願いします！」

「いや、お願いするのはこっちの方なんですけど……」

特訓出来るのが嬉しいのかよっしゃー、とか言ってはしゃいでる荒瀬さん。アルコールでも入っているのか？ いつもよりやけにテンションが高い。

「それじゃあ明日朝五時に門の前で！ 待ってるからねー！」

そう言っただけで窓から飛び降りていった荒瀬さん。その後続くドンガラガツシャン。

「一体何だっというんだ……」

きつと酔っていたんだろつと勝手に思考を完結させ、窓を閉めてベッドに入る。毛布を蹴っ飛ばしているインカに毛布を掛けなおし、俺は目を閉じた。

第二十六章

まだ空が暗いうちに俺は布団から起き上がり、また毛布を蹴つ飛ばしているインカの寝相に呆れながらも砂漠へ行く準備を進める。寝間着から穴の開いたコートに着替えて剣を腰に括りつけ、異次元袋を背負っていざ砂漠へ。

ダメージジーンズなんてファッションもあるんだしコートもまさか……なんてことはなく、周囲の人からは異質な目で見られたことが何度かあった。直そうと思って暑苦しい武器屋に行っただけと直せないと言われ、結局このままです。

所々明かりが点いている建物をぼんやりと見ながら門まで歩き、欠伸を堪えながら五分くらい歩いたら門に到着した。門番にはスキンヘッドの爺ついおじさんに全身鎧に包まれた人がいた。べ、別に怖気付いたりとかはしていないぞ。

内心ビビりながらも爺つい門番にご苦労様です、と落花生みたいなおつまみを渡したら思いのほか喜ばれた。隣の全身銀鎧の門番が軽くシユンとしてるのを見て少し笑ってしまったけど。

ハツと気づいてすぐに謝ろうと思ったが、門番達は見た目と違って気さくな人達だったようで豪胆に笑いながら許してくれた。外見で人を判断したのはよくなかったな。うん。

そんなこんなで少し肌寒い砂漠へ足を踏み入れた。砂漠は昼は暑く夜は寒い。風邪引きそうだな、と思いながら歩を進めるとただ広い砂漠の景色にポツンと黒点が見えた。わかりやすいなと思いいながらも黒点に向かって走る。

「やけに早いな修斗。まだ四時だぞ」

「やっぱり女性は時間に早いもんなんですね？」

「……？ まあいい。それじゃあ始めるぞ」

あれー？ やけに昨日との温度差がある。昨日のオカマ口調を皮肉ってみたんだが荒瀬さんは不思議そうに首を傾げるだけだし、でもここに居るってことは昨日の人は荒瀬さんなんだよな？ 声も同じだったし。

「……昨日来たのは荒瀬さんじゃないんですか？」

「……あー、成程ね。うん。俺はちよつと仕事の後処理してたから昨日のは俺の部下だよ」

「でも声が多分一緒だったと思うんですけど」

「氷と風の上級魔法で声帯変えさせてたんだ。氷で喉笛作って風で俺の息を……端的に言つとそんな魔法」

そう言つて荒瀬さんは頭をかいて乾いた笑い声を漏らしながらも地面を蹴っていた。やっぱり違う人だったからあんなツツコミどころ満載だったのか。

「それじゃ修行始めましょうかね。鬼畜コースと残虐コースどつちがいい？」

「……えーっと。剣術の基礎とかそういうのでは無いんですか？」

「あ、剣術とか教えて貰う気だったの？ 修斗は魔法を交えて戦う

と思うし、剣術とか型を覚えても役にたたないと思うけど。それやあ、やっておくに越したことはないけどさ」

そう言いながら荒瀬さんは魔方陣を地面に書いていた。砂漠の砂で書けるのかと思う頃には魔方陣が輝きだし、青い何か空に打ち上がって消えていった。一体何の魔法だろうか？

「……それで鬼畜コースと残虐コースって言うのは何ですか？」

「まあどっちもキツさは変わらないと思うからじゃんけん決めてよっか。俺グー出すからな。じゃあ行くぞ、じゃーんけーん……」

ぼんっ。荒瀬さんはチヨキ。自分はパー。

「……ずるいですね」

「知らんがな。それじゃあ残虐コースに決まり。ルールは簡単。俺が修斗を百回殺すまでに修斗が俺から武器を奪うか壊すかすれば修斗の勝ち。百回殺されれば修斗の負け。それじゃスタート！」

そう言いながら荒瀬さんは異次元袋から鉄の大剣を取り出して肩に担ぎ、片手でかかってこいと言わんばかりに挑発してきた。いや、何故挑発されたし。

いきなりかかってこいと言われてもどうすればいいかわからない。それに荒瀬さんが強いのはわかってるけどもし攻撃が当たったらどうするのか。何か怪我をしない結界とかそんな保険は無いのか。

「あー、やっぱりそんな感じだよな。そうだな。それじゃあ……」

いきなり大剣を前に構えたと思ったら、荒瀬さんが砂埃を残して消えた。そしたらいきなり視界が反転して回転して 止まった。

「取り敢えず一回死んでみようか？」

一体何が起きたのかわからなかった。

気づいたら砂漠に仰向けになっていた。寝違えたような痛みが走る首に違和感を覚えながら起き上がると、鉄の大剣を持った荒瀬さんが立っていた。変わったところは……大剣にべつとりと血が付着し、俺の周りが赤いくらいか。

「修斗は首を大剣に撥ねられて死にました。はい。死亡数一回な」

荒瀬さんは鉄の剣に針のような物で傷を付け、そしてまた大剣を前に構えた。

「何ですか？ これ？」

「修行だよ？ はい。二回目な」

今度は視界がガクンといきなり下に落とされ、最後に黒い靴が見えた。

痛む首を抑えながら起き上がると、また鮮血に濡れた大剣を肩に担いでいる荒瀬さんがいた。

……………。

「修斗は首を切り落とされて死にました。死亡数二回目です」

またガリつと剣に傷をつけて荒瀬さんは大剣を前に構えた。成程。

言いたいことは大体わかった。

「……拒否権は無いと？」

「不死身の修斗にはピッタリな訓練方法だろう？ それと死亡二回目に理解が早いのは褒めてやるが、そんなんで大丈夫か？ まるで兎みたいに見えるけど」

結構強がって見たつもりだったが、本能は正直だった。ここから逃げると頭の中は警報を鳴らし続けている。足は今にも崩れそう。息は自然と乱れ、歯がカチカチと音を鳴らしていた。

情けないな、と思いつつも自分はへっぴり腰で剣を構えた。腕が震えているせいかやけに剣が重く感じる。落ち着こうと深呼吸しようとしても過呼吸になっていて出来ない。

「体が不死身だったらまずは死ぬことに慣れなきゃなあ？ 修斗？」

口元を歪めさせて語りかけてくる荒瀬さんは、黒い悪魔に見えた。いや、悪魔だった。

「死亡五十三回目か。もうそろそろ首飛ばすのも飽きてきたなあ？
次は臓器でも引きずり出してみるか？」

その言葉聞いて俺は出来るだけ多くの魔法の壁を自分の周りに張って、街に向かって走り出していた。もう何度過去の自分を恨んだか数え切れない。何で今日ここに来てしまったのかと、過去の自分に叫んでやりたい。

荒瀬さんは自分の強さに合わせて手加減してくれると勝手に想像していたが、そんなことは一切なかった。繰り返される一方的な虐殺。首が落とされる時の激痛。ゲームのコンティニューボタンを押すみたいに簡単に復活する自分の命。

これは修行じゃない。荒瀬さんが自分を殺して楽しんでいるんだと、そんな考えが浮かんでくる。そう考えたら怒りを感じると思っていたが、感じたのは純粹な恐怖。このまま荒瀬さんに何回も首を落とされ、命を散らし続ける自分の姿を想像してゾツとした。

そんな考えをグルグルと頭の中で回しながらひたすら砂漠を走り、湿っているズボンを鬱陶しく思いながらも後ろを振り返ると遠くに黒点が一つ。諦めたのかとホツとしていたらいきなり頭上が暗くなつて、見上げる前に顔が地面についていた。

恐ろしいほど冷たい砂の感触を顔に感じながらも首を出来るだけ後ろに回すと。

「おいおい、逃げるなよ」

愉快そうに口元を歪めた荒瀬さんが自分の背中に乗っていた。暴れようとしてもがっしりと両腕を後ろ手に掴まれているので抜け出すことは出来そうにない。

逃げられない。そう考えたら自分は驚くほどの声を上げながら涙を流していた。怖かった。恐ろしかった。自分の背中の上で笑顔を浮かべている人間がただ恐ろしかった。

「嫌だあ！ もう死にたくないいい！ 痛いんだよ！ 痛い痛いんだよお！ もう嫌だあああ！！」

「もう少し頑張る気はないのか？ さっきから俺に背を向けるばかりで俺に触れてさえいないしさ？」

「お願いします……。もう許してください……。痛いんです。痛いんです！ もう止めて下さい！」

はあ、とため息が聞こえた。次にバキリと耳にもしたくないような音。次には凄まじい鈍痛が自分の中を駆け巡った。

「逃げようとしたペナルティで腕をこれから十回折りまーす」

「痛い痛い痛いいいい！！ もう嫌だあ！ 誰か助けてくれえ！ 誰か……。助けてくれよお！」

「五秒すれば痛みは引くだろう。ほら、もう治ってる」

またバキリという音と共に鈍痛が走る。こんな目に合うなら不死

身なんかにならなくてよかった。もう嫌だ。死にたい……。

そこで自分の意識は薄れ、途切れた。薄れる間際にこのまま目が覚めないといいなと思いつながらも。

「シロエア遅いなあ……」

その言葉を聞いて一気に脳が覚醒した。即座に立ち上がって逃げようとしたが、目眩がしてすぐに柔らかい何かに倒れ込んでしまった。ここは何処だ？ それに今の声は……。

「どつやら起きたみたいだな」

荒瀬さんが木製の椅子に座りながらフルーツナイフのような物を弄っていた。その光景に自然と小さい悲鳴が漏れる。あのナイフで滅多刺しにされる自分の姿が鮮明に脳裏へ浮かんだ。

そんな自分に荒瀬さんは苦笑いを浮かべながらナイフを机に放り

捨てた。そして敵意は無いと言わんばかりに手をヒラヒラと上へ拳
げた。

「ここは病院。もう特訓は終わりだ。少し修斗には早すぎた……いや、元々いらぬ修行だったのかもしれない。もう俺と修行やりたくないと思つたらその手紙を見て自分で修行するんだな。それじゃ俺は失礼するよ」

そう荒瀬さんは言つて椅子から立ち上がると、手をヒラヒラさせながら扉を開けて出ていった。そのことに安堵しながらも周りを見渡すと、白を基調とした綺麗な部屋だった。自分が寝ているベッドと横には机と椅子。机の上には黄色い花が飾つてある花瓶と封筒が置いてある。

すると扉からコンコンとノックが二回。どうぞ、と言つ前に扉が開いて茶髪の女の子が何かの籠かごを持ってこつちに歩み寄つてきた。

短髪で少し男っぽい髪型をした案内娘だった。そういや最近見てなかつたな。何か用事でもあつたのかな？

「……案内娘か？ 何か久々な気がするが」

「実家に帰省してたんだよ。それで帰つてきたらサラがいきなり病院に行くなんて言い出すから聞いただしてみたら、お兄さんが砂漠で倒れて搬送されたなんて言うもんだからさー。代わりに私が来たわけ。帰つた直後にお兄さんのお見舞いとか憂鬱になつちゃうわー」

「俺が砂漠で倒れた……？ 誰に俺は運ばれたんだ？」

「知らないわよ。大した怪我も無いみたいだし私は帰るわ。あ、こ

れサラがお兄さんにだって」

案内娘は籠をこっちに投げ渡すとそのまま帰ってしまった。素っ気ないなと思いつつも籠の中身を見てみると、クッキーらしき物と手紙が入っていた。クッキーには所々焦げ目がついている。

心配してくれたらしいサラに感謝しながらもクッキーを口に入れる。少し香ばしさが強いが、クッキーは中々美味しかった。手紙には馬鹿と書いてあった。わけわからん。

「はぁ……」

クッキーを口の中で味わいながら少し考える。あの修行内容だ。正直地獄に行ったような気分だった。ひたすらに首を飛ばされていく修行、というより虐殺。

あれはどうなんだろうか。正直二度と体験したくない。それに思出したくもない。

机の上の手紙に目を向ける。あの手紙を読んで自分で修行した方がいいんだろうか。あの手紙の内容によるけど、あの地獄のような修行よりはマシかもしれない。

そんなに急いで強くならなくても俺は良いと思ってる。あと九年半は時間がある。

(…… まあ 答えは決まってるんですけどね。 うじうじしてんなあ 俺は)

クッキーはもう食べ尽くしてしまったのでベッドから起きて、籠を机の上にある封筒の上に置いた。そして振り切るようにベッドへ身を投げた。

第二十六章（後書き）

正直投稿するか悩みましたがこの路線でいきます。一人称はやっぱ
り苦手です

第二十七章

翌日。昨日は退院手続き面倒くさかったなあと思いながらもまた空が暗い内に目を覚ました。何故かベッドから落ちているインカを元に戻しておいて、寝間着からコートに着替えて外に出る。

物凄く怖いけど自分は荒瀬さんの修行を選ぶことにした。楽な方を選ぶとサボり癖がつくのは身を持って経験済みだし、自分が死ぬ修行なんてよく考えれば荒瀬さんしか出来ないわけだし。そんな修行他人がやったら化け物扱いですよ。しかも自分では死ねないチキンですし。

酒好きな門番に挨拶して肌寒い風が吹く砂漠を進み、少し歩くと薄暗く砂しか見えない景色に黒点がポツンと浮かんでいた。何かを吐き出すように息を吐き、震える足を無理矢理動かして黒点に向かい砂原を走り抜ける。荒瀬さんの目の前に立った時に身震いが走ったのは寒さのせいじゃないだろう。

そんな自分の心境など露知らず、荒瀬さんは退屈そうに本を読んでいるんですけども。そりゃ棒立ちして待ってるなんて言わないけどさ！ そんなに退屈ですオーラ出さなくてもいいじゃないか！

「……ん？ 来たのか。少し意外だな。あれこれ自分に言い訳して来ないと思ってたんだが」

「確かにチキンですけども。というか言ってるのが的確すぎるんですけど！」

「俺も経験あるから大体わかるんだよ。ま、そんなことはいい。それじゃあちよっと待ってる」

荒瀬さんが本を閉じると昨日と同じように魔方陣を地面に描き、青い光が上空に打ち上がったと共に線のような傷が無数に付いている赤黒い大剣を異次元袋から取り出した。傷の中に血が入り込んでいるその大剣はさながら妖刀のように見えた。

「そういえばあの青いのは何なんです？」

「端的に言うとも蜃気楼みたいな結界魔法だ。確かギルドの女が使えたよな？ それと同じだよ」

荒瀬さんは砂を蹴り飛ばして魔方陣を消しながら気だるそうに答えた。見るからに不機嫌オーラが滲み出ている。何か怖いぞ。その鬱憤を俺にぶつけるとか……そんなことないよな？

魔方陣消したら結界魔法消えるんじゃないかと思っただけどそんなことはなかった。まあ自分は魔方陣使わないから詳しいことは知らないんだけど。

「それじゃあ始めようか。覚悟は決まってるみたいだし、手加減は無しだ」

「……昨日は本気を出してない？」

「魔法使っていないんだから当たり前だろうが。ショック死しないようにはしてやるから安心しろよお！」

その言葉と共に大剣が自分の左胸を貫いた。瞬間、激痛と共に息

が出来なくなる。相変わらず無茶苦茶すぎる。まず動きが見えないし足音さえも聞こえない。スナイパーが撃った銃弾を箸で挟めと言われてるようなもんだろこれ。

勢い良く大剣が引き抜かれてそこから見慣れた鮮やかな赤い血がドクドクと溢れ出す。血が足りないのか目眩がするし呼吸もしづらいが、三秒くらいで気分は良くなり傷も塞がった。

「最初はソフトにしてやったんだ。今日は逃げんなよ？ もし一回も俺に攻撃しなかったら臓器引きずり出すからな」

「……心臓潰しといてよくそんなことが言えますね」

またローブの穴が広がった。というかこのローブ丈夫とか言ってたおじさんは今すぐ出てこい。それこそ布切れみたいに斬られるぞ。やっぱり鎧とか買った方がいいのかな。

「ほら、剣なり魔法なり使ってこの大剣を壊してみろよ。そうすりゃ百回殺されずに済むぞ？」

そう、あの傷だらけで血だらけの大剣さえ壊せば。ファイヤーボールを一発でも当てれば壊れてしまいそうなあの大剣を壊せば俺の勝ち。

それに俺の腰にある喋る剣は結構な切れ味を持っているし、鏢競り合いに持ち込めば折れるかもしれない。剣の打ち合いに持ち込めれば折れるかもしれない。

ただ荒瀬さんの動きは目で追えないから何かで足止めしなきゃいけない。……魔法だな。戦闘に使えるような道具は残念ながら持ってきていない。便利そうだから買ったけど高いから財布が寂しくなるし、あれは大体魔物用だし。

そうだな。まずはダークネスを地面に広げて荒瀬さんの動きを封じてそれから剣を壊そう。そう作戦を決めて腰から剣を抜いて布を払って前に構える。荒瀬さんが動きそうになった時に持ち手を強く握りながら詠唱する。

「ダークネス。地面を侵食しろ」

「っと。聖なる光よ、闇を照らせ。光明^{ライト}」

闇の魔法を詠唱すると俺の足元から黒い液体みたいなのが地面を広がっていくが、荒瀬さんは何処からか紙を取り出してそう詠唱した。光と闇はお互いが弱点だったよな……。なら闇をもつと色濃くしてやる！

「津波になつて飲み込めえ！」

「聖なる光よ、全てを拒絶し我を守れ。防御聖陣^{シャインバリア}」

映画で見たような大津波をイメージして前に向かって思いっきり放つ。イメージは上手くいったらしく五メートルほどの黒い津波が荒瀬さんに向かう。そして荒瀬さんを飲み込んだ。

津波を荒瀬さんの周りに留まらせて様子を見る。動きは無いけど何かを結界魔法のような詠唱してたから防がれているんだろう。

「行けっ！」

あのくらいじゃ荒瀬さんは絶対倒せないので追撃に炎の槍と雷の槍を一本ずつイメージして、黒い塊に向かって飛ばす。その瞬間に黒い塊が四散して何か丸い物が目に映った。

荒瀬さんを囲うように鎮座しているクリーム色の結界。二つの槍が結界に当たるが甲高い音と共に弾き飛ばされ、しかも傷一つ付いていない。……光魔法の結界か。

「彼の視界を白く染めろ、フラッシュ閃光」

いきなり結界がヒビが入ったと思ったたらそこから眩い光が漏れ出てきた。詠唱から予測は出来たものあまりの眩しさに手で目を覆ってしまう。そんな大きな隙を荒瀬さんが見逃すはずもなく。

「はい。二回目」

荒瀬さんは目の前で大剣を抜刀するように切り払い、自分の体を切り裂いた。目を瞑ってしまったのでどうなったかわからないが、顔には砂の感触がする。立ち上がるうとしたが……足の感覚がない。

ない。

何が起こったか見たくないと言う自分の意思を無理矢理捻じ曲げて目を開けると、人生最悪の惨状が広がっていた。痛みが吹っ飛ばすほどの衝撃的な光景だった。

まず薄暗い空があった。星は無いが月はある変な空。右を見てみると 自分の下半身が臓器を曝け出しながら横たわっていた。自分のじゃないと現実逃避してみても灰色の見慣れた服が無情を告げる。ああ。駄目だ。

まさか自分の下半身の断面図を見ることになるとは思わなかった。嘔吐感が込み上げてくるが吐く物が入っている胃があるかもわからない。もう見るモノを見てしまったので覚悟を決めて首を上げ、自分の腹を見てみると

臓器が溢れ出していた。胃は破れているのかぐちゃぐちゃの物が血と混じって漏れだし、細長いモノに丸っこいモノ。ああああ。駄目だ駄目だ。

しかしそんな臓器鑑賞もすぐに終わりを告げた。瞬時に再生されていく自分の体。まずは腹から足まで骨が構築された。次に肉やら筋肉やら臓器が粘土の工作みたいに肉付けされていく。そしてその筋肉を肌色の皮が包み込んでおわり。その間十秒くらい。

自分の上半身と下半身が別れた。それで腹から何か出てきた。何か細長い管みたいなやつ。それと丸っこい変な赤いやつ。そしたらいきなり腹から骨が生えてきた。いきなり肉が付いていった。

気持ち悪い気持ち悪い！ 俺は人間だろ！ まるで、まるで…… 化け物じゃないか！

湧き上がってくる嘔吐感に身を任せ、吐きまくった。やはり胃は再生したてなのか黄色っぽい液体しか出てこない。なのにまだ嘔吐感は続く。喉が焼けるように痛い。だがそれもすぐに消えていく。気持ち悪い、気持ち悪い！

気持ち悪い。きつと吐きすぎて胃がイかれたんだ。腹に違和感がある。ああ。丁度良い棒切れがあるじゃないか。

その棒切れで腹を軽く叩いて違和感を取り除こうとするが取れない。違和感は取れない。全然取れない。何で取れない？ 何でだよ糞がつ！！ ああああああ取れるよおおっ！！

棒切れを強く腹へ叩きつける。だけど違和感は取れない。何か俺に呼びかけてくる。これが違和感の原因か？ 俺の体を化け物にした奴か？ そうだ。そうに違いない。俺をこんなにしゃがつて！ 俺の体から出て行けよ化け物おおおお！！

棒切れをひたすら腹に打ち付けて辺りを転がりまわって地面に腹を擦りつける。砂を腹に擦り込んで違和感を取ろうとする。声は止まない。俺を嘲笑うように声は止まない。

そうだ。こんな声が聞こえるってことは頭に化け物があるんだ。頭の中から聞こえてくるんだ。俺を惑わそうとしてるんだ。そうに違いない。殺してやる殺してやる！

棒切れを頭に振り下ろすと何かに止められた。やっぱりそうだ！ 頭の中に化け物がある。俺じゃないんだ！ 化け物は俺じゃない

！ ひひ。俺じゃない！ ひひやひやああ！ あははあはああ
はあはああああ！！

俺の手首を掴んでいる化け物を振り払う。死ね化け物！ 殺して
やるコ口してやるうウウ！！ 死ね死ねしねええええ！！

「もう、止めたらどうだ？」

「うるせええんだよおお！！ お前！ お前がコレか！ てめえが
ああああ！！」

前の黒い化け物に飛びかかる。いきなり頭が重くなった。奴が何
かの紙を持っている。化け物があああ！！ 今すぐ殺してやる死
ね死ね死ね！！

「クソ…化け物がっ！ 俺の中から出て行けよお！」

「……はあ。ほんとポルナレフ状態ですわ。まあまだマシな方が」

頭がまた重くなり、視界が失せた。次第に意識も消えていく。も
う駄目だ。俺は……。

「特訓は三日後の四時だ。別に来なくても責めはしないし呆れもしない」

「……今からやりますよ。荒瀬さんだつて忙しいでしょう？」

「敢えて言うけどな。三十分嘔吐して収まったと思つたら自分の剣で腹切り裂いて砂擦り込んで、拳句の果てに頭まで斬ろうとしたから止めた俺に寄生発しながら襲いかかつてきた奴が言うセリフか？
今は心の整理をしる。異論は認めない」

そう強制的に荒瀬さんは会話を打ち切り、部屋から出ていった。また、昨日の病室。今日は入院手続きをしていないから余計な手間が省けたのを喜ぶべきなのか。やったー。

そんな空元気が続くわけもなく虚しさと恐怖が心を支配する。昨日は意識が無かったから良かった。今までも再生はしてたが詳しくは見たことなかったし……ああ駄目だ。思い出しただけで……。

荒瀬さんの配慮なのか丁度いい場所に黒い袋があつたのでそこに胃液をぶちまけた。しばらく吐き続けていたら声が聞こえたのかマスクをした看護婦らしき人が背中を摩ってくれた。ありがたいと思いつつも吐き気が留まることは無かった。

「落ち着きましたか？」

「ありがとうございます……ございます。もう、大丈夫ですので」

そう言って異次元袋と剣を持ち、病院を後にした。心配そうに見

送ってくれた看護婦に感謝しながらも宿屋への道程を歩いていく。太陽は少し地平線へ傾いている。そういえば灰色のロープは何処にいったんだ？ いつの間にか黒色のTシャツと半ズボンに着替えたけど。

道行く人を見ていたら喧嘩を売られたことぐらいしかトラブルが無かったのは幸いなのか不幸なのか。宿屋につくと受付のサラが安否を確認してきたので、大丈夫とだけ答えて部屋に戻った。

「てーい」

部屋に入るなりインカが膝を立てて飛びかかってきた。鳩尾に膝がめり込んで倒れ込みそうになるが、すぐに気分は回復した。そのことにまた嫌悪しながらインカをベッドに放り投げていつものようにグルグル巻きにしておく。

「甘い、シュウト甘い」

何故かインカが布団を振りほどいて胸を張りながら立っていた。……きつと疲れで光の糸が脆かったんだろう。深く考えずにベッドに寝転んで毛布を被る。ギャギャーとうるさいインカ。

毛布を深く被って考える。インカを引き取ってくれる人も探さなきゃいけない。流石にそこは適当に選んで金渡して終わり、なんてことも出来ないので慎重に選ぶべきだと思うけど。……明日シロさんに聞いてこよう。このままじゃ絶対駄目だ。インカにとっても駄

目だし俺にとっても駄目だ。

俺がこんなに頑張っているのにインカはそれも知らずに遊ぼうと強請^{ねだ}ってくる。そんなことを思っ^てインカに苛立つ俺は最低な奴だな俺は、と深く自己嫌悪。

そうだ。この三日で体制を立て直そう。シロさんとも苦々しい別れ方をしてしまったしそれも謝らなければいけない。他にもやることは一杯ある。自分で書いたノートを読み返せば忘れてる何かも思いつけるかもしれない。そうだ。いつまでも吐いてる場合じゃないんだ。

本を読み返そう、そう思った俺は上に乗ってるであろうインカを振り落として毛布から這い出て、異次元袋を探った。

第二十七章（後書き）

書いてて主人公の自己嫌悪に苛立ちを隠せない、そんな毎日です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876u/>

孤高の塵人

2011年10月29日23時01分発行